

日本最高峰の がん医療教育施設 で学ぶ

国立がん研究センターでの研修を希望する
医師の皆さんへ

平成31年度 募集要項



国立研究開発法人

国立がん研究センター
National Cancer Center Japan

<https://www.ncc.go.jp/>



2 沿革／設立の目的とその使命
 4 ごあいさつ
 5 研修に関連する情報(学会認定)
 6 研修後の進路
 8 研修に関するQ&A
 9 研修に関連する情報(施設)
 11 連携大学院制度
 13 Facebook

14 【中央病院】
 15 研修制度概要
 18 研修課程
 54 がん専門修練医からのメッセージ
 55 レジデントからのメッセージ

56 【東病院】
 57 研修制度概要
 58 研修課程
 82 がん専門修練医からのメッセージ
 83 レジデントからのメッセージ

84 がん専門修練医募集要項
 86 レジデント(3年・2年・連携大学院)募集要項
 88 レジデント(短期)・専攻医募集要項
 90 採用試験日程
 91 交通案内

設立の目的とその使命

戦後、日本人の疾病構造が変化し、「がん」による死亡が増加し、その傾向はさらに強まることが予測されたため、国として、国民の医療・保健対策上の見地から、がん対策の中核として総合的な「がんセンター」の必要性が強く認識されました。そこで、1960年、当時の日本医学会会長、田宮猛雄氏ら9名の学識経験者からなる国立がんセンター設立準備委員会が発足し、「国立がんセンター」のあり方、将来構想など重要事項について検討し、厚生大臣宛に意見具申書を提出しました。それによって、1962年2月1日、「国立がんセンター」が正式に発足しました。その目的は、東京に理想的ながんセンターを設立して全国的ながん施策の中核にすることでした。

その後、1992年に千葉県柏市に国立がんセンター東病院が設立され、1994年には、東病院に隣接して研究所支所、2004年には、がん予防・検診研究センターが築地キャンパスに設立され、翌2005年には柏キャンパスの東病院の中に研究所支所の組織を改め臨床開発センターが活動を開始しました。さらに2006年10月には築地キャンパスにがん対策情報センターが設立され、より一層施設の拡張と充実がなされ、病院、研究所が一体となって予防、診療、研究、研修、情報収集・発信の分野において、我が国のがん施策の中心的な役割を果たして来ました。国立がん研究センター(平成22年4月1日、独立行政法人化により名称変更)は、我が国のみならず、世界的ながん対策の中核的な施設として、人類の悲願である「がん克服」に向けて、全力で取り組んでおります。(平成27年4月1日、国立研究開発法人国立がん研究センターに名称変更)



設立時の建物



外来診療棟竣工(昭和53年)



研究棟竣工(昭和56年)



東病院と次世代外科・内視鏡治療開発センター



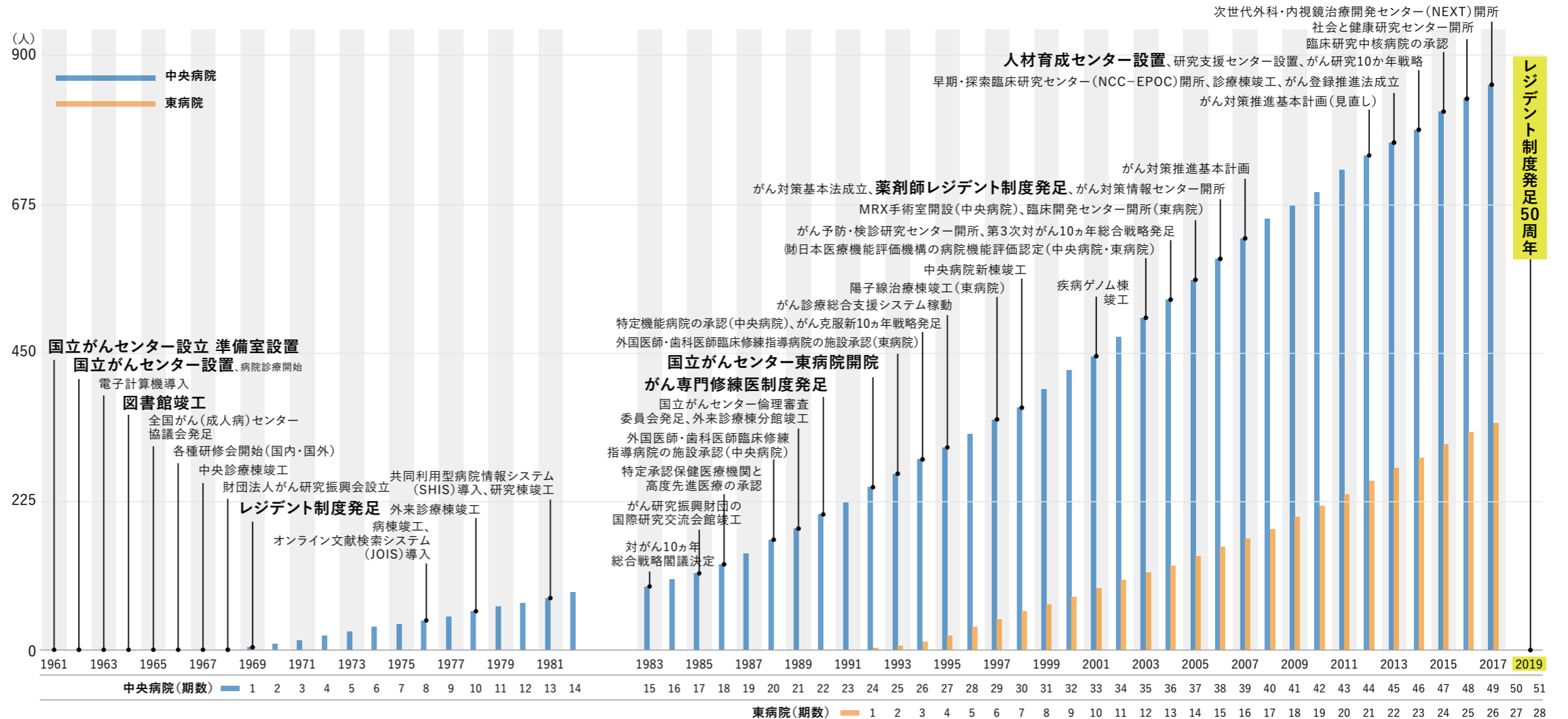
中央病院新棟竣工(平成10年)



「癌」の文字から「(ヤマイダレ)」を取り除き「品」とし、これを図案化したものです。(1970年制定)

国立がん研究センターのシンボルマークの3つの輪は、(1)診療(2)研究(3)教育をあらわしています。外側の大きな輪は患者・社会との協働を意味します(2014年)。

レジデント制度50年のあゆみ



社会と協働し、全ての国民に最適ながん医療を提供する
～日本のがん医療を牽引する国立がん研究センターのレジデント制度にご期待下さい～

国立がん研究センターは、昭和37年に東京築地に創設されました。以来、50年以上にわたり、わが国のがん医療の中核機関として日本のがん医療とがん研究を牽引する役割を担い続けています。

東京の築地キャンパスでは、がんの画期的な診断・治療法を実現してきた「中央病院」、がんの基礎研究に革新的な成果を挙げてきた「研究所」、がんの予防・早期発見の開発に加えて、公衆衛生、健康科学および社会学などの関連研究を担う「社会と健康研究センター」、最新で正確ながん情報を広く国民に提供する「がん対策情報センター」が一体となって、アカデミックセンターを形成しています。千葉県の柏キャンパスには「東病院」があり、陽子線治療棟、緩和ケア病棟などが備わっています。平成29年5月には次世代外科・内視鏡治療開発センター（NEXT）が開設されました。中央・東両病院ともに特定機能病院として、高度な医療・医療技術の開発や研修機能が期待されています。また、築地・柏両キャンパスの病院と連携して最先端の開発研究を推進する「先端医療開発センター（EPOC）」も併設されています。最近では、個々の患者さんに最適化された医療を提供する Precision Medicine（最適医療）を実現するために、ゲノム医療の実装に向けた体制構築にも精力的に取り組んでおり、平成30年3月には築地・柏両キャンパスの病院が、がんゲノム医療中核拠点病院に指定されました。

教育・研修に関しても様々な取り組みを進めています。慶應義塾大学、順天堂大学、東京慈恵会医科大学、長崎大学等との連携大学院制度を取り入れ、リサーチマインドを持ち、幅広い知見を備えた臨床医の育成を目指しています。平成26年には、教育・研修をサポートするための組織としての人材育成センターを新たに発足させ、若手の医師・研究者の育成体制を一層強化しています。国立がん研究センターは日本のがん医療の中心として、また将来の日本のがん医療・がん研究を担う人材を育成するための組織として常に進化し続けています。

シンボルマークの3つの輪は「診療」、「研究」、「教育」をあらわしています。医師、看護師、薬剤師をはじめとするがん医療従事者の教育・育成は、国立がん研究センターの重要なミッションです。レジデント制度は、体系的にがん医療を学び、がん専門医を養成する制度として昭和44年に創設されました。さらに、平成2年からは高度専門的な研修を行うがん専門修練医制度も取り入れてきました。当センターでがんに関するオールラウンドな教育を受けた医師が、日本国内だけでなく、世界各地でがん医療の発展のために活躍しています。平成30年度には国立がん研究センターレジデント制度開始50年を迎えました。次の50年を見据えて教育施設としての機能に磨きをかけ、これまで以上に多くのがん診療、研究に携わる方のキャリアアップに貢献し、がん医療の向上を目指したいと考えているところです。

本募集要項を手に入れている皆様は、私たちと同じ目標に向かい、同じ道を歩もうとされているのだと思います。がん患者さんに最適な医療を提供するために貢献されたいという皆様の思いに、センター一丸となって応えて行きたいと考えています。がんを克服するために世界最高の技術と知識を身につけたいと努力する者が互いに協働することにより、より大きな力となり、がん克服という目標に更に近くことが可能になると信じています。皆様の第一歩が、明日のがん医療・がん研究における大きな一歩となりますよう共に歩めることを心より願っています。

最高の診療・研究環境、そして50年を迎えた教育病院としての経験を兼ね備えた国立がん研究センターで、リサーチマインドを兼ね備えたがん医療の専門医としての、確かな一歩を踏み出してください。



理事長
中 釜 斉

学会の認定医・専門医教育病院の指定について

国立研究開発法人国立がん研究センターは、次の学会などの認定医・専門医教育病院として指定されています。

中央病院

- 日本内科学会
- 日本外科学会
- 日本医学放射線学会
- 日本肝胆膵外科学会
- 日本緩和医療学会
- 日本眼科学会
- 日本血液学会
- 日本呼吸器学会
- 日本呼吸器内視鏡学会
- 日本産科婦人科学会
- 日本耳鼻咽喉科学会
- 日本小児科学会
- 日本消化管学会
- 日本消化器外科学会
- 日本消化器内視鏡学会
- 日本カプセル内視鏡学会
- 日本消化器病学会
- 日本食道学会
- 日本整形外科学会
- 日本精神神経学会
- 日本胆道学会
- 日本超音波医学会
- 日本頭頸部外科学会
- 日本乳癌学会
- 日本脳神経外科学会
- 日本泌尿器科学会
- 日本放射線腫瘍学会
- 日本麻酔科学会
- 日本臨床腫瘍学会
- 日本がん治療認定医機構
- 日本IVR学会
- 日本形成外科学会
- 日本集中治療医学会
- 日本小児血液・がん学会
- 日本皮膚科学会
- 日本病理学会
- 日本婦人科腫瘍学会
- 日本輸血細胞治療学会
- 日本臨床細胞学会
- 呼吸器外科専門医合同委員会
- 日本静脈経腸栄養学会
- 日本臨床検査医学会
- 日本感染症学会

東病院

- 日本内科学会
- 日本外科学会
- 日本医学放射線学会
- 日本肝胆膵外科学会
- 日本緩和医療学会
- 日本血液学会
- 日本呼吸器学会
- 日本呼吸器内視鏡学会
- 日本耳鼻咽喉科学会
- 日本消化器外科学会
- 日本消化器内視鏡学会
- 日本消化器病学会
- 日本精神神経学会
- 日本大腸肛門病学会
- 日本超音波医学会
- 日本頭頸部外科学会
- 日本乳癌学会
- 日本泌尿器科学会
- 日本ペインクリニック学会
- 日本放射線腫瘍学会
- 日本麻酔科学会
- 日本臨床腫瘍学会
- 日本がん治療認定医機構
- 日本IVR学会
- 日本形成外科学会
- 日本病理学会
- 日本臨床細胞学会
- 日本核医学会
- 日本胸部外科学会
- 日本外科感染症学会
- 日本呼吸器外科学会
- 日本総合病院精神医学会
- 日本食道学会
- 日本気管食道科学会
- 日本肝臓学会
- 日本甲状腺外科学会

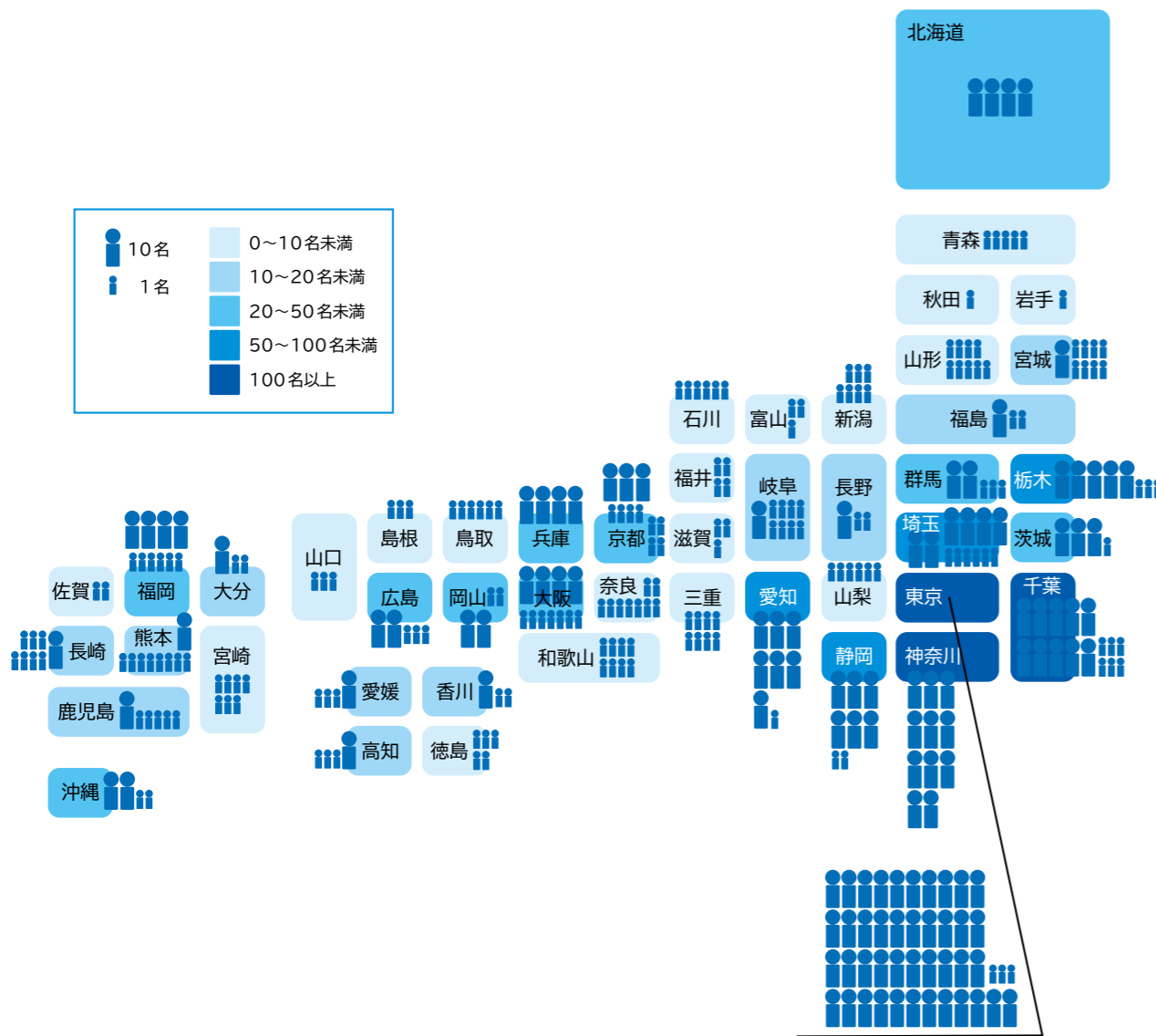
最新の施設認定状況については病院HPでご確認下さい。

研修後の進路

国立がん研究センター出身者は日本のがん医療を全国で支えている

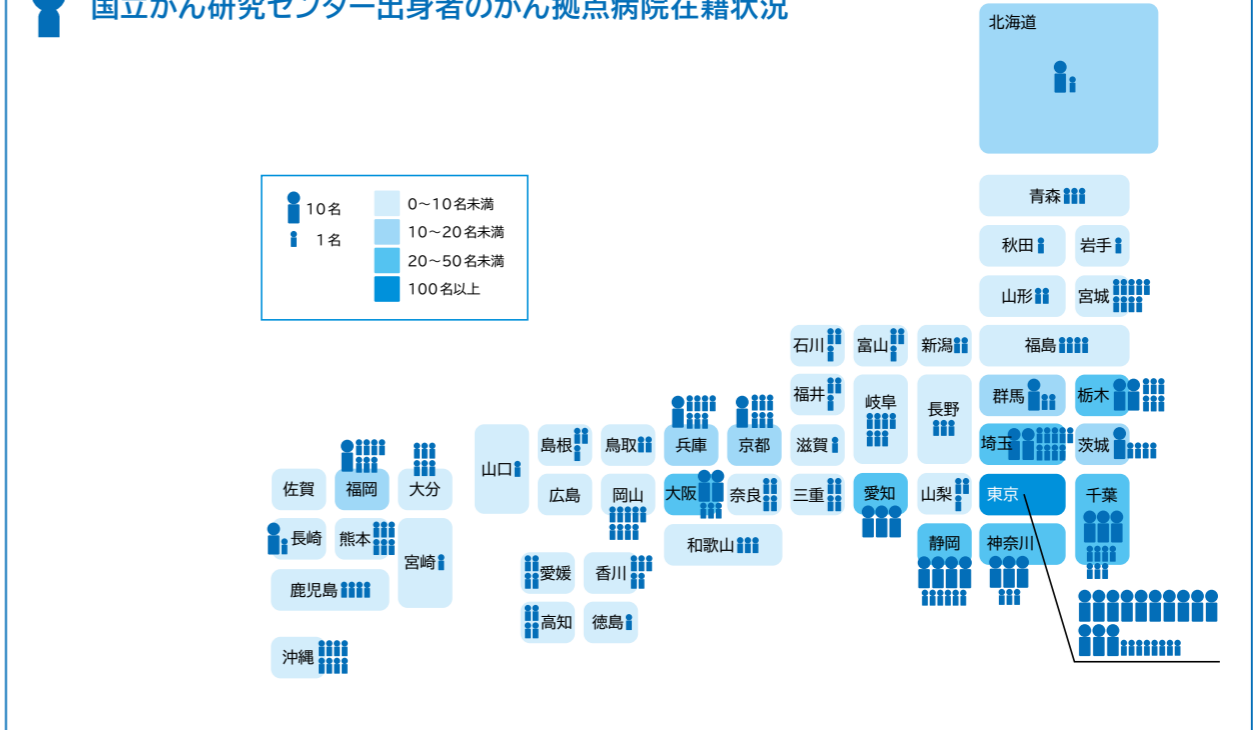
1962年に国立がん研究センター中央病院が、1992年には東病院が設立され、日本屈指のがん医療教育施設としての役割を担ってまいりました。教育・研修制度の中核と位置づけられているレジデント正規コースは、既に50年以上の歴史を持ち、医師専門研修制度としても日本有数の伝統を誇っています。レジデント正規コース修了相当の医師を対象として、さらなる専門性を探求し、臨床研究、基礎研究、トランスレーショナルリサーチ等について幅広く学ぶがん専門修練医制度も、開設後既に27年が経過しています。近年では、国内のがん医療の更なる均てん化に資するためのレジデント短期コースも設定され、国立がん研究センターの恵まれた教育環境を柔軟に活用できる体制が整っています。

国立がん研究センター出身者の活躍状況

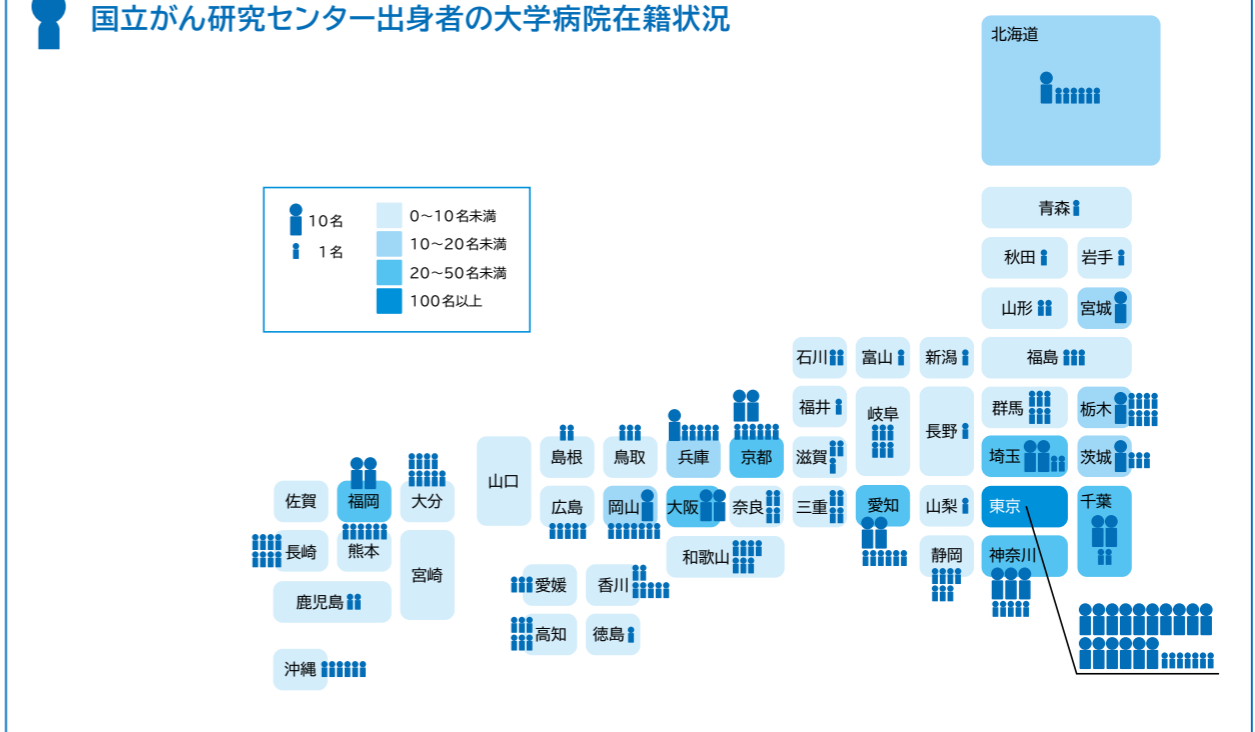


これらのレジデント制度を修了した医師、その他当院に勤務した医師の合計は1400人を超え、その多くが国内各地にその活躍の場を移し、大学病院、がん拠点病院におけるがん医療を担う中心的な役割を果たしています。また、各種専門医制度が整備されるなか、我が国においてさらなる充実が期待される、幅広いがん診療の修練を要求される日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医についても、国立がん研究センターの医師が最も多くを占めています。

国立がん研究センター出身者のがん拠点病院在籍状況



国立がん研究センター出身者の大学病院在籍状況



研修に関連する Q&A

Q 研修の特徴は何ですか？

A 当センターレジデントは第50期生を数え、内科、外科ともに、幅広い知識と技術を習得した腫瘍専門医の育成を目指しています。主な診療科をローテーションするシステムを採用し、がん種による偏りなく、薬物療法、手術療法、放射線療法などの実践的知識を身につけられる数少ないがん医療教育機関です。がん医療のエキスパートによる直接指導を受け、かつ全国から集まる医師との結びつきを通じて、知識・技術、人脈を獲得できます。

Q 関連領域を、ローテーションして研修可能ですか？

A 可能です。レジデントコースには関連領域も含め、腫瘍専門医として揺るぎない足場を固めるために必要十分なローテーションが組み込まれたプログラムがあります。領域にかかわらずがん治療に必要な知識、手技を習得するという目的で世界標準のローテーションプログラムを、50年以上前に日本で初めて提供開始した教育病院こそ、国立がん研究センターです。その研修制度は、がん医療が進歩するにつれ重要性を増しています。さらに、レジデントコース以外の先生方にも、関連領域を学ぶ機会が提供されています。

Q レジデント修了後の進路は？

A レジデント修了後、さらに専門性を高めたい方には当院のがん専門修練医コースが2年間用意されています。また、リサーチレジデント等として当院併設の研究所に引き続き所属し、臨床で得た疑問や着想を研究活動に活かしている先生方が多いことも特徴です。当然のことながら、当院修了後、各大学、研究機関、政府機関、地域のがん拠点病院、他の市中病院に異動され、それぞれの立場で腫瘍専門医として活躍されている方はさらに多くいらっしゃいます。

Q がん医療に関わった経験が少なく、がん専門病院での研修に不安があります。

A 当院ロゴマークにもあるように、国立がん研究センターの目標は、世界最高水準のがん診療、最新の治療法研究・開発、そして優れたがん医療教育の提供にあります。実際、当院で研修を開始される時点でほとんどがん治療に関する知識、技術がなかった先生方も、研修修了時点には腫瘍専門医としてひとり立ちできるまでに成長します。まずは現在の施設、環境で、内科、外科など基本領域の知識、技術を習得することに専念し、国立がん研究センターでの研修開始後の飛躍の礎を築いてください。

Q 教育環境について教えてください。

A 診療の現場では、頻度の多いがん種から希少がんまで幅広く、かつ他のどの施設よりも豊富な診療経験を、内科治療、外科治療、診断学、すべてのがん医療の局面で実践することが可能です。さらに、100件を超えるカンファレンス（診療科単位、合同カンファレンス等）が毎週開催され、当院研修中の皆さんが常に参加し、プレゼンテーションし、指導医のフィードバックを受けています。その結果、当院研修中もしくは修了後に、ほとんどの先生方が国内外の学会発表、英文・和文論文の執筆の機会に恵まれています。

Q 研究や学会活動について教えてください。

A 当院での研修中、臨床研究、基礎研究、学会発表、論文執筆等、なんらかの学術活動を実践することが可能です。Japan Clinical Oncology Group (JCOG) 等臨床試験グループをはじめとして、新たな治療法の確立のための臨床試験が数多く実施され、その経験が自らの研究の糧になっています。また、併設された研究所を中心として、豊富な臨床検体を用いた基礎研究を実践する機会にも恵まれています。その結果、レジデントの先生方による、国内外の学会発表、英文・和文論文執筆が活発に行われ、きめ細やかな指導医のサポートのもと優れた業績が築かれています。国内の学会参加については必要経費の補助制度も利用可能です（基準有）。

Q レジデント、がん専門修練医の給料はどのくらいですか？

A レジデントコースの月額が概ね336,000円（税込）で、がん専門修練医の月額は384,000円（税込）です。これ以外に時間外手当等の手当が付き、病院に直結した単身宿舎（有料）を借りることができるため、家賃負担が低減されています。さらに、診療科との相談、業務内容に応じて、休日に他病院のアルバイトをされている方もいらっしゃいます。

Q 新専門医制度への対応状況を教えてください。

A 国立がん研究センター中央病院、東病院ともに新専門医制度に対応しています。具体的には、中央病院については本冊子の18ページ、東病院については本冊子の58ページに対応状況が取りまとめられています。なお、新専門医制度自体の変更が多い状況が続いておりますため、最新の情報は教育連携係 (kyoiku-resi@ncc.go.jp) までご相談ください。

研修に関連する情報



多様な院内カンファレンス

100件を超えるカンファレンス（診療科単位、合同カンファレンス等）が毎週開催され、当院研修中の皆さんが常に参加し、プレゼンテーションし、指導医のフィードバックを受けています。

[築地キャンパス]



[柏キャンパス]



院内宿舎

希望者には病院に直結した院内宿舎が貸与され、研修や研究に専念しやすい環境が整備されています。

[築地キャンパス]

(単身用) 宿舎費は1ヶ月あたり10,000円から15,000円（光熱費、水道料金別）です。

[柏キャンパス]

(単身用) 宿舎費は1ヶ月あたり9,800円から11,000円（共益費、光熱水料別）です。

(世帯用) 宿舎費は1ヶ月あたり20,900円～22,100円（共益費、光熱水料別）です。



院内保育園

中央病院、東病院とも病院敷地内に院内保育園が完備されており、延長保育、夜間保育、休日保育、一時保育などに対応が可能な体制にあります。

【築地キャンパス】



【柏キャンパス】



図書館

がん対策や研究活動を支援するため資料を広く収集しており、がん医療に関する日本屈指の図書・蔵書を誇っています。近年はオンラインによる文献検索、二次資料サービスの施設契約を進めており、UpToDate®、Web of Science®、Cochrane Library®、医中誌®、メディカルオンライン®などをレジデントの先生方が自由に利用することが可能です。VPN導入により、電子ジャーナルも含めて、出張先でも利用可能になりました。



手術件数

中央病院では年間 5500 件、東病院では年間 3400 件ほどの手術が実施されており、その件数は年々増え続けています。



化学療法実績

年間 12 万 3000 回近くのがん化学療法（無菌調剤回数による）が実施されており、そのうち 9 万 2000 回近くが通院治療センターでの外来治療で行われています。

臨床試験



がん医療の未来を切り開くための治療開発は、国立がん研究センターの重要なミッションです。当センターでは、治験を年間約 880 件、治験以外の臨床研究を年間約 3000 件実施し、新しいがん医療創出の中心拠点として世界的な実績を多数あげています。

連携大学院制度

「学位」が取得できる画期的な連携大学院制度

国立がん研究センターは、慶應義塾大学、順天堂大学、東京慈恵会医科大学、長崎大学、それぞれと連携協力のための協定書を締結し、「連携大学院制度」を導入しております。

平成 24 年度から開始しているこの連携大学院制度は、レジデントなどの臨床研修期間中に、国立がん研究センター内で研究活動にも取り組み、その成果をもって学位の取得ができるという画期的なものです。国立がん研究センター内でも一部の授業科目の単位の修得を可能とするなど、連携大学院生の負担を軽減しつつ、十分な臨床研修・研究活動を行う環境を整備し、がんを専門領域とする若手医師が研究に取り組むことができる万全の態勢を整えています。平成 30 年度からは学位取得を目指す方を対象とした連携大学院コースも設定しました。

連携大学院制度は、リサーチマインドを持ち幅広い知見を持った臨床医を育成していくことを目的としています。多くの方がこの制度を利用することを期待しております。

【連携大学院制度の出願について】

すべての研修医に適用されるものではありませんので、研修コース・診療科によっては連携大学院制度をご利用いただけない場合があります。出願を希望される方は必ず下記までお問い合わせください。

連携大学院制度についてのお問い合わせ kyoiku-resi@ncc.go.jp

●連携大学一覧

国立がん研究センター
築地キャンパス
柏キャンパス

&

慶應義塾大学

【慶應義塾大学医学部・慶應義塾大学大学院医学研究科との連携大学院】

(築地キャンパス、柏キャンパス)

1 年次、2 年次は、毎週水曜日の夕方に、慶應義塾大学信濃町キャンパスで講義を受講しながら、国立がん研究センターで臨床研修や研究活動を行います。研究内容としては、4 年の間に基礎研究や臨床研究で成果を上げることが想定されています。入学試験等については、慶應義塾大学大学院医学研究科のホームページをご参照ください。 <http://www.med.keio.ac.jp/admissions/doctoral/guidelines.html>

国立がん研究センター
築地キャンパス
柏キャンパス

&

順天堂大学

【順天堂大学との連携大学院について】

(築地キャンパス、柏キャンパス)

順天堂大学にて開講される数週間ずつの基礎教育コース、実践教育コースや、夜間開講の大学院特別講義（Web 配信によるビデオオンデマンドでの受講も可）などを受講しながら、国立がん研究センターで臨床研修や研究活動を行います。研究内容としては、4 年の間に基礎研究や臨床研究で成果を上げることが想定されています。カリキュラム・入学試験等については、順天堂大学大学院医学研究科のホームページをご参照ください。カリキュラム <http://www.juntendo.ac.jp/graduate/kougi/> 電子シラバス <http://dr-syllabus.juntendo.ac.jp/> 入学試験 <http://www.juntendo.ac.jp/graduate/exam/admission.html>

教育・研修等に関する情報を随時掲載！

例

- 国立がん研究センターの研修制度、募集関連の情報
- 国立がん研究センターで開催されるセミナー、勉強会の情報
- 国立がん研究センタースタッフが行う講演会の情報
- 国立がん研究センタースタッフが主催するセミナー、勉強会の情報
- 国立がん研究センターから発信された新たなエビデンス、研究成果の情報

国立がん研究センター
築地キャンパス
柏キャンパス



&


東京慈恵会
医科大学



【東京慈恵会医科大学大学院医学研究科との連携大学院について】

(築地キャンパス、柏キャンパス)
東京慈恵会医科大学にて開講される共通カリキュラム（必修科目は平日 18 時以降、または土曜日に開講。選択科目は 1 科目 3 日～4 日間程度の集中授業、e-learning 科目も有）を受講しながら、国立がん研究センターで臨床に従事したまま研究活動を行います。研究内容は連携大学院教員の指導のもと、選択カリキュラムとして基礎研究や臨床研究で成果をあげ、学位取得を目指します。カリキュラムの概要や入学試験日程等については東京慈恵会医科大学大学院医学研究科のホームページをご参照ください。
<http://www.jikei.ac.jp/univ/gradu/index.html>

国立がん研究センター
築地キャンパス
柏キャンパス



&

長崎大学



【長崎大学との連携大学院について】

(築地キャンパス、柏キャンパス)
長崎大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程では、国立がん研究センターと連携して、医療科学専攻に「包括的腫瘍学分野」を設けています。この包括的腫瘍学分野で研究指導を受ける学生は、専攻の枠を越えた多様な科目を、講義室やオンデマンドで受講することができます。そのため、学生は長崎大学に通学することなく、国立がん研究センターで演習や研究指導を受けながら学位を取得することも可能です。包括的腫瘍学分野における研究では、がんの本態解明や予防などの基礎研究から、診断・治療や病態生理といった臨床研究、がんサバイバーシップや個別化医療開発といった応用まで、がんに関わる幅広いテーマが扱われています。
大学院ホームページ <http://www.mdp.nagasaki-u.ac.jp/index.html> 入学希望の皆さまへ <http://www.mdp.nagasaki-u.ac.jp/admission/index.html>

※前述の大学以外の大学院に在籍されている方も、現在の在籍先の承認が得られれば当院で研修が可能です。



アクセス方法

中央病院 <http://www.facebook.com/CancerEducation/>
東病院 <http://www.facebook.com/nceasteducation/>



中央病院



東病院

- ・研修制度概要
- ・研修課程
- ・がん専門修練医からのメッセージ
- ・レジデントからのメッセージ

研修制度概要

がん専門修練医

"各領域のリーダーを目指す"

原則として当センターのレジデント修了者、またはサブスペシャリティ領域専門医取得相当の医師を対象とし、がんの診断・治療・研究に必要な高度先進的な知識と技術を有するがん診療の専門医を育成することを目的としています。研修年限は2年で、指導医のもとで高度の知識・技術の習得・開発、さらには臨床研究、トランスレーショナルリサーチ、基礎研究も実践します。各領域の将来のリーダーを目指す人材の育成を目的とした研修制度です。



レジデント(3年コース・2年コース)

"国立がん研究センター教育・研修制度の中核"

原則として医師免許取得後3年目以降、基本領域専門医取得相当の者を対象に、複数診療科のローテーション研修、あるいは特定診療科の研修を通して、がんに関する幅広い知識と技術の習得を目指します。我が国を代表する指導医のもとでがん診療、がん研究に従事することにより、日本のがん医療を支える、すぐれたがん専門医を育成することを目的とした、国立がん研究センター教育・研修制度の中核となる研修制度です。2年コースについては研修開始時期が選択可能です。



レジデント(短期コース)

がん医療の均てん化に貢献することを目的として、柔軟な研修開始時期、研修期間により研修者のニーズに幅広く対応するための研修制度です。研修開始時期は4月、7月、10月、1月から選択可能です。研修期間は最短3ヶ月です。

連携大学院コース

学位取得を目指す研修者を対象とした、レジデントとがん専門修練医を組み合わせたコースです。

専攻医コース(基幹施設型・連携施設型)

新専門医制度のもと、当センターでの研修を希望される研修者を対象としたコースです。

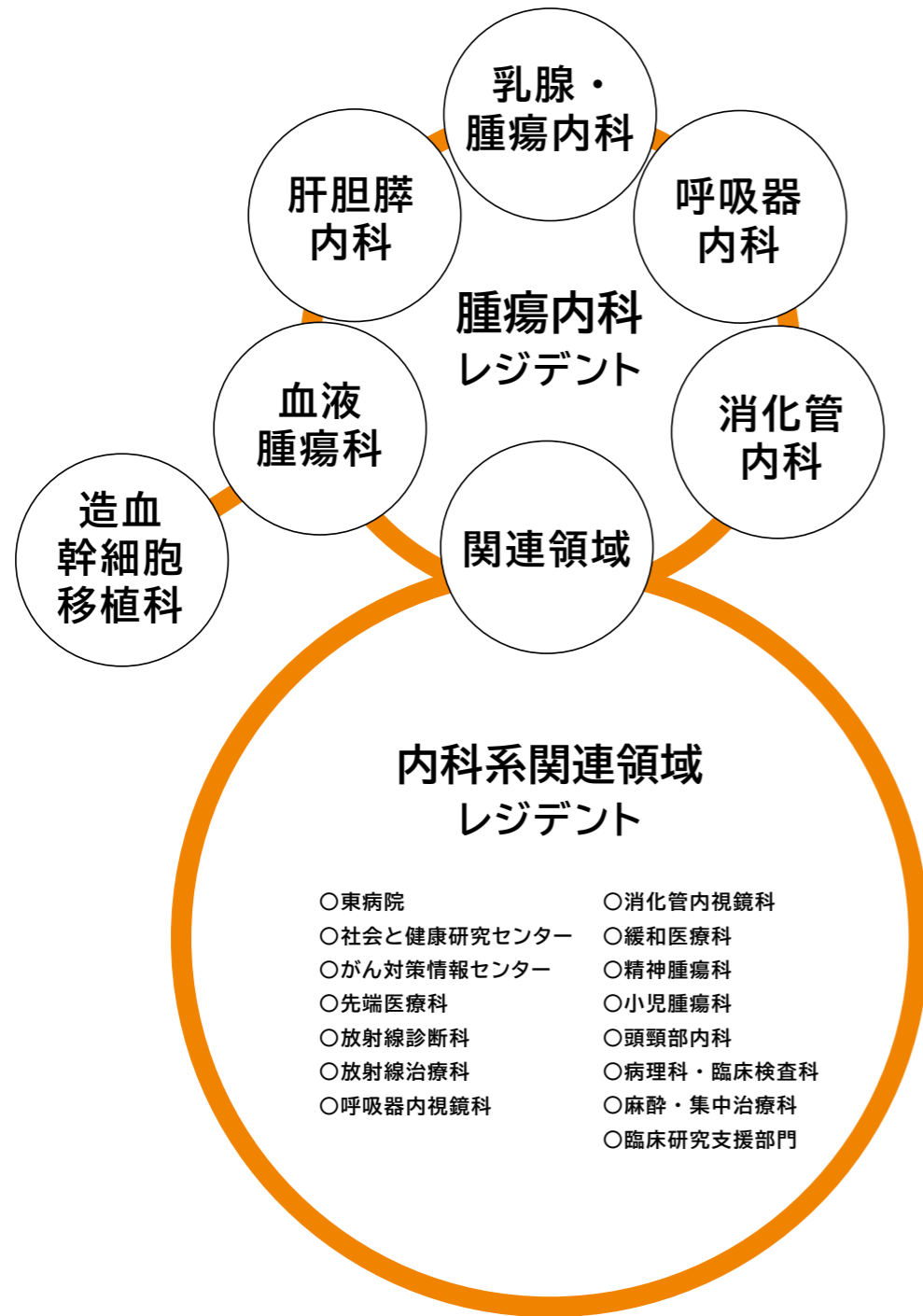
任意研修

1日以上任意の期間で研修できる制度です。処遇、手続き等が通常のレジデント制度とは異なるため、希望される方は下記までお問い合わせください。

任意研修についてのお問い合わせ kyoiku-resi@ncc.go.jp

研修制度概要

腫瘍内科 レジデントコースのイメージ



Point01

がん専門医へのスタンダード

がん研究センターが50年以上にわたって提供し続けている教育システムには、世界レベルの腫瘍内科研修を行うために必要なものがすべて揃っています。

Point02

ローテーション

すべてのがん種と必須の関連領域（緩和医療、集中治療）をカバーし、かつ各々が国内最高峰の診療科のローテーションにより、最高の腫瘍内科研修を行います。

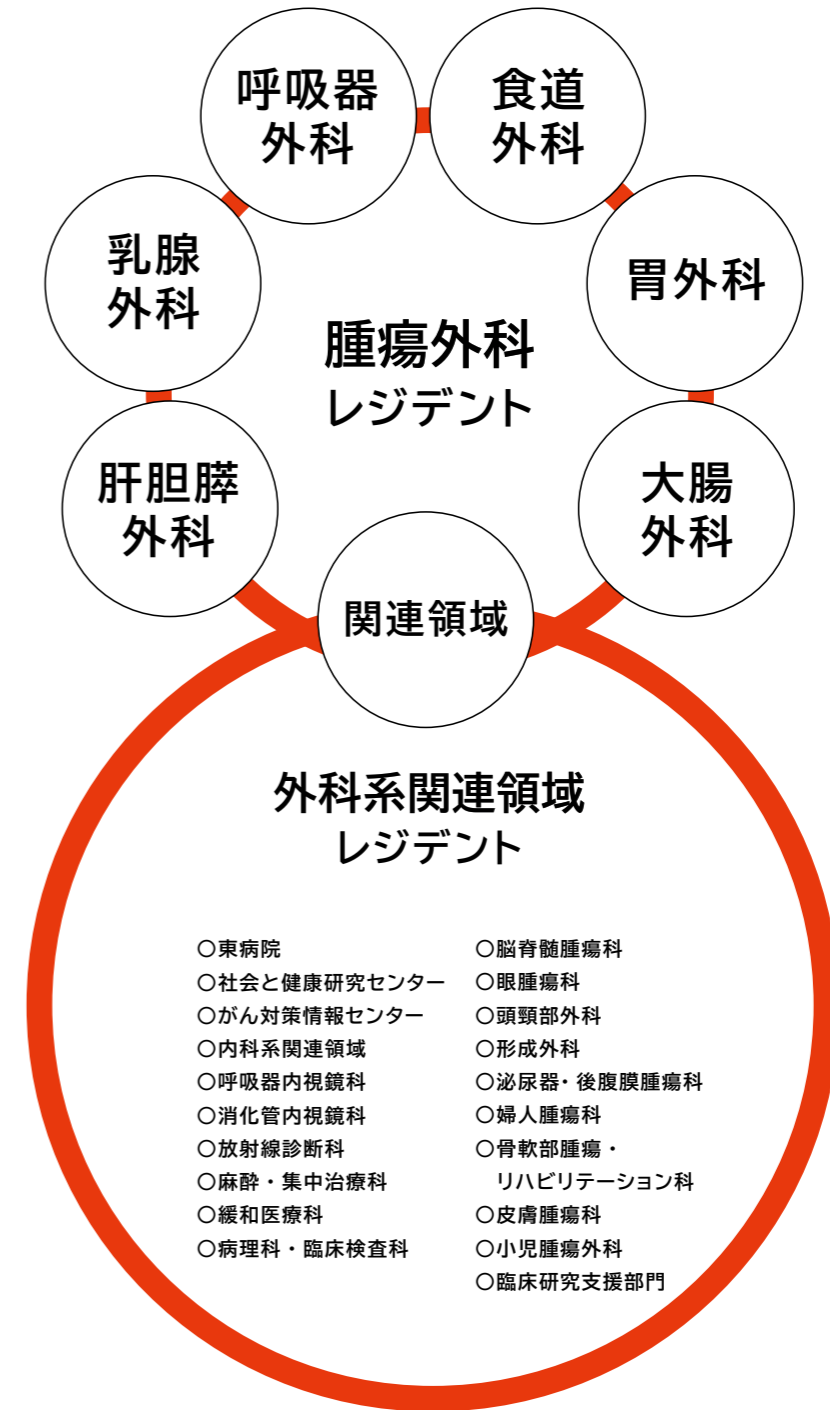
Point03

選択研修

レジデントコースでは、自らの選んだ選択研修を組むことが可能です。

研修制度概要

腫瘍外科 レジデントコースのイメージ



Point01

がん専門医へのスタンダード

がん研究センターが50年以上にわたって提供し続けている教育システムには、世界レベルの腫瘍外科研修を行うために必要なものがすべて揃っています。

Point02

ローテーション

すべてのがん種と必須の関連領域（病理、緩和医療、集中治療）をカバーし、かつ各々が国内最高峰の診療科のローテーションにより、最高の腫瘍外科研修を行います。

Point03

選択研修

レジデントコースでは、自らの選んだ選択研修を組むことが可能です。

	コース	がん専門 修練医	レジデント					専攻医
			3年	2年	連携大学院	短期(最短/最長)		
1	腫瘍内科総合	—	○	—	—	—	—	○
2	血液・腫瘍内科	—	○	—	—	—	—	—
3	呼吸器内科	○	○	○	○	3か月	1年	○*1
4	消化管内科	○	○	○	○	3か月	1年	○*1
5	肝胆膵内科	○	○	○	○	3か月	1年	○*1
6	消化器内科総合	○	○	○	○	6か月	1年	—
7	乳腺・腫瘍内科	○	○	—	○	3か月	1年	○*1
	⇒乳腺薬物療法/婦人科腫瘍薬物療法/腫瘍内科	—	—	○	—	—	—	—
8	血液腫瘍科	○	○	○	—	3か月	1年	○*1
9	造血幹細胞移植科	○	○	○	—	3か月	1年	○*1
10	先端医療科	○	○	○	○	3か月	1年	○*1
11	小児腫瘍科	○	○	○	○	3か月	1年	—
12	頭頸部内科	○	○	○	—	6か月	1年	—
13	放射線治療科	○	○	○	—	3か月	1年	○
14	放射線診断科	○	○	○	—	3か月	1年	○
15	内視鏡科(呼吸器)	○	○	○	○	3か月	1年	○*1
16	内視鏡科(消化管)	○	○	○	○	3か月	2年未満	○*1
17	緩和医療科	○	○	○	○	3か月	1年	○*1
18	精神腫瘍科	○	○	○	—	3か月	1年	○
19	外科総合	—	○	—	—	—	—	○
20	呼吸器外科	○	—	○	○	3か月	1年	○*2
21	食道外科	○	—	○	○	3か月	1年	○*2
22	胃外科	○	—	○	○	3か月	1年	○*2
23	大腸外科	○	—	○	○	3か月	1年	○*2
24	肝胆膵外科	○	—	○	○	3か月	1年	○*2
25	乳腺外科	○	—	○	○	3か月	1年	○*2
	⇒乳腺専門医取得コース	—	—	○	—	3か月	2年未満	—
26	脳脊髄腫瘍科	○	○	○	○	3か月	1年	○
27	婦人腫瘍科	○	○	○	—	6か月	1年	○
28	頭頸部外科	○	○	○	—	3か月	1年	○
29	形成外科	○	—	○	—	6か月	2年未満	○
30	泌尿器・後腹膜腫瘍科	○	○	○	○	3か月	1年	○
31	骨軟部腫瘍・リハビリテーション科	○	○	—	—	3か月	1年	○
32	皮膚腫瘍科	○	○	○	—	6か月	2年未満	○
33	小児腫瘍外科	—	—	—	—	3か月	6か月	—
34	眼腫瘍科	○	—	○	—	3か月	1年	○
35	麻酔・集中治療科	—	○	○	—	6か月	2年未満	—
36	病理科	○	○	○	—	3か月	1年	○
37	臨床検査科	—	—	—	—	—	—	○
38	歯科	—	○	○	—	3か月	1年	—
39	臨床研究支援部門	○	○	○	—	3か月	1年	—

* 1 内科学会専攻医は腫瘍内科総合にある専攻医コース所属となります

* 2 外科学会専攻医は外科総合にある専攻医コース所属となります

腫瘍内科総合

レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科を、各3ヶ月以上ローテーションする 上記以外の期間は自由選択であり、希望する診療科に最長約1年半まで在籍可能 ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※原則として、日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	腫瘍内科全般の幅広い診療経験をつむことが可能です 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※日本内科学会総合内科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、緩和医療科、内視鏡科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

血液・腫瘍内科

レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：血液専門医・がん薬物療法専門医 ・研究：機会に応じて国内・国際学会での筆頭演者、peer review journal での筆頭著者
	研修内容	血液腫瘍科を6ヶ月以上ローテーションする 呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科を、各2ヶ月以上ローテーションする 上記以外の期間は自由選択である ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※原則として、日本血液学会血液専門医カリキュラム・日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った研修を行う
	研修の特色	血液内科・腫瘍内科全般の幅広い診療経験をつむことが可能であり、血液専門医およびがん薬物療法専門医の両方を取得するために十分な症例を経験することができます 機会に応じて国内・国際学会、peer review journal 論文執筆等の研究活動も可能です

呼吸器内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医または呼吸器専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・胸部悪性腫瘍領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は呼吸器内科、1年間は自由選択 ※ 呼吸器内科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、呼吸器専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上呼吸器内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修、呼吸器良性疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	呼吸器内科研修で最も推奨されるコースです 呼吸器内科を中心に幅広い診療経験を積むことが可能です ※ 3年在籍者の経験症例数（例1）：肺癌122例、血液11例、消化器59例、乳腺26例、婦人科腫瘍13例、肉腫など希少がん22例 ※ 3年在籍者の経験症例数（例2）：肺癌150例、血液11例、消化器83例、乳腺30例、婦人科腫瘍6例、肉腫など希少がん40例 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医、呼吸器専門医の両方、いずれかの取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上呼吸器内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修、呼吸器良性疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	呼吸器内科を中心に診療経験を積むことが可能です
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、呼吸器専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	がん薬物療法専門医、呼吸器専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として日本内科学会総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、胸部悪性腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	呼吸器内科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

消化管内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・消化器悪性腫瘍領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・臨床試験・研究を立案する
	研修内容	初年度には、短期間での消化管内科での研修後、希望に応じて、研究所で Translational Research を学ぶことが可能。2年度には、消化管内科で臨床試験などの研究活動に参加し、学会発表や論文を作成し、可能であれば臨床試験・研究を立案する
	研修の特色	卒業後も、自分自身で研究を立案することのできる医師の育成を目指している。研修中に研究グループなどを通じて他施設の医師とも交流し、本コースの卒業後にも継続して共同研究できるようになっていただきたい。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医、他、消化器病・消化器内視鏡専門医 ・国際学会・英文論文の筆頭発表者・著者
	研修内容	初年度は、6か月以上消化管内科で研修を行い、その後2年度までに他の臓器別診療科や先端医療科などのがん薬物療法専門医取得に必要な研修（1診療科3か月）および希望に応じてその際肝胆膵内科・消化器内視鏡科、放射線診断（IVR）科、病理科などの消化器関連の消化器がん関連科を中心にローテーションする。3年度は、希望するサブスペシャリティ領域で診療だけでなく研究活動を行う。
	研修の特色	基本的には、消化器領域をサブスペシャリティとしてがん薬物療法専門医取得を目指したプログラムである。研究の一環として、研究所で Translational Research を学ぶこともできる。また、がん診療を中心とした消化器病・消化器内視鏡専門医を目指した研修も可能である。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・消化器領域のがん診療における知識・技術の取得 ・国際学会・英文論文の筆頭発表者・著者
	研修内容	初年度は、6か月以上消化管内科で研修を行い、その後2年度までに肝胆膵内科・消化器内視鏡科、放射線診断（IVR）科、病理科などの消化器関連の消化器がん関連科を中心にローテーションする。3年度は、希望するサブスペシャリティ領域で診療だけでなく研究活動を行う。
	研修の特色	基本的には、消化器内科として診断から治療までの広範な消化管がん診療の専門家を目指したプログラムである。研究の一環として、研究所で Translational Research を学ぶこともできる。また、希望に応じて、がん薬物療法専門医、がん診療を中心とした消化器病・消化器内視鏡専門医を目指した研修も可能である。
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡など ・学位取得：大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を意識して、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	がん薬物療法専門医、消化器系専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です ・4-5年の長期間の研修ですので、自分自身の目標にむかって、基礎実験も含めてしっかり研修することが可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	・短期間の研修で、消化管がんの基本的な診療経験を積む ・研修終了後も臨床研究グループなどを通じて関係を継続する
	研修内容	消化管内科を中心に最短3か月から最長1年の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	・研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です ・これまで多くの短期研修医は、終了後も研究活動を継続して、学会発表や論文発表することができています。

肝胆膵内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・肝胆膵悪性腫瘍領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は肝胆膵内科、1年間は自由選択 ※ 肝胆膵内科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、他、消化器病・消化器内視鏡専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者、臨床試験の立案
	研修内容	研修期間のうち1年以上肝胆膵内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、病理科、消化器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修、肝胆膵疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	肝胆膵領域の悪性疾患に対する化学療法、内視鏡検査・治療を中心に幅広い診療経験をつむことが可能です ※ 診療内容：肝細胞癌、胆道癌、膵癌、肝胆膵領域の神経内分泌腫瘍などの診断・治療・化学療法・内視鏡検査（超音波内視鏡を含む内視鏡検査・処置）肝腫瘍に対する生検、ラジオ波焼灼療法、エタノール局注療法などに携わる十分な機会があります。 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医、消化器病・消化器内視鏡専門医の両方、あるいはいずれかの取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上肝胆膵内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、消化器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修、肝胆膵疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	肝胆膵内科を中心に診療経験をつむことが可能です 化学療法、肝胆膵に関わる内視鏡検査・治療（主に胆膵内視鏡）、肝腫瘍等に対する経皮的処置（生検、ラジオ波焼灼療法、エタノール局注療法など）にも携わる多くの機会を得られます。 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会もあります
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡など ・学位取得：大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を意識して、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	がん薬物療法専門医、肝胆膵系専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、肝胆膵領域の基本的な診療経験を積むことを目標としています ・肝胆膵領域の化学療法を学ぶ ・胆膵内視鏡を中心とした処置の適応を学ぶ
	研修内容	肝胆膵内科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

消化器内科総合（消化管+肝胆膵）

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医または消化器病専門医、消化器内視鏡専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・消化器悪性腫瘍領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち9か月消化管内科、9か月肝胆膵内科、6か月は自由選択 ※ 6か月は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 3か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、他、消化器病・消化器内視鏡専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者、臨床試験の立案
	研修内容	研修期間のうち6か月以上消化管内科、6か月以上肝胆膵内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、消化器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修、消化器疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	消化器領域の悪性疾患に対する化学療法、内視鏡検査・治療を中心に幅広い診療経験をつむことが可能です ※ 診療内容：消化器がんの診断・治療・化学療法・内視鏡検査（超音波内視鏡を含む内視鏡検査・処置）生検、ラジオ波焼灼療法、エタノール局注療法などに携わる十分な機会があります。 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医、消化器病・消化器内視鏡専門医の両方、あるいはいずれかの取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち6か月以上消化管内科、6か月以上肝胆膵内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、消化器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修、消化器疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	消化器腫瘍を中心に診療経験をつむことが可能です 化学療法、内視鏡検査・治療、経皮的処置（生検、ラジオ波焼灼療法、エタノール局注療法など）にも携わる多くの機会を得られます。 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会もあります
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、消化器病専門医、消化器内視鏡など ・学位取得：大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を意識して、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	がん薬物療法専門医、消化器系専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、消化器領域の基本的な診療経験を積むことを目標としています ・消化器領域の化学療法を学ぶ ・内視鏡を中心とした処置の適応を学ぶ
	研修内容	消化管内科、肝胆膵内科の各々に、3か月、6か月の期間在籍します（全体の在籍期間は最長6か月から最長1年） ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

乳腺・腫瘍内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・内科系・外科系の関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・腫瘍内科領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち前半の1年間は乳腺・腫瘍内科、後半の1年間は外来診療を担当しながら、研究所等でのリサーチや、他科のローテーションなど希望に応じた研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	乳腺・腫瘍内科研修で最も推奨されるコースです。乳癌、婦人科癌、肉腫やその他希少がんに関する臨床、研究、教育能力を高めることで、腫瘍内科医のリーダーとして活躍できる人材を育成する総合的なプログラムです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、乳腺専門医など ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者、追記
	研修内容	研修期間のうち1年以上乳腺・腫瘍内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 消化管内科、肝胆膵内科、呼吸器内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	乳腺・腫瘍内科では乳がん、婦人科がん、肉腫、希少がん、胚細胞腫瘍、原発不明がんなど、がん診療を幅広く経験し、他科のローテーションも含めて、腫瘍内科医としての土台を築くことが出来ます。 ※ 3年在籍者の経験症例数1例：乳腺・腫瘍内科（乳癌、卵巣がん、子宮頸癌、頭頸部癌、胚細胞腫瘍、肉腫、NEC、NET）206例、肺癌80例、血液40例、消化器38例 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
乳腺薬物療法 レジデント 2年コース	対象者	原則として下記の全ての条件を満たした医師を対象としています ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・内科系、外科系の専門医などを取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医、乳腺専門医など ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上乳腺・腫瘍内科に在籍し（1カ月程度の外来研修含む）、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 乳腺外科、病理科、放射線診断科、消化管内科、肝胆膵内科、呼吸器内科、血液腫瘍科、先端医療科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	乳癌を中心に、乳癌以外にも乳腺・腫瘍内科で担当する疾患の薬物療法を通して、薬物療法の知識・経験を高めます。希望に応じて乳癌診療に関連する科のローテーションも行えます。
婦人科腫瘍 薬物療法 レジデント 2年コース	対象者	原則として下記の全ての条件を満たした医師を対象としています ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・内科系、外科系、婦人科系の専門医などを取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医、婦人科腫瘍専門医など ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上乳腺・腫瘍内科に在籍し（1カ月程度の外来研修含む）、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 婦人腫瘍科、病理科、放射線診断科、消化管内科、肝胆膵内科、呼吸器内科、血液腫瘍科、先端医療科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	婦人科がんを中心に、婦人科がん以外にも乳腺・腫瘍内科で担当する疾患の薬物療法を通して、薬物療法の知識・経験を高めます。希望に応じて婦人科腫瘍の診療に関連する科のローテーションも行えます。
腫瘍内科 レジデント 2年コース	対象者	原則として下記の全ての条件を満たした医師を対象としています ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・内科系、外科系の専門医などを取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・がん薬物療法専門医など ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上乳腺・腫瘍内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 病理科、放射線診断科、消化管内科、肝胆膵内科、呼吸器内科、血液腫瘍科、先端医療科、放射線治療科、その他外科系診療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる※原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	希少がん（肉腫やその他の希少がん）や原発不明がんなどから希望の疾患を中心に、それ以外にも乳腺・腫瘍内科で担当する疾患の薬物療法を通して、薬物療法の知識・経験を高めます。希望に応じて考慮し関連する科のローテーションも行えます。
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、乳腺専門医など ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	がん薬物療法専門医等の取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、腫瘍内科腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	乳腺・腫瘍内科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（消化管内科、肝胆膵内科、呼吸器内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

血液腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医または血液腫瘍科専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・血液腫瘍領域における治療開発を含む高度な知識、技能を習得する ・チーム診療の中心としての指導力を身につける ・研究：国内・国際学会での筆頭著者、peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は血液腫瘍科、1年間は自由選択 ※ 血液腫瘍科以外の1年間は診療を離れ、病理科・研究所等での臨床・基礎研究に特化した研修が可能（希望研修先との調整が必要となる）
	研修の特色	すでに血液腫瘍に対する一定レベル以上の診療経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：血液専門医 ・研究：国内・国際学会での筆頭著者、peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち血液腫瘍科を1年以上ローテーションする。 上記以外の期間は自由選択 ※ 造血幹細胞移植科、呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、病理科等の希望診療科における研修が可能（1診療科3ヶ月を原則とする） ※ 6ヶ月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる※原則として日本血液学会血液専門医カリキュラムに則った研修を行う
	研修の特色	血液腫瘍に対する専門的な研修を希望される方に最も推奨されるコースです血液腫瘍科を中心に幅広い診療経験を積むことが可能であり、造血幹細胞移植を含む標準的薬物療法を広く学ぶことができます ※ 1年間経験症例数（例）：悪性リンパ腫54例、白血病22件、多発性骨髄腫4例 国内・国際学会、peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も確保されています ※ 研究活動（例）：国際学会1回、国内学会1回、英文論文1編（血液腫瘍科指導のみ）
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・血液専門医の取得を目標とする ・機会に応じて、国内・国際学会での筆頭著者、peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち血液腫瘍科を1年以上ローテーションする 上記以外の期間は自由選択 ※ 造血幹細胞移植科、呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、病理科等の希望診療科における研修が可能（1診療科3ヶ月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として日本血液学会血液専門医カリキュラムに則った研修を行う
	研修の特色	血液腫瘍科を中心に診療経験を積むことが可能です 機会に応じて国内・国際学会、peer review journal 論文執筆等の研究活動も可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、血液腫瘍に特化した診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	血液腫瘍科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 1年レジデントコースであれば、研修開始前に希望があれば、両科の調整により3ヶ月間の造血幹細胞移植科のローテーションが可能である。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて研修期間の選択が可能です

造血幹細胞移植科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・造血幹細胞移植分野の臨床研究を指導する人材の育成 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は造血幹細胞移植科、1年間は自由選択 ※ 造血幹細胞移植科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・造血幹細胞移植専門医の取得を目標としています ・機会に応じて、学会発表、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上造血幹細胞移植科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする）
	研修の特色	造血幹細胞移植科を中心に診療経験を積むことが可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として内科学総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、造血幹細胞移植の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	造血幹細胞移植科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 血液腫瘍科と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

先端医療科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師 ・がん早期新薬開発に強い興味をもつ医師
	研修目標	・第1相試験を中心にがん早期新薬開発における高度な知識・技能習得を目指す ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、海外研究者等との国際連携機会を得る事が可能
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は先端医療科、1年間は自由選択 ※ 先端医療科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 新薬開発に特化したより高度な研修内容を習得可能である2年間の先端医療科選択も可能
	研修の特色	がん新薬早期開発において最もお勤めの研修プログラムです。5年以上の臨床経験を有し、レジデント正規コース修了者に相当する学識を有する医師を対象とします。研修年限は2年で、新薬の第1相試験を中心に早期開発における知識・技術の習得により、日本のがん早期新薬開発を将来的に牽引する次世代リーダー人材育成を行います。希望者には研究所等でのトランスレーショナルリサーチ（TR）および海外研究者等との国際交流・共同研究等の機会をサポートします。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・がん早期新薬開発に強い興味をもつ医師
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医・総合内科専門医など ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者 ・第1相試験を中心にがん新薬早期開発における基本的知識・技術の習得
	研修内容	研修期間のうち1年以上先端医療科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、病理科、呼吸器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修、中央病院以外での研修等が認められる ※ 原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	先端医療科研修で最も推奨される基本コースです 先端医療科（第1相試験/がん新薬早期開発）を中心に幅広い診療経験が可能です 第1相試験やTRを中心にがん新薬早期開発における基本的知識・技術の習得を目指します 国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・がん早期新薬開発に強い興味をもつ医師
	研修目標	・がん薬物療法専門医・総合内科専門医などの取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者 ・第1相試験を中心にがん新薬早期開発における基本的知識・技術の習得
	研修内容	研修期間のうち1年以上先端医療科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、病理科、呼吸器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで東病院交流研修、中央病院以外での研修等が認められる ※ 原則として2年目に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う
	研修の特色	先端医療科（第1相試験/がん新薬早期開発）を中心に診療経験をつむことが可能です 第1相試験やTRを中心にがん新薬早期開発における基本的知識・技術の習得を目指します
連携大学院 コース (指導者育成一貫 コース)	対象者	原則として下記の全ての条件を満たした医師を対象としています ・採用時に医師免許取得後5年目以降 ・総合内科専門医取得済みもしくは取得見込み ・がん早期新薬開発に強い興味をもつ医師
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・第1相試験を中心にがん早期新薬開発における高度な知識・技能習得を目指す ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、海外研究者等との国際連携機会を得る事が可能
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	がん新薬早期開発における4-5年一貫性指導者育成コース研修プログラムです。5年以上の臨床経験を有し、新薬早期開発における知識・技術の習得により、日本の新薬早期開発の次世代指導者育成を行います。TR・基礎研究の知識・技術の習得を視野に、研究所で1年間の研修を行います。レジデント正規コース（新薬開発指導者育成コース）から継続一貫して研修を行うことで、新薬早期開発に必要な知識・技術すべてをカバーでき、世界の主要新薬早期開発リーダーと将来的に共同できるグローバルレベルの次世代リーダー育成を目指した専門的コースです。がん薬物療法専門医取得と同時に、学位取得も目指すコースです。国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする がん早期新薬開発に強い興味をもつ医師
	研修目標	短期間の研修で、第1相試験を中心にがん早期新薬開発に関する基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	先端医療科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

小児腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・小児血液・がん専門医またはがん薬物療法専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・小児血液・がん領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は小児腫瘍科、1年間は自由選択 ※ 小児腫瘍科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修も可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです 小児の造血器腫瘍、固形腫瘍、骨軟部腫瘍等の幅広い診療経験と治療・臨床試験の経験をつむことが可能です 主な疾患の3年間の症例数：ALL 21例、AML 4例、リンパ腫 4例、その他の造血器腫瘍 5例、横紋筋肉腫 12例、ユーイング肉腫 20例、骨肉腫 31例、網膜芽腫 34例、その他の骨軟部腫瘍 13例、その他の固形腫瘍 8例
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・小児科専門医取得済みもしくは取得見込み（本レジデント初年度に受験予定）
	研修目標	・小児血液・がん学会専門医、がん薬物療法専門医の両方、いずれかの取得を目標としています ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上小児腫瘍科に在籍し、乳腺・腫瘍内科、造血細胞移植科を、各3ヶ月以上ローテーションする 希望により、血液腫瘍科、病理診断科、放射線診断科、その他の科での研修も可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	小児腫瘍科研修で最も推奨されるコースです 小児がんのみならず、腫瘍内科の診療経験をつみ、小児血液・がん専門医のみならず、がん薬物療法専門医も取得することが可能です 小児の造血器腫瘍、固形腫瘍、骨軟部腫瘍等の幅広い診療経験をつむことが可能です 主な疾患の3年間の症例数：ALL 21例、AML 4例、リンパ腫 4例、その他の造血器腫瘍 5例、横紋筋肉腫 12例、ユーイング肉腫 20例、骨肉腫 31例、網膜芽腫 34例、その他の骨軟部腫瘍 13例、その他の固形腫瘍 8例 国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・小児科専門医取得済みもしくは取得見込み（本レジデント初年度に受験予定）
	研修目標	・小児血液・がん学会専門医、がん薬物療法専門医の両方、いずれかの取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上小児腫瘍科に在籍し、乳腺・腫瘍内科、造血細胞移植科を、各3ヶ月（最長合計6ヶ月まで延長可能）ローテーションする
	研修の特色	小児がんのみならず、腫瘍内科の診療経験をつみ、小児血液・がん専門医のみならず、がん薬物療法専門医も取得することが可能です 小児の造血器腫瘍、固形腫瘍、骨軟部腫瘍等の幅広い診療経験をつむことができます 主な疾患の3年間の症例数：ALL 21例、AML 4例、リンパ腫 4例、その他の造血器腫瘍 5例、横紋筋肉腫 12例、ユーイング肉腫 20例、骨肉腫 31例、網膜芽腫 34例、その他の骨軟部腫瘍 13例、その他の固形腫瘍 8例
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：小児血液・がん専門医、がん薬物療法専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	小児血液・がん専門医、がん薬物療法専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です 小児の造血器腫瘍、固形腫瘍、骨軟部腫瘍等の幅広い診療経験と治療・臨床試験の経験をつむことが可能です 主な疾患の3年間の症例数：ALL 21例、AML 4例、リンパ腫 4例、その他の造血器腫瘍 5例、横紋筋肉腫 12例、ユーイング肉腫 20例、骨肉腫 31例、網膜芽腫 34例、その他の骨軟部腫瘍 13例、その他の固形腫瘍 8例
レジデント 短期コース	対象者	原則として小児科学会専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、小児がんの基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	小児腫瘍科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

頭頸部内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医、がん治療認定医、または頭頸部がん専門医のいずれかを取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・頭頸部腫瘍の治療開発に関わる、高度な知識・技能を習得する ・国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者を担当する ・臨床試験・医師主導治験の立案・研究事務局を担当する
	研修内容	初年度には、入院・外来にて頭頸部・食道領域の悪性疾患の多彩な診療経験を積む。2年度には、頭頸部内科で臨床試験などの研究活動への参加、学会発表や論文執筆を行う。希望に応じて、研究所で Translational Research を学ぶことも可能。臨床試験などの研究の立案を行うことを目標とする。
	研修の特色	研修終了後も、自分自身で研究を立案することのできる医師の育成を目指している。研修中に研究グループなどを通じて他施設の医師とも交流し、研修終了後も継続して共同研究が出来る人材となることを目標とする。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医、または耳鼻咽喉科専門医のいずれかを取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：日本臨床腫瘍学会：がん薬物療法専門医がん治療認定機構：がん治療認定医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者、臨床試験の立案
	研修内容	初年度は、6か月以上頭頸部内科で研修を行い、その後2年度までに頭頸部外科・食道外科・消化管内科・放射線治療科・放射線診断科（IVR）・病理科などの頭頸部腫瘍関連科や専門医取得に必要な臓器別診療科（1診療科3か月を原則）での研修を希望に応じて行う。3年度は、入院・外来にて頭頸部・食道領域の悪性疾患の診療経験を積み、研究活動も行う。
	研修の特色	頭頸部腫瘍の化学療法の経験を積みたいという外科を専攻する医師の研修も歓迎しています。頭頸部・食道領域の悪性疾患に対する化学療法・化学放射線療法を中心に、幅広い診療経験をつむことが可能です。ニボルマブなどの免疫チェックポイント阻害薬、セツキシマブやマルチターゲットキナーゼ阻害薬などの分子標的薬といった治療も多く経験できます。研究の一環として、研究所で Translational Research を学ぶことも可能です。 ※ 診療：頭頸部・食道悪性腫瘍の診断、治療、新規治療開発（治験）に携わる十分な機会があります ※ 研究：臨床試験の立案、国内・国外学会の筆頭著者、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医、または耳鼻咽喉科専門医のいずれかを取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：日本臨床腫瘍学会：がん薬物療法専門医がん治療認定機構：がん治療認定医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年間は頭頸部内科をローテート（分割による研修も可）し、その他の研修期間を頭頸部外科・食道外科・消化管内科・放射線治療科・放射線診断科（IVR）・病理科などの頭頸部腫瘍関連科や専門医取得に必要な臓器別診療科（1診療科3か月を原則）での研修を希望に応じて行う。
	研修の特色	頭頸部腫瘍に対する化学療法の経験を積みたいという外科を専攻する医師の研修も歓迎しています。頭頸部・食道領域の悪性疾患に対する化学療法・化学放射線療法を中心に、幅広い診療経験をつむことが可能です。ニボルマブなどの免疫チェックポイント阻害薬、セツキシマブやマルチターゲットキナーゼ阻害薬などの分子標的薬といった治療も多く経験できます。研究の一環として、研究所で Translational Research を学ぶことも可能です。 ※ 診療：頭頸部・食道悪性腫瘍の診断、治療、新規治療開発（治験）に携わる十分な機会があります ※ 研究：国内・国外学会の筆頭著者、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする 内科・外科・放射線治療科などの科を問わず、頭頸部腫瘍の化学療法の経験を積みたいと希望する医師を対象とした短期研修です。
	研修目標	短期間の研修で、頭頸部腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています ・頭頸部腫瘍の化学療法を学ぶ ・頭頸部腫瘍の治療選択や治療中に必要な処置の適応を学ぶ
	研修内容	頭頸部内科に最短6か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする 初期の3ヵ月間は頭頸部内科での研修を必須とします。残りの期間も頭頸部内科での研修を継続できますが、希望に応じて頭頸部外科・食道外科・消化管内科・放射線治療科・放射線診断科（IVR）・病理科などの頭頸部腫瘍関連科や専門医取得に必要な臓器別診療科での研修（各科3か月程度）を行うこともできます。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

放射線治療科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・放射線科専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・放射線治療専門医を取得する ・小線源治療、外部照射、放射線同位元素内用療法などの高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1.5年間は放射線治療科、0.5年間は自由選択 ※ 放射線治療科以外の0.5年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：放射線科専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上放射線治療科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 放射線診断科、呼吸器内科、頭頸科、婦人科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として日本医学放射線学会研修カリキュラムガイドラインに則った研修を行う
	研修の特色	放射線治療科研修で最も推奨されるコースです 組織内照射を中心とした小線源治療や最新の治療装置を用いた外部照射など、あらゆる癌種の診療経験を積むことが可能です 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：放射線科専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上放射線治療科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 放射線診断科、呼吸器内科、頭頸科、婦人科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として日本医学放射線学会研修カリキュラムガイドラインに則った研修を行う
	研修の特色	組織内照射を中心とした小線源治療や最新の治療装置を用いた外部照射など、あらゆる癌種の診療経験を積むことが可能です 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 短期コース	対象者	原則として放射線科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、悪性腫瘍全体の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	放射線治療科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※放射線科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター中央病院放射線治療科に、1年単位、最長2年間在籍します 放射線科診断科が連携施設となっている場合には、連続して放射線診断科での研修も可能です
	研修の特色	連携施設で研修を積む他領域の専攻医や指導医と密に連携し、後方支援として貢献できる放射線診療を修得することができます

放射線診断科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・放射線科専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・放射線診断専門医を取得する ・腫瘍に関する画像診断、IVRに関する高度な知識と手技を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1.5年間は放射線診断科、0.5年間は自由選択 ※放射線診断科以外の0.5年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：放射線科専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上放射線診断科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※放射線治療科、呼吸器内科、頭頸科、婦人科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※6か月まで研究所、東病院交流研修、中央病院以外での研修が認められる ※原則として日本医学放射線学会研修カリキュラムガイドラインに則った研修を行う
	研修の特色	放射線診断科研修でも推奨されるコースです CT、MRI、PETなどによる画像診断はもとより、IVRの研修も十分に積めます。 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：放射線科専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上放射線診断科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※放射線治療科、呼吸器内科、頭頸科、婦人科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※6か月まで研究所、東病院交流研修、中央病院以外での研修が認められる ※原則として日本医学放射線学会研修カリキュラムガイドラインに則った研修を行う
	研修の特色	CT、MRI、PETなどによる画像診断はもとより、IVRの研修も十分に積めます。 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も確保されています
レジデント 短期コース	対象者	原則として放射線科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、悪性腫瘍全体の画像診断やIVRの経験を積むことを目標としています
	研修内容	放射線診断科に最短3か月から最長1年の期間在籍します ※原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※放射線科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター中央病院放射線診断科に、1年単位、最長2年間在籍します 放射線科治療科が連携施設となっている場合には、連続して放射線治療科での研修も可能です
	研修の特色	連携施設で研修を積む他領域の専攻医や指導医と密に連携し、後方支援として貢献できる放射線診療を修得することができます

内視鏡科（呼吸器）

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・気管支鏡専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・呼吸器内視鏡領域における診断・治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導試験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は内視鏡科（呼吸器）、1年間は自由選択 ※内視鏡科（呼吸器）以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：気管支鏡専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上内視鏡科（呼吸器）に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器外科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※6か月まで研究所、東病院交流研修、呼吸器良性疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	呼吸器内視鏡を中心に幅広い診療経験を積むことが可能です 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・気管支専門医の取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上内視鏡科（呼吸器）に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器外科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※3か月まで東病院交流研修、呼吸器良性疾患の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	呼吸器内視鏡を中心に診療経験を積むことが可能です
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：気管支鏡専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせてプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできませんが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	気管支鏡専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、呼吸器内視鏡の基本的な診療経験を積むことを目標としています 6ヶ月以上の研修で論文作成を前提とした研究を行います
	研修内容	内視鏡科（呼吸器）に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする ※全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（呼吸器内科、呼吸器外科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

内視鏡科（消化管）

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・消化管内視鏡専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療の高度な知識、技能を習得する ・研究：国内・国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の計画・実施に参画する
	研修内容	2年間の研修期間に特化して、より高度な内視鏡診断・治療を研修する
	研修の特色	基本的な消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療の経験と実績を有する医師を対象とし、将来のリーダーを育成するコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医または外科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療の基本的な知識・技能を習得する ・専門医取得：消化管内視鏡専門医 ・研究：国内・国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	専攻コースは、第1年次初期（2～3ヶ月間）および第2年次後半から第3年次（約1.5年間）にかけて消化管内視鏡科を研修する。専攻コース以外のローテーション期間では、病理科など診断部門および内科部門が選択可能である
	研修の特色	消化管内視鏡を中心に幅広い診療経験をつむことが可能です 内視鏡の基礎となる病理科での研修を行います 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医または外科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療の基本的な知識・技能を習得する ・専門医取得：消化管内視鏡専門医 ・研究：国内・国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	専攻コースは、第1年次初期（2～3ヶ月間）および第2年次後半から（約6ヶ月間）にかけて消化管内視鏡科を研修する。専攻コース以外のローテーション期間では、病理科など診断部門および内科部門が選択可能である
	研修の特色	消化管内視鏡を中心に幅広い診療経験をつむことが可能です 内視鏡の基礎となる病理科での研修を行います 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる ・消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療の基本から高度な知識、技能を習得すると同時に、学位取得を目指す ・専門医取得：消化管内視鏡専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修目標	レジデント3年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半の2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修内容	消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療の基本から高度な知識、技能を習得すると同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
	研修の特色	
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医または外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	3か月から2年まで任意の研修期間（3か月毎）で、消化管腫瘍に対する内視鏡診断・治療に特化し、研修期間に応じた知識・技能を習得する 1年以上の研修で論文作成を前提とした研究を行います
	研修内容	内視鏡科（消化器）に最短3か月から最長2年未満の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

緩和医療科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・緩和医療認定医・専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・緩和・支持療法領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は緩和医療科、1年間は自由選択 ※ 緩和医療科以外の1年間は、他診療科での研修や、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医など基本領域の専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：日本緩和医療学会緩和医療専門医 ・機会に応じて国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上緩和医療科に在籍する。それ以外の期間は最低6か月の緩和医療専門研修を含む自由選択（最大21か月） ※ 精神腫瘍科、放射線診断科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、呼吸器内視鏡、放射線治療科等の希望診療科も研修可能。 ※ 本コース研修期間をもって緩和医療認定医・専門医を取得する場合は、2年間の緩和医療に関する専門研修と必要があるため、2年間の緩和医療科に在籍または、関連する診療科・緩和ケア病棟や在宅など専門院外研修を選択する必要があります（応相談）。
	研修の特色	がん診療における緩和ケアを学ぶための推奨されるコースです 緩和医療専門医にふさわしい診療経験をつむことが可能です。 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医など基本領域の専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・緩和医療認定医または専門医の取得を目標としています ・機会に応じて、国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上緩和医療科に在籍し、自由選択（最大6か月） ※ 精神腫瘍科、放射線診断科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能。 ※ 6か月まで東病院交流研修、の院外研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 本コース研修期間をもって緩和医療認定医・専門医を取得する場合は、2年間の緩和医療に関する専門研修と必要があるため、2年間の緩和医療科に在籍または、関連する診療科・緩和ケア病棟や在宅など専門院外研修を選択する必要があります（応相談）。
	研修の特色	がん緩和ケアを中心に診療経験を積むことが可能です
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる ・専門医取得：緩和医療専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修目標	レジデント3年コースもしくは2年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修内容	緩和医療専門医取得と並行して、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
	研修の特色	
レジデント 短期コース	対象者	原則として内科学会総合内科専門医など基本領域の専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、がん緩和ケアの基本的な診療経験を積むことを目標としています 緩和医療認定医・専門医取得のために必要なスキルを学ぶことができます。 緩和ケアチーム医師としての診療を学ぶことも可能です。
	研修内容	緩和医療科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（精神腫瘍科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科等）と組み合わせた研修も可能 ※ 緩和医療認定医・専門医を取得する場合は、2年間の緩和医療に関する専門研修と必要があるため、これまでの研修期間をふまえて他の診療科での研修選択期間を留意してください。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

精神腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本総合病院精神科専門医および日本サイコオンコロジー学会認定登録精神腫瘍医のいずれかを取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・精神腫瘍領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験の事務局を担当する
	研修内容	高度な臨床経験を積むだけでなく、積極的に研究プロジェクトへの参画を推奨する。
	研修の特色	精神腫瘍学のスペシャリストを養成するコースです。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み ・日本総合病院精神科専門医および日本サイコオンコロジー学会認定登録精神腫瘍医の取得を目指すもの
	研修目標	・精神腫瘍医としてあらゆる臨床場面に対応できる臨床能力を得る ・関連部門のローテーションを通じて、がん医療に精通する。 ・EBMに精通し、研究にもコミットする ・日本総合病院精神科専門医および日本サイコオンコロジー学会認定登録精神腫瘍医を取得する
	研修内容	必須ローテーション以外は自由選択であり、希望する診療科に最長約2年半まで在籍可能 ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	我が国でもっとも症例数が多い緩和ケアチームの一員として、十分な臨床経験を積むことが可能。 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み ・日本総合病院精神科専門医および日本サイコオンコロジー学会認定登録精神腫瘍医の取得を目指すもの
	研修目標	・精神腫瘍医としてあらゆる臨床場面に対応できる臨床能力を得る ・関連部門のローテーションを通じて、がん医療に精通する。 ・日本総合病院精神科専門医および日本サイコオンコロジー学会認定登録精神腫瘍医を取得する
	研修内容	必須ローテーション以外は自由選択であり、希望する診療科に最長約1年半まで在籍可能 ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	我が国でもっとも症例数が多い緩和ケアチームの一員として、十分な臨床経験を積むことが可能。 3年コースに比べ、より臨床経験に特化したものとなっております。
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする 一般精神医学の経験はあるが、精神腫瘍学の経験を十分に積みたいもの
	研修目標	短期間の研修で、精神腫瘍学に関する診療経験を積むことを目標とする
	研修内容	精神腫瘍科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする ※全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（緩和医療科、内科各科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。
専攻医 コース (連携施設型)	対象者	※日本精神神経学会専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、精神腫瘍学に関する診療経験を積むことを目標とする
	研修内容	精神腫瘍科に3か月、6か月、9か月、1年間在籍します。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

外科総合

レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医、呼吸器外科専門医、乳癌認定医、大腸肛門病学会専門医、マンモグラフィ読影認定医 ・研究：国内・国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	呼吸器外科、胃外科、大腸外科、食道外科、肝胆膵外科、乳腺外科を、各3ヶ月以上ローテーションする。このうち、重点を置く科を一つ選択する。 上記以外の期間は自由選択であり、希望する診療科に最長約1年半まで在籍可能。 ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※原則として、日本外科学会教育研修プログラムに則った研修を行う
	手術経験数	呼吸器外科：レジデントはそれぞれ週5-6件の手術を担当医として受け持ち、豊富な手術経験を積むことが可能です。 胃外科：開腹・腹腔鏡ともに十分な経験が積めます。 大腸外科：開腹・腹腔鏡手術ともに十分な執刀経験が積み、ロボット手術手技も助手を通じて学びます。 食道外科：頸部郭清を中心に腹部と胸部操作の助手及びカメラ操作を指導します。 肝胆膵外科：3か月間で肝切除1~3例を執刀することを目標とします。肝胆膵領域の画像診断、周術期管理を経験し、肝胆膵外科手術の助手を通じて手技を学びます。6か月間以上ではこの倍以上の経験となります。 乳腺外科：術者としてローテーション期間1単位（3か月間）で約30症例を執刀します。
研修の特色	外科全般の幅広い診療経験を積むことが可能です。 また、臨床試験による標準治療確立の過程を学ぶことができます。 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。	
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※日本外科学会専門医取得のための研修を目的としたコース以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長2年間在籍する。 呼吸器外科、胃外科、大腸外科、食道外科、肝胆膵外科、乳腺外科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションする。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

呼吸器外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本呼吸器外科学会専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・肺癌を中心とする胸部悪性腫瘍における手術治療、集学的治療、周術期管理等、高度な知識、技能を習得する ・呼吸器外科専門医の取得（未取得の場合） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は呼吸器外科、1年間は自由選択 ※呼吸器外科以外の1年間は診療を離れ、病理科、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：呼吸器外科専門医 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上呼吸器外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※呼吸器内科、放射線治療科、放射線診断科、病理科、内視鏡科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※3か月まで中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	肺癌手術件数全国1位である当院で、幅広く胸部悪性腫瘍手術に関する研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を体験して頂きます。希望により中央病院以外でも研修が可能です。
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：呼吸器外科専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年のレジデントコースに、連携大学院制度（4年）を組み合わせたプログラムです。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※レジデント3年コースもしくは2年コース終了後の大学院在籍期間（1-2年）は、がん専門修練医（2年）、レジデント（1年）もしくは任意研修生（1-2年）として中央病院に所属します ※がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	呼吸器外科専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです。 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、肺癌を中心とする胸部悪性腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標とする
	研修内容	呼吸器外科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする ※全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳腺外科、頭頸部外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

食道外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本消化器外科学会専門医および食道認定医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・食道癌における手術治療、集学的治療、周術期管理等、高度な知識、技能を習得する ・食道外科専門医、内視鏡外科学会技術認定医の取得 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は食道外科、1年間は自由選択 ※ 食道外科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	手技の達成度により、頸部郭清から腹腔鏡下胃管再建を指導しますが、本コースは基本的に腹部操作ができる医師のコースであるため、胸腔鏡下食道切除を重点的に指導する。 腹部操作：20例以上 胸部操作：10例程度
	研修の特色	High volume center である当院で、胸腔鏡・腹腔鏡手術をはじめ幅広く食道癌手術に関する研修が可能です。日本内視鏡外科学会技術認定医の取得を目標に研修を積んで頂きます。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により東病院食道外科でも研修が可能です。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医、食道認定医 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上食道外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳癌外科、頭頸部外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	手技の達成度により、頸部郭清から指導を行い、腹腔鏡下胃管再建さらには胸腔鏡下食道切除の術者となることも可能です。 頸部郭清：20例以上 腹部操作：10例以上 胸部操作：1例程度
	研修の特色	High volume center である当科で、胸腔鏡・腹腔鏡手術をはじめ幅広く食道癌手術に関する研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により東病院食道外科での研修が可能です。
連携大学院 コース	対象者	・レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医、食道認定医、食道外科専門医、内視鏡外科学会技術認定医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年の正規コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は任意研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	手術経験数	レジデント2年コースとがん専門修練医に準ずる
	研修の特色	消化器外科専門医、食道科認定医、食道外科専門医、内視鏡外科学会技術認定医取得と同時に、学位取得を目指すコースです。国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、食道癌の基本的な診療経験を積むことを目標とする
	研修内容	食道外科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳癌外科、頭頸部外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等）と組み合わせた研修も可能 ※ 基本的には、手術見学および助手のみの研修となります
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

胃外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本消化器外科学会専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・胃癌における手術治療、集学的治療、周術期管理等、高度な知識、技能を習得する ・内視鏡外科学会技術認定医の取得 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は胃外科臨床、1年間は自由選択 ※ 胃外科以外の1年間は臨床を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院での臨床交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	手技の達成度により、早期から進行胃癌に対する開腹胃切除のすべての術式を術者として経験する。早期胃癌に対する腹腔鏡下胃切除を術者として行う。 術者 約80件/年 助手 約160件/年
	研修の特色	High volume center である当院で、開腹・腹腔鏡手術ともに幅広くすべての胃癌手術に関する研修が可能です。腹腔鏡手術に関しては日本内視鏡外科学会技術認定医の取得を目標に研修を積んで頂きます。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により東病院胃外科でも研修が可能です。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上胃外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 食道外科、呼吸器外科、大腸外科、肝胆膵外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	手技の達成度により、開腹幽門側胃切除・胃全摘から指導を行い、腹腔鏡下胃切除の術者となることも可能です。 術者 約40件/年 助手 約120件/年 胃外科ローテーションの期間により経験数は増加する。
	研修の特色	High volume center である当科で、開腹・腹腔鏡手術をはじめ幅広く胃癌手術に関する研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により東病院胃外科での研修が可能です。
連携大学院 コース	対象者	・レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医、内視鏡外科学会技術認定医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年の正規コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は任意研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	手術経験数	レジデント2年コースとがん専門修練医に準ずる
	研修の特色	消化器外科専門医、内視鏡外科学会技術認定医取得と同時に、学位取得を目指すコースです。国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、食道癌の基本的な診療経験を積むことを目標とする
	研修内容	食道外科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳癌外科、頭頸部外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等）と組み合わせた研修も可能 ※ 基本的には、手術見学および助手のみの研修となります
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

大腸外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本消化器外科学会専門医および大腸肛門病学会専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・大腸癌における手術治療、集学的治療、周術期管理等、高度な知識、技能を習得する ・内視鏡外科学会技術認定医の取得 ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は大腸外科、1年間は自由選択 ※ 大腸外科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	High volume center である当院で、開腹手術、腹腔鏡手術およびロボット支援下手術を含め幅広く大腸癌手術に関する研修が可能です。側方郭清、ISR、骨盤内臓全摘などの高度手術手技の習得および日本内視鏡外科学会技術認定医の取得を目標に研修を積んで頂きます。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により東病院大腸外科でも研修が可能です。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医、大腸肛門病学会専門医 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	・3年レジデントコースの後期ローテーションに相当する期間のみの研修。 ・各科部門各分野のローテーションを行う。ローテーションの単位は3か月とし、必ず全6分野（呼吸器外科、食道外科、胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳腺外科）のローテーションを行う。ただし、骨盤内臓、腫瘍内科、放射線科などの目的で他のコースを選択肢に含むことも可能である。
	研修の特色	3年レジデントコースの後期ローテーションに相当する期間のみを研修するコースです。大腸外科に関しては、high volume center である当院で、開腹手術、腹腔鏡手術およびロボット支援下手術を含め幅広く大腸癌手術に関する研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。
連携大学院 コース	対象者	・レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医、大腸肛門病学会専門医、内視鏡外科技術認定医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年の正規コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は任意研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	研修の特色	消化器外科専門医、大腸肛門病学会専門医、内視鏡外科技術認定医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、大腸癌の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	大腸外科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、婦人科、泌尿器科、病理科、消化器内科、内視鏡科）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

肝胆膵外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とします ・当センターのレジデント修了者 ・日本消化器外科学会専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師 ・肝胆膵外科高度技能専門医を目指す医師
	研修目標	・肝胆膵領域における手術治療、集学的治療、周術期管理等の質の高い知識、技能を習得 ・肝胆膵外科高度技能専門医の取得のために必要症例の半分の経験 ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は肝胆膵外科、1年間は自由選択 ※ 肝胆膵外科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められます
	手術経験数	当科予定手術の周術期管理を指揮し、ほとんどの症例で助手として参加します。個々の手技の達成度に合わせて、肝系統切除、膵癌に対する膵体尾部切除、膵頭十二指腸切除術、肝門部胆管癌手術を、自分の力で執刀することを目標とします。 【目標執刀高難度手術症例数】 膵体尾部切除術 5例 肝系統切除 10例 膵頭十二指腸切除術 8例 肝門部胆管癌手術 2例
研修の特色	High volume center である当院における研修の中で、代表的高難度手術である膵頭十二指腸切除術、肝門部胆管癌手術を中心に、一般的な肝切除、膵体尾部切除術、腹腔鏡下肝膵切除術・膵中央切除術・LECS(腹腔鏡内視鏡共同手術)などの機能温存低侵襲手術など、幅広い肝胆膵外科手術の研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。地元病院やセンター病院の肝胆膵外科を牽引していくリーダーを育てます。	
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とします ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医 ・肝胆膵外科高度技能専門医必要症例の半分の経験 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上肝胆膵外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 胃外科、大腸外科、食道外科、乳腺外科、頭頸部外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで中央病院以外での研修が認められます
	手術経験数	肝切除術：25例以上/年、膵切除：25例以上/年に助手もしくは執刀医として参加します。 個々の手技の達成度によって、肝部分切除から肝系統切除、膵体尾部切除、さらには膵頭十二指腸切除術の術者となることも可能です。
研修の特色	High volume center である当院における研修の中で、代表的高難度手術である膵頭十二指腸切除術、肝門部胆管癌手術を中心に、一般的な肝切除、膵体尾部切除術、腹腔鏡下肝膵切除術・膵中央切除術・LECS(腹腔鏡内視鏡共同手術)などの機能温存低侵襲手術など、幅広い肝胆膵外科手術の研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により他の消化器外科、病理科、放射線診断科、東病院肝胆膵外科での研修等も可能です。	
連携大学院 コース	対象者	・レジデント3年コースまたは2年コースに準じます
	研修目標	・専門医取得：消化器外科専門医 ・肝胆膵外科高度技能専門医必要症例の一部の経験 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年コースもしくは2年コースの後に、2年のがん専門修練医コースで研修を継続することを想定したプログラムです。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は任意研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません
	手術経験数	レジデント2年コースとがん専門修練医に準じます
研修の特色	消化器外科専門医の取得し、肝胆膵外科高度技能専門医取得のために必要症例を経験しながら、学位取得を目指すコースです。国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です	
レジデント 短期コース	対象者	原則として外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とします
	研修目標	短期間の研修で、肝胆膵領域の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	肝胆膵外科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とします ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（食道外科、胃外科、大腸外科、呼吸器外科、乳腺外科、頭頸部外科、病理科、消化器内科、内視鏡科、放射線治療科等）と組み合わせた研修も可能 ※ 基本的には、手術見学および助手のみの研修ですが、場合によって症例を担当することもできます。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

乳腺外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として、以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・乳腺専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・診断・手術治療・術後管理・補助治療等の高度な知識・技能の習得 ・専攻医取得：乳腺専門医、マンモグラフィ読影認定医 A または AS ・研究：国内学会での筆頭演者（口演、シンポジウム）、国際学会での筆頭演者（約1～2回以上/年）、査読付き学術誌での筆頭著者2編以上（欧文執筆）
	研修内容	1年目は乳腺外科に在籍し、2年目は自由選択 乳腺外科以外の1年間は診療を離れ、国立がん研究センター 研究所等での研究に特化した研修が可能です。
	研修の特色	乳腺外科としての技術および能力を有する者（乳腺専門医取得者あるいは取得見込み者）を対象とするコースであり、手術経験数は勿論のこと、乳腺外科全体の運営・手術の中心的役割や外科レジデントの指導にも携わること、将来の乳腺外科医のリーダーとなるべき人材育成に力を入れたコースです。
レジデント 2年コース	対象者	原則として、以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専攻医取得：外科専門医、乳腺専門医、マンモグラフィ読影認定医 ・研究：国内または国際学会での筆頭演者（約2回以上/年）、査読付き学術誌での筆頭著者1編以上（欧文執筆を目標とする）
	研修内容	9ヶ月以上の期間で乳腺外科に在籍し、それ以外の期間は他一般外科 ^{※1} ・乳腺関連科 ^{※2} の自由選択（最大9か月）が認められる。 ^{※1} 食道外科、胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、呼吸器外科 ^{※2} 形成外科、病理・臨床検査科、放射線診断科、生理検査科（乳房超音波検査）、乳癌腫瘍内科 等の乳癌疾患に関連する科6か月まで、外科専門医取得を目的とした連携病院での研修が認められます。
	研修の特色	2年間、乳腺外科や希望する他一般外科・乳腺関連科の研修を行うことにより、効率的かつ集中的にトレーニングを積むことが可能なコースです。
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専攻医取得：外科学会専門医、乳腺専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国内または国際学会での筆頭演者（約2回以上/年）、査読付き学術誌での筆頭著者2～3編以上（欧文執筆を目標とする）
	研修内容	外科総合レジデントコース / レジデント2年コース / 乳腺専門医取得コースに、2年間のがん専門修練医コース※をあわせたプログラムです。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません。
	研修の特色	国立がん研究センター中央病院の症例数および最先端の研究内容を基盤として、外科専門医や乳腺専門医などの専攻医取得と共に、就労しながらの学位取得を目指すことが可能なコースです。 2012年度から連携大学院制度の運用が始まり、現在、当科からは1名の学位取得と1名の取得見込み者（2018年度）を輩出しております。
レジデント 短期コース	対象者	原則として、外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする。 ※主に、乳腺専門医取得を目指している医師、短期の乳腺外科研修を希望している医師を対象としたプログラムです。
	研修目標	・専攻医取得：乳腺専門医、マンモグラフィ読影認定医 A または AS ・研究：国際学会での筆頭演者、査読付き学術誌での筆頭著者（欧文執筆）
	研修内容	乳腺外科に最短3か月から最長2年未満の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする 乳腺外科の在籍期間中は各個人相談に応じ、他一般外科 ^{※1} ・乳腺関連科 ^{※2} の自由選択（最大6か月）が可能です。 ^{※1} 食道外科、胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、呼吸器外科 ^{※2} 形成外科、病理・臨床検査科、放射線診断科、生理検査科（乳房超音波検査）、乳癌腫瘍内科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする）
	研修の特色	短期間の研修期間内で、集中的に乳腺外科の研修を行うことが可能であり、乳腺専門医としての人材育成を目指していきます。積極的に学会発表や論文執筆も経験して頂きます。
乳腺専門医取得 コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後5年目以降 ・日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専攻医取得：乳腺専門医、マンモグラフィ読影認定医 ・手術経験数：乳腺専門医取得に必要な件数以上 ・研究：国内または国際学会での筆頭演者（約2回以上/年）、査読付き学術誌での筆頭著者1編以上（欧文執筆を目標とする）
	研修内容	2年の研修期間中、乳腺外科を中心に、乳腺専門医取得に必要な専門知識である乳腺関連科 ^{※1} を経験することが出来ます。 ^{※1} 形成外科、病理・臨床検査科、放射線診断科、生理検査科（乳房超音波検査）、乳癌腫瘍内科 等の乳癌疾患に関連する科
	研修の特色	2年間、集中的に乳腺関連の研修を行うことが可能なコースであり、将来の乳腺専門医としての人材育成を目指していきます。乳腺専門医取得に必要な手術経験症例数を短期間で取得すると共に、多数の最先端研究をもとに、学会発表および論文執筆を経験することが可能です。
乳腺専門医取得 短期コース	対象者	原則として、日本外科学会専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする。
	研修目標	・専攻医取得：乳腺専門医、マンモグラフィ読影認定医 ・手術経験数：乳腺専門医取得に必要な件数以上 ・研究：国内または国際学会での筆頭演者（約2回以上/年）、査読付き学術誌での筆頭著者1編以上（欧文執筆を目標とする）
	研修内容	原則3ヶ月単位で最長2年未満までの研修期間中、乳腺外科を中心に、乳腺専門医取得に必要な専門知識である乳腺関連科 ^{※1} を経験することが出来ます。 ^{※1} 形成外科、病理・臨床検査科、放射線診断科、生理検査科（乳房超音波検査）、乳癌腫瘍内科 等の乳癌疾患に関連する科
	研修の特色	最短3ヶ月から最長2年未満の期間で、目的に応じて集中的に乳腺関連の研修を行うことが可能なコースであり、将来の乳腺専門医としての人材育成を目指していきます。乳腺専門医取得に必要な手術経験症例数を短期間で取得すると共に、多数の最先端研究をもとに、学会発表および論文執筆を経験することが可能です。

脳脊髄腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本脳神経外科学会専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・悪性脳腫瘍の臨床・基礎研究の技術・考え方を習得する ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は脳脊髄腫瘍科、1年間は研究所等自由選択
	研修の特色	悪性脳腫瘍のスペシャリストとなるための、臨床・基礎研究（分子診断など）の技術と考え方を習得する
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本脳神経外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・悪性脳腫瘍の臨床・基礎研究の技術・考え方を習得する ・専門医取得：日本脳神経外科専門医 ・研究：国内全国学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち2年以上もしくは1年以上脳脊髄腫瘍科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大12か月） ※ 病理科、放射線治療科、腫瘍内科等の希望診療科も研修可能
	研修の特色	悪性脳腫瘍のスペシャリストとなるための、臨床・基礎研究（分子診断など）の技術と考え方を習得する
連携大学院 コース	対象者	・レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・悪性脳腫瘍の臨床・基礎研究の技術・考え方を習得する ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年のレジデントコースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます ※がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできますが、当院からの給与は支給されません ※前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます
	研修の特色	悪性脳腫瘍のスペシャリストとなるための、臨床・基礎研究（分子診断など）の技術と考え方を習得する 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント 短期コース	対象者	原則として日本脳神経外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、悪性脳腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	脳脊髄腫瘍科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※日本脳神経外科学会専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長3年間在籍する。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

婦人腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・産婦人科専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・婦人科癌における手術治療・集学的治療・周術期管理など高度な知識・技能を習得する。 ・国内外での学会発表・論文作成 ・婦人科腫瘍専門医や臨床細胞学会専門医の取得
	研修内容	1年間は婦人腫瘍科、1年間は自由選択 臨床・病理・基礎研究などを行うことが可能
	手術経験数	手技の達成度により術者となる可能性があります。下記は2年間で経験可能な手術件数の目安です。 広汎子宮全摘：10件以上 傍大動脈リンパ節郭清を含む手術：10件以上 骨盤内リンパ節郭清を含む手術：10件以上 リンパ節生検を含む手術：20件以上
研修の特色	希少がんを含め様々な婦人科悪性腫瘍に関する研修が可能です。日本婦人科腫瘍学会専門医の取得を目標に研修を積んでいただきます。悪性腫瘍に特化した研修ができるため学会発表や論文作成などを積極的に経験していただきます。	
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・産婦人科専門医取得済みもしくは採用年に取得見込み
	研修目標	・婦人科腫瘍専門医取得のために必要な診断・治療の知識と手技、及び患者管理を理解・習得する。 ・国内外学会での筆頭著者、論文作成・筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち、1年以上は婦人科腫瘍科に在籍。原則とし婦人科病理、大腸外科、泌尿器・後腹膜腫瘍科をローテーションする。また、記載以外の希望する科への研修も可能である。
	手術経験数	手技の達成度により術者となる可能性があります。下記は3年間で経験可能な手術件数の目安です。(執刀一助手) 広汎子宮全摘：10-20件 傍大動脈リンパ節郭清を含む手術：7-10件 骨盤内リンパ節郭清を含む手術：10-15件 リンパ節生検を含む手術：26-54件
研修の特色	2年間、乳癌外婦人科悪性腫瘍手術に必要な手術手技、骨盤内解剖、婦人科病理について研修を行うことが可能です。当院では化学療法は乳癌腫瘍内科で行うため手術に集中した研修が可能です。研修期間中に、乳癌腫瘍内科で化学療法を学ぶことも可能です。また、国内外での学会発表を積極的に行っていただき、論文作成も経験していただきます。科や希望する他一般外科・乳癌関連科の研修を行うことにより、効率的かつ集中的にトレーニングを積むことが可能なコースです。	
レジデント 短期コース	対象者	原則として産婦人科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・初期臨床研修が終了し婦人科腫瘍専門医を目指す医師 ・婦人科腫瘍について一次診療を学びたい医師
	研修目標	・短期間の研修で婦人科腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています。
	研修内容	婦人科腫瘍科に最短6か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする 全体の在籍期間が1年以上であれば希望する科での研修も可能。
	研修の特色	研修者のニーズに合わせて柔軟な研修期間設定・内容の調整が可能です。
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※産婦人科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長2年間在籍する。
	研修の特色	研修者のニーズに合わせて柔軟な研修期間設定が可能です。

頭頸部外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・頭頸部がん専門医取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・頭頸部領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち基本的には頭頸部外科に所属する ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・耳鼻咽喉科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：頭頸部がん専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年半以上頭頸部外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択 ※基本的には、頭頸部内科、放射線治療科、形成外科、病理科、緩和医療科を、各3ヶ月以上ローテーションする ※上記以外の希望診療科も研修可能(1診療科3か月を原則とする) ※6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※原則として、日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医制度研修カリキュラムに則った研修を行う
	研修の特色	頭頸部全般の幅広い診療経験を積むことが可能です 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・耳鼻咽喉科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：頭頸部がん専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上頭頸部外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択 ※頭頸部内科、放射線治療科、形成外科、病理科、緩和医療科の中から希望を、各3ヶ月以上ローテーションする ※3か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※原則として、日本頭頸部外科学会頭頸部がん専門医制度研修カリキュラムに則った研修を行う
	研修の特色	頭頸部全般の幅広い診療経験を積むことが可能です 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 短期コース	対象者	原則として耳鼻咽喉科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、頭頸部の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	頭頸部外科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※耳鼻咽喉科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター中央病院頭頸部外科に、3か月単位、最長3年間在籍します
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

形成外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・形成外科専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・各領域における再建外科手技（治療方針の決定、皮弁挙上、マイクロサージャリー）の習得 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	2年間の形成外科専攻として研修します。 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	手技の達成度により、皮弁挙上から指導を行い、遊離皮弁移植術における皮弁縫い付け、マイクロサージャリーの術者となることも可能です。 皮弁挙上：40例以上 マイクロサージャリーによる血管吻合手技：20例以上
	研修の特色	頭頸部再建、骨軟部腫瘍切除後の再建、乳房再建を中心に再建外科に関する多種多様な再建の研修が可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を体験して頂きます。希望により東病院形成外科での研修が可能です。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・各領域における再建外科手技（治療方針の決定、皮弁挙上、マイクロサージャリー）の習得 ・機会に応じて、国内全国学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上形成外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） ※ 頭頸部外科、骨軟部腫瘍科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 3か月まで中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	手技の達成度により、皮弁挙上から指導を行い、遊離皮弁移植術における皮弁縫い付け、マイクロサージャリーの術者となることも可能です。 皮弁挙上：40例以上 マイクロサージャリーによる血管吻合手技：20例以上
	研修の特色	がん専門修練医と同様な研修が可能です。頭頸部再建、骨軟部腫瘍切除後の再建、乳房再建を中心に再建外科に関する多種多様な再建の研修が可能です。希望がある方においては頭頸部外科、乳腺外科、整形外科などの研修も可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を体験して頂きます。希望により東病院形成外科での研修が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として形成外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	・短期間の研修で、再建外科手技（治療方針、皮弁挙上、マイクロサージャリー）の経験を積むことを目標としています。
	研修内容	形成外科に最短6か月から最長2年未満の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※形成外科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長2年間在籍する。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

泌尿器・後腹膜腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本泌尿器科学会専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・泌尿器科悪性腫瘍における手術治療、集学的治療、周術期管理等、高度な知識、技能を習得する。 ・専門医取得：泌尿器内視鏡技術認定医・がん治療認定医 ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者。
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は泌尿器科、1年間は自由選択。 ※ 泌尿器科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能。
	研修の特色	High volume centerである当院で、幅広く泌尿器悪性腫瘍に関する高度な研修が可能です。本コースは、基本的な泌尿器開腹手術・体腔鏡手術・ロボット手術参加経験をもち、一定レベル以上の実績を有する医師を対象としたコースです。手技的にはロボット支援前立腺全摘、体腔鏡下腎・腎尿管手術、その他複雑な開放手術への対応を重点的に指導し、さらなる技術の発展を促します。また泌尿器悪性腫瘍に対する薬物治療に関しても専門医の指導を受けることが可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を体験して頂きます。
	研修の特色	泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。本コースは、基本的な泌尿器開腹手術・体腔鏡手術・ロボット手術参加経験をもち、一定レベル以上の実績を有する医師を対象としたコースです。手技的にはロボット支援前立腺全摘、体腔鏡下腎・腎尿管手術、その他複雑な開放手術への対応を重点的に指導し、さらなる技術の発展を促します。また泌尿器悪性腫瘍に対する薬物治療に関しても専門医の指導を受けることが可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を体験して頂きます。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本泌尿器科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・泌尿器・後腹膜悪性腫瘍専門医に必要な診断・外科治療、抗癌剤治療に関する臨床および基礎の幅広い知識・技術の習得 ・研究：国内・国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	希望により、泌尿器科病理、大腸外科、婦人科のローテーションも可能である。 ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる。 ※ 原則として、日本泌尿器科学会教育研修プログラムに則った研修を行う。
	研修の特色	泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。外科的処置においては、内視鏡手術・ロボット手術・体腔鏡手術・開腹手術すべてに参加することが可能であり（総数約350例/年）、泌尿器科専門の腫瘍内科医の指導のもと薬物治療についての幅広い経験をつむことも可能です。国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。
	研修の特色	泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。外科的処置においては、内視鏡手術・ロボット手術・体腔鏡手術・開腹手術すべてに参加することが可能であり（総数約350例/年）、泌尿器科専門の腫瘍内科医の指導のもと薬物治療についての幅広い経験をつむことも可能です。国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本泌尿器科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・泌尿器・後腹膜悪性腫瘍専門医に必要な診断・外科治療、抗癌剤治療に関する臨床および基礎の幅広い知識・技術の習得 ・研究：国内・国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	レジデントコース（2年・3年）では希望により泌尿器科病理、大腸外科、婦人科のローテーションが可能であるが、2年コースでは基本的に泌尿器科を中心とした研修プログラムとする。 ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる。 ※ 原則として、日本泌尿器科学会教育研修プログラムに則った研修を行う。
	研修の特色	泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。外科的処置においては、内視鏡手術・ロボット手術・体腔鏡手術・開腹手術すべてに参加することが可能であり（総数約350例/年）、泌尿器科専門の腫瘍内科医の指導のもと薬物治療についての幅広い経験をつむことも可能です。国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。
	研修の特色	泌尿器科研修で最も推奨されるコースです。外科的処置においては、内視鏡手術・ロボット手術・体腔鏡手術・開腹手術すべてに参加することが可能であり（総数約350例/年）、泌尿器科専門の腫瘍内科医の指導のもと薬物治療についての幅広い経験をつむことも可能です。国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・泌尿器科悪性腫瘍における手術治療、集学的治療、周術期管理等、高度な知識、技能を習得する。 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	レジデント3年コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです。連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます。 ※ 前半の3年のレジデント研修期間は、当該コースの内容に準じます。 ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます。 ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。がん専門修練医不採用者は研修生の立場で大学院に在籍はできませんが、当院からの給与は支給されません
	手術経験数	レジデント3年コースとがん専門修練医に準ずる。
	研修の特色	泌尿器科専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです。国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として泌尿器科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、泌尿器科悪性腫瘍に関する基本的な診療経験を積むことを目標としています。
	研修内容	泌尿器・後腹膜腫瘍科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 基本的には、手術見学および助手のみの研修となります。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。所属医療機関での研修に加えて、より幅広い知識・技術を習得したい医師の方に適しています。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※泌尿器科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長2年間在籍する。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

骨軟部腫瘍・リハビリテーション科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本整形外科学会専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・骨軟部腫瘍における手術治療、化学療法、集学的治療を習得する ・がん治療認定医の取得 ・研究：国際学会での筆頭演者、英文邦文の論文での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は骨軟部腫瘍科、1年間は自由選択 ※ 骨軟部腫瘍科以外の1年間は診療を離れ、研究所でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 3か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	本コースは基本的に整形外科臨床ができる医師のコースであるため、悪性腫瘍手術を重点的に指導する。 骨悪性腫瘍手術：10例以上 軟部悪性腫瘍手術：30例以上
	研修の特色	希少がんである肉腫の High volume center である当院で、悪性骨軟部腫瘍に関するトップレベルの研修が可能です。がん治療認定医の取得も可能です。また積極的に学会活動や執筆活動を経験して頂きます。希望により病理科を始めとする他診療科でも研修が可能です。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本整形外科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん治療認定医 ・臨床：骨軟部腫瘍の診断・治療を主体となって実施可能な臨床能力を養う ・研究：国内・国際学会での筆頭演者、英文邦文の論文での筆頭著者
	研修内容	病理科を3ヶ月ローテーションする。 上記以外の期間は自由選択であり、希望する診療科に最長約6か月まで在籍可能 ※ 6か月まで研究所、東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる ※ 原則として、日本整形外科学会教育研修プログラムに則った研修を行う
	手術経験数	骨軟部悪性腫瘍、良性腫瘍、転移性骨腫瘍の手術経験年間50例以上の経験
	研修の特色	骨軟部腫瘍全般の幅広い診療経験（手術、化学療法、緩和医療）をつむことが可能です 国際学会、論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。研究を希望される場合には研究所の紹介も可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として日本整形外科学会専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、骨軟部腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	骨軟部腫瘍科に最長3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、病理科など他診療科と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。応募状況によって研修期間の延長も可能です。
	専攻医コース (連携施設型)	対象者
研修目標		短期間の研修で、基本的な骨軟部腫瘍の診療経験を積むことを目標としています
研修内容		国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長1年間在籍します。国内有数の high volume center で、希少がんである骨軟部腫瘍の臨床（診断、手術、化学療法）の基本を学び、腫瘍を専門としない整形外科医が日常臨床で身に付けるべき知識を持てるようにします。6か月を超えて研修する場合には病理科を始めとする他診療科での研修も可能です。
研修の特色		研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。国内外での学会発表や論文作成も可能です。

皮膚腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とします。 ・当センターのレジデント修了者 ・日本皮膚科学会専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	皮膚悪性腫瘍に関してより深く専門的な臨床力の修得や世界に通用する臨床研究を行います。 悪性腫瘍関連の国内・国際学会での筆頭演者となること、筆頭著者として Peer review journal にアクセプトされることを目標とします。
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は皮膚腫瘍科、1年間は皮膚悪性腫瘍と関連あるテーマをもって活動できる範囲で自由に選択することができます。 ※ 1年間は臨床を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修を行うことも可能
	研修の特色	High volume center である当院で、2年間研修を加えることで、さらに専門的で高度な臨床力を身につけ、臨床研究の結果を出すことができると考えます。がん専門修練医コースは日本の中心的若手 dermatologic oncologist の育成プログラムです。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とします。 ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本皮膚科学会専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	専門医取得のほか、各皮膚悪性腫瘍の生物学的特性を学び幅広く知識と技術を修得することで、日常診療のスキルを上げることはもちろん、悪性腫瘍関連の国内・国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者となることを目標とします。
	研修内容	3年間在籍する期間内の1年間は研修者の希望や目的に応じて外科、内科、腫瘍病理などの他の診療科をローテーションすることができます。残り2年間は皮膚腫瘍科で集中的に研修します。
	研修の特色	悪性黒色腫をはじめとする皮膚悪性腫瘍に関して数多く、また幅広い診療経験を積むことが可能です。 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。
レジデント 2年コース	対象者	原則として皮膚科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とします。
	研修目標	2年間の集中的な研修で、皮膚悪性腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています。
	研修内容	1年半は皮膚腫瘍科に在籍し集中的に研修をし、残りの期間で研修者の希望や目的に応じて他の診療科をローテーションすることができます。
	研修の特色	悪性黒色腫をはじめとする皮膚悪性腫瘍に関して目的や目標を絞って研修を希望される医師向けのものとして位置づけています。 国内・国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています。
レジデント 短期コース	対象者	原則として皮膚科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とします。
	研修目標	短期間の研修で、皮膚悪性腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています。
	研修内容	皮膚腫瘍科に最長6か月から最長2年未満の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とします
	研修の特色	研修期間が限られているため目的や目標を絞って研修を希望される医師向けのものとして位置づけています。 各研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間、研修内容の設定が可能です。
専攻医コース (基幹施設型)	対象者	※日本皮膚科学会専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とします。 ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が基幹施設として選択した専攻医
	研修目標	皮膚科専門医を取得することを目標とします。 同時に皮膚腫瘍科医として集中的にがんの診療経験を積み dermatologist としてだけでなく oncologist としての基本的な知識と技術を修得することを目標とします。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科を基幹施設として5年間の研修を受けます。 5年のうち国立がん研究センター中央病院には連続3年間在籍、残り2年間は連携施設で研修を受けます。 原則として国立がん研究センター中央病院に3年間在籍する期間内の1年間は外科、内科、腫瘍病理などの他の診療科をローテーションすることができます。残り2年間は皮膚腫瘍科で集中的に研修します。
	研修の特色	皮膚科医として専門医の取得が可能であるのと同時に、特に皮膚悪性腫瘍の診断と治療について幅広く専門的な最新の知識と技術を身につけることができます。 また希望すれば、連携大学院に入学することができます。 連携大学院制度を利用した場合、国立がん研究センターでの診療、研究に基づく学位取得が可能です。
専攻医コース (連携施設型)	対象者	※日本皮膚科学会専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とします。 ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	皮膚科専門医を取得することを目標としています。 同時に短期間の集中的な研修で皮膚腫瘍科医として基本的ながんの診療経験を積むことが目標です。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科を連携施設とする各基幹施設のカリキュラムの従って一定の期間皮膚悪性腫瘍について学びます。
	研修の特色	所属する基幹施設のカリキュラムの範囲内で研修者のニーズに合わせた柔軟な研修が可能です。

小児腫瘍外科

レジデント 短期コース	対象者	原則として外科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、小児腫瘍外科の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	小児腫瘍外科に最短3か月から最長6か月の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

眼腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・眼科専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは眼腫瘍学会関連施設での研修済み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・眼腫瘍領域における治療開発等、高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者 ・機会に応じて、臨床試験、医師主導試験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年以上は眼腫瘍科に所属する ※ 6か月まで研究所など、中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	眼内腫瘍：10例以上 眼付属器腫瘍：10例以上 密封小線源治療：1例以上
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです。多数例の診療を経験することで、眼腫瘍の幅広い研修が可能です。

レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・眼科専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者 ・眼腫瘍全般の治療方針決定、治療実施
	研修内容	研修期間のうち1年以上は眼腫瘍科に在籍し、それ以外の期間は自由選択 ※ 眼腫瘍科、放射線治療科、病理科、緩和医療科の中から希望を、各3ヶ月以上ローテーションする ※ 3か月まで研究所など、中央病院以外での研修が認められる
	手術経験数	眼内腫瘍：10例以上 眼付属器腫瘍：10例以上
	研修の特色	眼腫瘍全般の幅広い診療経験を積むことが可能です 国際学会、Peer review journal論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています

レジデント 短期コース	対象者	原則として眼科専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、眼腫瘍の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	眼腫瘍科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする 基本的には手術の助手のみの研修ですが、経験に応じた執刀も可能です。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

専攻医コース (連携施設型)	対象者	※眼科専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター中央病院に、3か月単位、最長2年間在籍する。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

麻酔・集中治療科

レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後5年目以降 ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・心臓外科・産科を除く腫瘍外科における麻酔全般の技術および集中治療室での術後管理を通して周術期管理を習得する。また呼吸不全や敗血症、急性腎障害等の重症患者の集中治療管理を習得する。
	研修内容	手術室での麻酔を中心に、CCMをローテーションします。習得目標に応じて麻酔とCCMのローテーション期間は調整可能です。CCMを3ヶ月以上、また緩和医療科を1ヶ月以上ローテーションします。

レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で麻酔に関する基本的な経験を積むことを目標としています。
	研修内容	麻酔・集中治療科に最短3か月から最長2年未満の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする

病理科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・病理専門医、関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師 ・死体解剖資格を有することが望ましい
	研修目標	・日本病理学会認定病理専門医の受験資格を研修修了時まで取得する ・病理診断能力をさらに高め、専門性を発揮した研究活動も可能である
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は病理科、1年間は自由選択 ※ 病理科以外の1年間は診療を離れ、研究所等でのリサーチに特化した研修が可能 ※ 6か月までは東病院交流研修等、中央病院以外での研修が認められる
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです

レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降
	研修目標	・専門医取得：病理専門医 ・がん病理診断の習得
	研修内容	病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、婦人科など）の外科病理を一定期間毎にローテーションする。希望があれば以下を行うことができる。 ※ 病理診断に応用可能な遺伝子解析などの技術の修得ならびに外科病理学的研究 ※ 病理診断に必要な臨床的知識の習得を目的とする関連臨床部門へのローテーション
	研修の特色	全期間を通じて病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、婦人科など）の外科病理を一定期間毎にローテートし、細胞診断、術中診断、生検診断、手術材料の切り出しと診断に従事しながら病理診断能力を養う。また診断に必要な免疫組織化学染色の理論と技術の修得をおこなう。この間、臨床各科とのカンファレンスを通じて、疾患全体像の把握と治療に必要な病理情報の判断能力が養われる。専門医取得の従来制度に対応している。また専門医取得後にがん病理診断をさらに深く習得することができる。

レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降
	研修目標	・専門医取得：病理専門医 ・がん病理診断の習得
	研修内容	病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、婦人科など）の外科病理を一定期間毎にローテーションする。希望があれば以下を行うことができる。 ※ ある特定の領域・臓器の病理診断学を集中的に研修する。 ※ 病理診断に応用可能な遺伝子解析などの技術の修得ならびに外科病理学的研究 ※ 病理診断に必要な臨床的知識の習得を目的とする関連臨床部門へのローテーション
	研修の特色	全期間を通じて病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、婦人科など）の外科病理を一定期間毎にローテートし、細胞診断、術中診断、生検診断、手術材料の切り出しと診断に従事しながら病理診断能力を養う。また診断に必要な免疫組織化学染色の理論と技術の修得をおこなう。この間、臨床各科とのカンファレンスを通じて、疾患全体像の把握と治療に必要な病理情報の判断能力が養われる。専門医取得の従来制度に対応している。また専門医取得後にがん病理診断をさらに深く習得することができる。

レジデント 短期コース	対象者	原則として病理専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、特定の領域・臓器の病理診断学の経験を集中的に積むことを目標としています
	研修内容	病理科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	ある特定の領域・臓器の病理診断学を集中的に研修するのに適している。

専攻医コース (基幹施設型・ 連携施設型)	対象者	※病理専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院を基幹施設として選択した専攻医、または専門医制度において中央病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	・専門医取得：病理専門医
	研修内容	病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、婦人科など）の外科病理を一定期間毎にローテーションする。 希望があれば以下を行うことができる。 ※ 病理診断に応用可能な遺伝子解析などの技術の修得ならびに外科病理学的研究 ※ 病理診断に必要な臨床的知識の習得を目的とする関連臨床部門へのローテーション
	研修の特色	全期間を通じて病理解剖と各臓器（消化器、呼吸器、婦人科など）の外科病理を一定期間毎にローテートし、細胞診断、術中診断、生検診断、手術材料の切り出しと診断に従事しながら病理診断能力を養う。また診断に必要な免疫組織化学染色の理論と技術の修得をおこなう。この間、臨床各科とのカンファレンスを通じて、疾患全体像の把握と治療に必要な病理情報の判断能力が養われる。 新専門医制度：当施設では新専門医制度に対応した病理専門研修プログラム（3年）を用意しています。

臨床検査科

専攻医コース (基幹施設型)	対象者	※臨床検査専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度において中央病院を基幹施設として選択した専攻医
	研修目標	・専門医取得：臨床検査専門医 ・研究：臨床検査関連学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	3年間の研修期間は臨床検査科に在籍することを原則とします。 ※ 非腫瘍性疾患に関する外部機関での研修や臨床検査専門医の素養を高めることを目的とした病理科、内科等他部署への研修については、研修状況によって考慮します。
	研修の特色	臨床検査専門医研修プログラムに従いますが、がんゲノム中核病院として行っているクリニカルシーケンスの研修も可能です。

歯科

レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に歯科医師免許取得後3年目以降
	研修目標	がん専門病院で歯科支持療法を担う歯科医師になるために必要な、すべての知識と技術を習得する。
	研修内容	がん治療開始前の予防的歯科介入（診断、治療）、がん治療に生じる全ての口腔内合併症に対するエビデンスに基づいた歯科の介入・具体的な支持療法、およびがん治療後や療養中～終末期の患者の口腔管理など、がん治療開始前から終末期まで、あらゆる状況でのがん口腔支持医療を研修していただきます。研修者のニーズにあわせて2年コースと3年コースの2つの研修コースを選択していただきます。
	研修の特色	がん口腔支持療法全般の幅広い診療経験を積むことができ、がん専門病院で歯科支持療法を担う歯科医師になるために必要なすべての知識と技術を習得することができます。あらゆる状況での歯科介入が適切に提供できる、がん口腔支持療法のエキスパートを目指して頂きます。希望する方には学会発表、論文執筆等の研究活動の機会も確保されています。
レジデント 短期コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした歯科医師を対象とする ・採用時に歯科医師免許取得後2年目以降
	研修目標	・「がん口腔支持療法」の知識と診療経験を積むことを目的としています。
	研修内容	歯科に最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする 歯科外来において、がん治療における予防的な歯科口腔管理、およびがん治療中の口腔有害事象の基本的な対応を研修していただきます。またがん治療に必要な歯科補綴装置（プロテーゼや放射線治療時のスパーサーなど）の作成を経験していただきます。
	研修の特色	がん治療中の口腔有害事象に関する症例が多いため、がん口腔支持療法全般の幅広い診療経験を積むことが可能です。特に予防的な歯科口腔管理に力を入れており、当院の周術期口腔管理のシステムにあわせて歯科介入が経験できます。

臨床研究支援部門

がん専門研修医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・5年以上の臨床経験を有し、臨床研究に関する基礎知識を有する医師 ・関連するサブスペシャリティ専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・医師主導治験の調整事務局を担当する ・各種薬事規制と医薬品等の臨床開発方法を修得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	臨床研究支援部門内で医師主導治験の調整事務局としてプロジェクトマネジメントを担当し、アカデミア臨床開発、薬事・保険に関する規制要件、生物統計学、データマネジメント等を学ぶ。日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）の支援部署で国際共同試験や先進医療の臨床試験を学ぶことも可能。2年間の研修期間のうち1年間は診療科での外来業務等へエフォートを割くことも選択可能としています。診療科での研修を希望される場合は事前にご相談ください。
	研修の特色	臨床研究中核病院として高度な臨床研究支援体制のもと実施している多種多様な臨床研究に主体的に携わることができるため、様々な薬事知識や臨床開発方法論が習得可能です。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み ・4年以上の臨床経験を有する医師
	研修目標	・臨床試験方法論の修得：研究デザイン、統計解析手法、薬事規制要件等 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	臨床研究支援部門内で研究コンサルテーション、プロトコル作成支援、各種報告書に対する医学的レビュー、学会発表・公表論文レビューなどを通じて、臨床試験方法論、生物統計学、データマネジメント、薬事・保険に関する規制要件を学ぶ。日本臨床腫瘍研究グループ（JCOG）の支援部署と医師主導治験の支援部署のいずれかを選択可能で、両者のローテーションも可能。原則として他の診療科へのローテーションはありませんが、希望される場合にはご相談ください。
	研修の特色	医師主導治験、先進医療制度下の臨床試験、国際共同試験、大規模多施設共同試験など多種多様な臨床研究に携わることが出来ます。自らが支援を行った臨床試験を通して新たな治療が生まれ、がん患者に対する明日からの治療方針が変わります。また、過去の臨床試験データを用いた附随研究を自ら立案し、国際学会での発表、論文公表を行うことを奨励しています。
レジデント 短期コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・基本領域専門医取得済みもしくは取得見込み ・採用時に医師免許取得後5年目以降 ・4年以上の臨床経験を有する医師
	研修目標	・研究デザイン、統計解析手法、薬事規制要件等、臨床試験方法論を修得する ・臨床研究の中央支援機構の仕組みを修得する
	研修内容	最短3か月から最長1年の期間在籍します。 ※原則として3か月単位とする ※短期レジデントの前後に臨床研究支援部門で継続的な研修を行うことが前提となります。
	研修の特色	

中央病院がん専門修練医 研修課程

- 内科部門は呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科の7診療科からなる。
内科系部門は小児腫瘍科、頭頸部内科、放射線治療科、放射線診断科、内視鏡科（呼吸器）、内視鏡科（消化管）、緩和医療科、精神腫瘍科の8診療科からなる。
- 外科部門は呼吸器外科、食道外科、胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳腺外科の6診療科からなる。
外科系部門は脳脊髄腫瘍科、婦人腫瘍科、頭頸部外科、形成外科、泌尿器・後腹膜腫瘍科、骨軟部腫瘍・リハビリテーション科、皮膚腫瘍科、眼腫瘍科、病理科の9診療科からなる。
- その他に臨床研究支援部門がある。
- 原則として第1学年を臨床、第2学年を研究にあてる。
研究とは臨床研究を指すが、希望により研究所での基礎的な研究を申請することもできる。
- がん専門修練医は申請すれば外来診療を行うことができる。外来ブースには限りがあるため、最終的には教育委員会にて調整を行う。
- ローテーション、研修期間については諸事情により変更する場合がある。

中央病院 レジデント・専攻医 研修課程

- 内科部門は呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科の7診療科からなる。
内科系部門は小児腫瘍科、頭頸部内科、放射線治療科、放射線診断科、内視鏡科（呼吸器）、内視鏡科（消化管）、緩和医療科、精神腫瘍科の8診療科からなる。
 - 外科部門は呼吸器外科、食道外科、胃外科、大腸外科、肝胆膵外科、乳腺外科の6診療科からなる。
外科系部門は脳脊髄腫瘍科、婦人腫瘍科、頭頸部外科、形成外科、泌尿器・後腹膜腫瘍科、骨軟部腫瘍・リハビリテーション科、皮膚腫瘍科、小児腫瘍外科、眼腫瘍科、麻酔・集中治療科、病理科、臨床検査科の12診療科からなる。
 - その他に歯科部門、臨床研究支援部門がある。
- CCM 研修、緩和医療研修について
レジデント（3年コース、2年コース、連携大学院コース、短期コース）および専攻医については該当コースの定める期間中に CCM（Critical Care Medicine）と呼ばれる ICU（集中治療室）・Oncologic Emergency 研修および緩和医療研修を必修とする。

研修期間	CCM		緩和医療科
	外科・外科系	内科・内科系	外科・外科系 内科・内科系
6ヶ月以下	不要	不要	不要
1年以下	1ヶ月	1ヶ月	不要
2年以下	2ヶ月	2ヶ月	1ヶ月
3年以下	3ヶ月	2ヶ月	1ヶ月

※ CCM 研修

病理科、臨床検査科、歯科、臨床研究支援部門の各コースでの研修者は除く
精神腫瘍科レジデント短期コース・専攻医コースでの研修者は選択制とする

※緩和医療研修について

病理科、臨床検査科、歯科、臨床研究支援部門の各コースでの研修者は除く
後期ローテーションにおいては緩和医療（在宅を含む）研修のみ選択可能

●ローテーションについて

それぞれのコース毎に定めるカリキュラムに従う。

具体的には、個人の経験やコースの特殊性を考慮し、レジデント教育責任者等と協議して決定する。

調整を行う必要が生じた場合は、原則として教育委員会等の審議を経て決定する。

部門外で選択可能なローテーション先

組織	部署	研修内容
東病院	緩和ケア 頭頸部外科 放射線治療 (粒子線治療) 等	交流研修が可能
社会と健康研究センター	疫学研究部	多目的コホート研究や国立がん研究センターのがん検診受診者を対象としたフォローアップ研究などにおいて、生活習慣を把握するアンケート情報、レセプトなどの電子化医療情報、DNA/血漿検体などの生体試料などを利用し、がんの部位別リスク要因の検討などの疫学研究を実施する。これにより追跡データを用いた統計解析技術を習得し、論文作成を目標とする。原則として研修期間は3カ月以上。
	予防研究部	様々な方法に基づく各種疫学関連データを統合して解析する技術を習得し、論文作成を目標とする。特に、国内外の複数のコホート研究の出版論文のメタアナリシスやオリジナルデータに基づくプール解析などを実施し、エビデンスレベルを高め、要因負担研究などの応用研究に展開させる。原則として研修期間は3カ月以上。
	検診研究部	期間等によって研修可能
	検診開発研究部	
	健康支援研究部	がん医療におけるコミュニケーションに関する研究、食による心理的苦痛軽減に関する研究 がん支持療法領域の臨床研究マネジメント QOL 関連の調査、小規模コホート、心理・行動介入などの知識習得
保健社会学研究部	臨床研究教育 e-learning サイト ICRweb の開発に携わるとともに、生物統計など臨床研究の方法論について学ぶ。 乳がん患者コホート研究について、ベースラインデータの解析を行う。	
がん対策情報センター	がん臨床情報部	ビッグデータ解析、臨床疫学に触れていただく機会を持てる研修です。 具体的には、①院内がん登録や DPC データを使った臨床データ解析のための統計ソフトの習得 ②臨床疫学の基礎知識習得、③がん対策・政策で必要になるエビデンスの提供について教育します。原則として3ヶ月以上とします。長めにいらっしゃるほど、より深く疫学の知識の研修が可能です。 米国および英国への公衆衛生分野 (MPH, MS, PhD) の留学経験者も在籍しているため、相談にものります。
	がん統計・総合解析研究部	がん登録を始めとした疾病統計データ（罹患率、死亡率、生存率など）の分析を通して、データ解析や解釈の技術を習得する。研修期間は原則として3ヶ月以上とし、テーマを決めて論文作成を目標とする。
	がん情報提供部	信頼できる情報の作成方法や配慮の仕方などを学びつつ、「がん情報サービス」に掲載する情報を実際に作成します。原則として研修期間は3ヶ月以上。
	がん医療支援部	病院や地域でのがん医療の質の向上を目指した PDCA サイクルを確保していくための手法や、医療従事者の育成を目的とした研修会の企画、運営、評価等の方法について学ぶことができます。
	がんサバイバーシップ支援部	①がん診断後の社会生活に関する研究を学ぶ（研修のタイミングによるが、AYA 世代向け支援サイトの構築等）。 ②サバイバーシップに関する一般向け教育啓発イベントの企画運営を学ぶ。

期間はそれぞれ1か月以上とする。

がん専門修練医からのメッセージ



国立がん研究センター中央病院
第28期がん専門修練医
(外科系)

伊藤麻衣子

がんセンター修練医

私は3年間の外科レジデントを修了し、さらに専門性を高めるため2年間の修練医に応募しました。応募動機はただひとつ、こんなに集中的に手術に参加できる1年間は後にも先にもないだろうと思ったからです。

修練医1年目は臨床に集中し、毎日手術に入ってスタッフの技術を学び、時には執刀のチャンスも回ってきます。集中的に技術や目を磨くにはこれ以上ない環境だと思います。

手術以外にも修練医の仕事は多岐にわたり、他科からの相談窓口かつ他科への相談窓口でもあるため、所属科のみならず他科のレジデント、スタッフともコミュニケーションを取りながら日常業務をマネジメントすることになります。カンファレンスの準備や手術日程の調整など仕事量は多く、ハードな1年になることは間違いないですが、2度と経験できない貴重な1年になると思います。

私は現在2年目になり、半年間の東病院での交流研修を希望し、東病院で腹腔鏡手術を中心に勉強しています。2年目は臨床を離れて研究等に軸足を置く方が多いですが、希望に応じてフレキシブルに研修スケジュールを組むことも可能です。

待遇など十分ではない面もありますが、医師としてのキャリアのうち数年をこのような症例豊富な環境で過ごすことは今後の糧になると思います。熱心な先生方のご応募をお待ちしています。



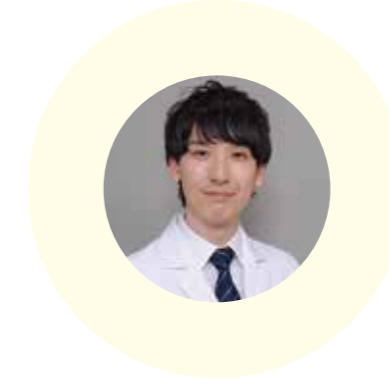
国立がん研究センター中央病院
第28期がん専門修練医
(内科系)

大場 彬博

自由と飛躍の2年間

内科系がん専門修練医は特定の診療科に所属しながら、その領域を更に深く学ぶべく日々研鑽を積んでいます。私は、当院のレジデントを修了後、専門とする肝胆膵内科のがん専門修練医となりましたが、がん専門修練医の特徴は「多様性」と「自由度」だと思います。まず、当院のがん専門修練医の背景は、卒後年次やキャリア等を含め、多岐に渡っています。そのため、各々のがん専門修練医となった目的も異なりますが、それらの目的が達成可能なように当プログラムは非常に自由度の高いものとなっています。私は、化学療法と胆膵内視鏡を極めるべくがん専門修練医に応募したため、臨床と臨床研究が主体の研修生活を送っていますが、関連他科で研修を行う者、研究所等、臨床を離れて研究生活を送る者、など様々です。活躍する場は、他科や研究所等の他部門に留まらず、他機関や海外での研修を組み合わせる事も可能です。このように当プログラムでは、目的と熱意さえあれば、それに十分に伝えてくれる環境が用意されています。実際に、がん専門修練医を修了された諸先輩方は、がん診療の第一線やがん研究、他機関や海外などで活躍されており、熱意を持って継続すれば飛躍の2年間となるものと思います。その他に重要な点として、研修期間を通じて大切な出会いがいくつもあるという魅力が挙げられます。当院の優秀なスタッフのみならず、国内外の第一線で活躍されている先生方とも、会議や学会を通じて知り合える機会が多くありますし、同じ熱意を持った同期や後輩と切磋琢磨できる日々もまたかけがえのないものです。自由と飛躍の2年間に飛び込んでみませんか？先生方のご参加を楽しみにしています。

レジデントからのメッセージ



国立がん研究センター中央病院
第48期レジデント正規コース
(外科系)

高見澤康之

研修で得られること

日本の基準を作る病院ではいったいどのような医療が行われているのか。

その疑問に駆られ、私は医者6年目で地元の長野県を離れ、国立がん研究センター中央病院へやってきました。当院では外科は臓器ごと6科に細分化され、それぞれの科で、高度な専門性をもったスタッフ達が日々の診療にあたっています。そのスタッフのもとで日々の病棟業務を行い、専門性をもった手術を学ぶのが我々レジデントです。

どの科でも毎日手術があり、一般の病院では経験できないような症例数を学べます。数か月の期間、限られた臓器に特化して手術を行うことになり、一つの手術について深く深く学べます。「型」にはまった手術の美しさ、奥深さを体感できます。

また日々のカンファレンスでは最先端の知見を踏まえ、他科を交えた専門家同士の議論が繰り広げられており、多くのことを学べます。多数の臨床試験も行われており、自分たちが将来の医療を作っているという実感をもって、日々の診療に取り組みます。

この病院に来て、今までの自分に足りていたもの、足りていなかったものが浮き彫りになりました。病院には同じ志をもった同年代の医師が集まっています、互いに切磋琢磨し、診療や手術に励んでいます。そんな素晴らしい仲間に出会えることもがんセンターの大きな魅力の一つです。皆さん、是非一緒に頑張りましょう。お待ちしております。



国立がん研究センター中央病院
第48期レジデント正規コース
(内科系)

新野 祐樹

臨床腫瘍学の最先端で学ぶ

国立がん研究センター中央病院には、3年間で腫瘍内科の知識と経験を身につける研修コースがあります。プログラムは1年半のローテーションと残りの選択期間で構成され、ローテーション期間は内科各科で様々ながんについて学びます。どの科も症例数も多く、治験や臨床試験を含めた最先端の治療を経験できます。他の病院では見かけないような稀な疾患・病態の診療に携わる機会もあります。また、上級医の先生方は各分野のエキスパートが揃っており、学会などで見る先生から直接指導を受けられるのも大きな魅力だと思います。専門以外のがん種の事を一から学び直すのは難しい部分もありますが、レジデント向けのレクチャーも充実しており、全国から集まっているレジデント仲間と切磋琢磨しながら過ごしています。とりわけ、近年は臓器横断的ながん治療の考え方が広がってきており、様々ながん種について幅広く学ぶことは非常に有意義な機会だと思います。

選択期間では、自分の志望科を中心に、病理や放射線、内視鏡など、がん診療の様々な側面について学ぶ機会を得ることができます。いずれも一朝一夕に理解するのは困難ではありますが、その後の診療において大いに役に立つ経験だと思います。

日々の臨床だけではなく、臨床研究や、前向き臨床試験の立案・プロトコール作成なども可能で、多くの学会発表の機会も得られます。また、がん診療に関わる社会的な環境・取り組みについても間近に眼にすることができ、幅広い知識を得ることができます。

3年間の研修は、その後どのような道に進むとしても、医師人生において有意義な経験になると思います。是非、一緒に頑張りましょう。お待ちしております。

- ・研修制度概要
- ・研修課程
- ・がん専門修練医からのメッセージ
- ・レジデントからのメッセージ

研修制度概要

がん専門修練医

"各領域のリーダーを目指す"

原則として当センターのレジデント修了者、またはサブスペシャリティ領域専門医取得相当の医師を対象とし、がんの診断・治療・研究に必要な高度先進的な知識と技術を有するがん診療の専門医を育成することを目的としています。研修年限は2年で、1年目は各専攻科での臨床研修を中心にレジデントの指導などを行い、2年目は希望により臨床を離れて先端医療開発センターでの基礎研究や病理・臨床検査科での研修などが可能です。毎年、がん専門修練医は多くの論文発表、学会発表を行っています。この制度は各領域の将来のリーダーを目指す人材の育成を目的としており、多くのがん専門修練医修了者が、国立がん研究センターをはじめとするがん専門病院や各地の大学病院でがん診療の中心となる働きをするとともに、各がん関連学会などで活躍しています。

レジデント（3年コース・2年コース）

"国立がん研究センター教育・研修制度の中核"

臨床腫瘍学について幅広い経験を積むことが出来、各診療科領域の腫瘍内科医・腫瘍外科医として高度な知識や技術を身につけるための基本コースです。原則として医師免許取得後3年目以降、基本領域専門医取得相当の者を対象とします。所属診療科を中心とした研修ですが、希望に応じて複数の診療科を比較的自由にローテーションできることが特徴です。緩和医療科・精神腫瘍科研修コース・放射線科研修コース・病理・臨床検査科コースなども準備されており、関連領域の幅広い知識・技術の習得を行うとともに、専門分野での高度な実力を養成できます。また、2年コースについては研修開始時期が選択可能です。

レジデント（短期コース）

がん医療の均てん化に貢献することを目的として、柔軟な研修開始時期、研修期間により研修者のニーズに幅広く対応するための研修制度です。研修開始時期は4月、7月、10月、1月から選択可能です。研修期間は最短3ヶ月となります。ただし、肝胆膵外科では募集を行っていないので応募の際はご注意ください。

連携大学院コース

学位取得を目指す研修者を対象とした、レジデントとがん専門修練医を組み合わせたコースです。

専攻医コース（連携施設型）

新専門医制度のもとで、当センターで短期研修を希望される研修者を対象としたコースです。

任意研修

1日以上任意の期間で研修できる制度です。処遇、手続き等が通常のレジデント制度とは異なるため、希望される方は下記までお問い合わせください。

任意研修についてのお問い合わせ kyoiku-resi@ncc.go.jp

コース	がん専門修練医	レジデント					専攻医
		3年	2年	連携大学院	短期（最短／最長）		
1 呼吸器内科	○	○	○	○	3か月	1年	○
2 乳腺・腫瘍内科	○	○	○	○	3か月 / 6か月 ※	2年未満 / 1年 ※	○
3 血液腫瘍科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
4 消化管内科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
5 消化管内視鏡科	○	○	○	—	3か月	1年	○
6 頭頸部内科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
7 先端医療科	○	○	○	—	3か月	1年	—
8 肝胆膵内科	○	○	○	○	3か月	2年未満	○
9 緩和医療科	○	○	○	—	3か月	1年	○
10 精神腫瘍科	○	○	○	—	3か月	1年	○
11 放射線診断科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
12 放射線治療科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
13 呼吸器外科	○	○	○	—	3か月	1年	○
14 食道外科	○	○	○	—	3か月	1年	○
15 胃外科	○	○	○	—	3か月	1年	—
16 肝胆膵外科	○	○	—	—	—	—	—
17 乳腺外科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
18 形成外科	○	○	○	—	3か月	1年	○
19 頭頸部外科	○	○	○	○	3か月	2年未満	○
20 大腸外科	○	○	○	○	3か月	2年未満	○
21 泌尿器・後腹膜腫瘍科	○	○	○	—	3か月	2年未満	○
22 病理・臨床検査科	○	—	—	—	3か月	2年未満	○

※短期／エキスパートコース

【麻酔科ローテーションについて】

・がん専門修練医コース、レジデント3年および2年コース、レジデント短期コースで1年以上在籍する外科系診療科のレジデントは数ヶ月の麻酔科ローテーションが必須です。詳細については入職後のオリエンテーション時に説明させていただきます。

呼吸器内科

がん専門修練医コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 当センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済み、または取得見込み 上記と同等の能力を有する医師 難治性の進行がんの克服に向けて、常に患者さんのことを最優先で考え、最先端の治療開発を志し、時代を切り開く医療の構築を目指す熱意ある医師
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 診断（気管支鏡検査、CT透視下針生検を含む）から治療、緩和ケアまで胸部悪性腫瘍の高度の診療技術を総合的に取得 専門医取得：がん薬物療法専門医、呼吸器専門医、呼吸器内視鏡専門医の取得 研究：臨床試験の計画と実施、基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究の実施 業績：国内及び国際学会での筆頭著者、日本語・英語論文での筆頭著者
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は呼吸器内科、1年間は自由選択 ※呼吸器内科以外の1年間は診療を離れ、研究所等で基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究の実施が可能 ※6ヶ月までは東病院以外での研修が認められる
	研修の特色	胸部悪性腫瘍の診療において、一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み 年齢制限なし 胸部悪性腫瘍の診療経験は問わない 難治性の進行がんの克服に向けて、常に患者さんのことを最優先で考え、最先端の治療開発を志し、時代を切り開く医療の構築を目指す熱意ある医師
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 診断（気管支鏡検査、CT透視下針生検を含む）から治療、緩和ケアまで胸部悪性腫瘍の診療技術を総合的に取得 専門医取得：がん薬物療法専門医、呼吸器専門医、呼吸器内視鏡専門医の取得 研究：臨床試験の計画と実施、基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究の実施 業績：国内及び国際学会での筆頭著者、日本語・英語論文での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち18ヶ月以上呼吸器内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大18ヶ月） ※消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、放射線治療科、呼吸器外科等の希望診療科も研修可能（1診療科3ヶ月を原則とする） ※6ヶ月まで研究所、呼吸器良性疾病の院外研修等、東病院以外での研修が認められる ※原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来診療の研修を行う
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸器内科研修で最も推奨されるコースです。 呼吸器内科を中心に幅広いがん診療の経験を積むことが可能です。 自ら臨床試験を計画し、実施することが可能です。 基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究の実施環境が整っています。 国内学会、国際学会、日本語論文・英語論文執筆等の発表の機会も十分確保されています。
レジデント2年コース	対象者	<ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み 年齢制限なし 胸部悪性腫瘍の診療経験は問わない 難治性の進行がんの克服に向けて、常に患者さんのことを最優先で考え、最先端の治療開発を志し、時代を切り開く医療の構築を目指す熱意ある医師
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 診断（気管支鏡検査、CT透視下針生検を含む）から治療、緩和ケアまで胸部悪性腫瘍の診療技術を総合的に取得 専門医取得：がん薬物療法専門医、呼吸器専門医、呼吸器内視鏡専門医の取得 研究：臨床試験の計画と実施、基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究の実施 業績：国内及び国際学会での筆頭著者、日本語・英語論文での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上呼吸器内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大1年） ※消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、放射線治療科、呼吸器外科等の希望診療科も研修可能（1診療科3ヶ月を原則とする） ※3ヶ月まで研究所、呼吸器良性疾病の院外研修等、東病院以外での研修が認められる ※原則として2年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来診療の研修を行う
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸器内科を中心に幅広いがん診療の経験を積むことが可能です。 自ら臨床試験を計画し、実施することが可能です。 基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究の実施環境が整っています。 国内学会、国際学会、日本語論文・英語論文執筆等の発表の機会も十分確保されています。
連携大学院コース（4～5年コース）	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 専門医取得：がん薬物療法専門医、呼吸器専門医、呼吸器内視鏡専門医 学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） 研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年のレジデントコースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです ※がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。 ※前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます。 ※後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます。
	研修の特色	連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究を開始します。 がん薬物療法専門医、呼吸器専門医、呼吸器内視鏡専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です
レジデント短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、診断（気管支鏡検査、CT透視下針生検を含む）から治療、緩和ケアまで胸部悪性腫瘍の診療技術を総合的に取得することを目標としています
	研修内容	最短3か月から最長1年の期間に在籍します ※原則として3か月単位とする ※他の診療科（消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、呼吸器外科、病理科等）と組み合わせた研修も可能（1診療科3ヶ月を原則とする）
	研修の特色	研修者の希望にあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。
専攻医コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります <ul style="list-style-type: none"> 医学部卒業後3年目以降 専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間に在籍します 消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、呼吸器外科、病理科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

乳腺・腫瘍内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・がん薬物療法専門医（関連するサブスペシャリティ領域専門医）等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・研究：自ら研究を計画・実施 ・研究：国際学会での筆頭演者、英文論文の筆頭著者 ・教育：レジデントの教育
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は乳腺・腫瘍内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大12か月） ※ 乳腺・腫瘍内科での臨床研究のほか、先端医療開発センター等での基礎的研究（トランスレーショナルリサーチ）にも従事できます。 ※ 自らの再診外来で診療が可能（指導医がバックアップ）
	研修の特色	腫瘍内科医として自立して診療にあたるとともに、自ら研究を計画・実施する能力を身につけることを目標とします。 研究指導は上級医がメンターとして担当し、研究の計画・実施をサポートします。 臨床研究のほか基礎的研究（トランスレーショナルリサーチ）も経験できます。 レジデントの教育を通じて教育者としての技能を身につけられます。 プログラムの最終年には ASCO など国際学会に派遣します。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医（基本領域専門医）または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・研究：国際学会での筆頭演者、英文論文の筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1.5年以上乳腺・腫瘍内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大18か月） ※ 呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、血液腫瘍科、頭頸部内科、先端医療科、病理等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで先端医療開発センター、中央病院など東病院以外での研修が認められる ※ 日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う（主として新規患者の診療を上級医とともに行う）
	研修の特色	臓器横断的ながん薬物療法の経験を通じて真の腫瘍内科医を目指すコースです。研究指導は上級医がメンターとして担当し、国際学会での発表や英文論文執筆等の機会を提供します。 プログラムの最終年には ASCO など国際学会に派遣します。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医（基本領域専門医）または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・研究：国際学会での筆頭演者、英文論文の筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上乳腺・腫瘍内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大12か月） ※ 呼吸器内科、消化管内科、肝胆膵内科、血液腫瘍科、頭頸部内科、先端医療科、病理等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 6か月まで先端医療開発センター、中央病院など東病院以外での研修が認められる ※ 日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う（主として新規患者の診療を上級医とともに行う）
	研修の特色	臓器横断的ながん薬物療法の経験を通じて真の腫瘍内科医を目指すコースです。研究指導は上級医がメンターとして担当し、国際学会での発表や英文論文執筆等の機会を提供します。 プログラムの最終年には ASCO など国際学会に派遣します。
連携大学院 コース	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、英文論文の筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年の正規コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます
	研修の特色	がん薬物療法専門医と同時に、学位取得を目指すコースです。 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です。 将来的にがんセンター、大学等の研究機関でキャリアを積みみたい方に最適です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医（基本領域専門医）取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間に臓器横断的ながん薬物療法を経験し、腫瘍内科学のエッセンスを体得することを目標とします
	研修内容	乳腺・腫瘍内科に、最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ※ 全体の在籍期間が1年の場合、他の診療科（消化管内科、肝胆膵内科、血液腫瘍科、先端医療科、呼吸器外科、病理科等）と組み合わせた研修も可能（最大6か月、1診療科3か月）
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・医学部卒業後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

乳がんエキスパート コース 6ヶ月、1年	対象者	乳がん治療の専門家を目指す医師のためのコースです。内科学会総合内科専門医または外科専門医を取得済みもしくは取得見込みの医師が対象となります。
	研修目標	短期間の研修で、乳がんの薬物療法、外科療法、放射線療法、病理を包括的に学ぶことを目標とします。
	研修内容	6か月または1年のコースとなります。 ※ 6ヶ月の場合、乳腺・腫瘍内科を3ヶ月間、乳腺外科を3ヶ月間ローテーションします。1年の場合は、乳腺・腫瘍内科、乳腺外科、をそれぞれ3ヶ月以上と、希望に応じて放射線治療科、病理・臨床検査科をそれぞれ3ヶ月間以上ローテーションします。
	研修の特色	乳がんの専門家としてキャリアを積みみたい方に最適なコースです。
泌尿器がんエキスパート コース 6ヶ月、1年	対象者	泌尿器がん治療の専門家を目指す医師のためのコースです。内科学会総合内科専門医または泌尿器科専門医を取得済みもしくは取得見込みの医師が対象となります。
	研修目標	短期間の研修で、泌尿器がんの薬物療法、外科療法、放射線療法、病理を包括的に学ぶことを目標とします。
	研修内容	6か月または1年のコースとなります。 ※ 6ヶ月の場合、乳腺・腫瘍内科を3ヶ月間、泌尿器・後腹膜腫瘍科を3ヶ月間ローテーションします。1年の場合は、乳腺・腫瘍内科、泌尿器・後腹膜腫瘍科をそれぞれ3ヶ月以上と、希望に応じて放射線治療科、病理・臨床検査科をそれぞれ3ヶ月間以上ローテーションします。
	研修の特色	泌尿器がんの専門家としてキャリアを積みみたい方に最適なコースです。 研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。
婦人科がんエキスパート コース 6ヶ月、1年	対象者	婦人科がん治療の専門家を目指す医師のためのコースです。内科学会総合内科専門医または産婦人科専門医を取得済みもしくは取得見込みの医師が対象となります。
	研修目標	短期間の研修で、婦人科がんの薬物療法、外科療法、放射線療法、病理を包括的に学ぶことを目標とします。
	研修内容	6か月または1年のコースとなります。 ※ 6ヶ月の場合、乳腺・腫瘍内科を3ヶ月間、婦人科を3ヶ月間ローテーションします。1年の場合は、乳腺・腫瘍内科、婦人科、をそれぞれ3ヶ月以上と、希望に応じて放射線治療科、病理・臨床検査科をそれぞれ3ヶ月間以上ローテーションします。
	研修の特色	婦人科がんの専門家としてキャリアを積みみたい方に最適なコースです。 研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

血液腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・造血器悪性腫瘍に対する高度な知識・技能を修得する。 ・造血器悪性腫瘍に対する治療開発やトランスレーショナルリサーチを主体的に実施し、成果を論文化する。
	研修内容	・臨床試験や医師主導治験を立案し、事務局として参加する。 ・連携大学院制度を用いた学位取得が可能です。 ・原則として2年間の研修期間のうち12カ月間は血液腫瘍科で研修し、12カ月は各自の希望に応じて選択可能です。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降。上限はない ・基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・造血器悪性腫瘍患者の診療に主体的に参加することにより、造血器悪性腫瘍の診断と標準的治療に習熟し、日本血液学会専門医に相当する臨床技能を得る。 ・治験担当医師として患者診療に関わり、治療開発の動向について習熟する。 ・上級医の指導のもと、臨床研究を立案・実践し、論文化する。
	研修内容	・がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨します。 ・2年コースは臨床各科のローテートが主体となります。 ・連携大学院制度を用いた学位取得が可能です。 ・研修期間中に、「日本血液学会専門医資格認定試験」を受験するために必要な症例数を経験することが可能です。また他科ローテートにより、「日本臨床腫瘍学会専門医資格認定試験」を受験するために必要な症例数を経験することが可能です。
	3年コース	・がん診療で必要とされる、抗がん剤治療や緩和ケアなど幅広い経験が可能です。さらに、臨床試験の企画やトランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能です。 ・原則として18カ月間は血液腫瘍科で研修し、18カ月は他の内科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートします。
2年コース	・原則として12カ月間は選択した血液腫瘍科で研修し、12カ月は他の内科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科などを、各自の希望に応じて選択してローテートします。	
レジデント 短期コース	対象者	・原則として総合内科専門医（基本領域専門医）取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・卒後年限に上下限なし
	研修内容	・血液腫瘍科所属で、基本的に他科ローテートは行いません。他科ローテート希望者は事前に相談が必要となります。 ・最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ・原則として3か月単位とする
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・医学部卒業後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年未満在籍します 放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などの診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

消化管内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済み、または取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・将来、日本の消化管がん薬物療法やゲノム医療分野を牽引する人材の育成を目標とし、消化管がんに関する臨床及び基礎の高度な知識・技術の習得をはかる。
	研修内容	・悪性腫瘍領域における治療開発やトランスレーショナルリサーチなど、高度な知識・技術を習得する。 ・外来診療も可能。 ・機会に応じて、臨床試験や医師主導治験の提案・企画・実践が可能。 ・連携大学院制度を用いた学位取得も可能。 ・原則として2年間の研修期間のうち12カ月間は選択した特定科で研修し、12カ月は自由選択。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降。上限はない ・基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・真に優れた消化管がん薬物療法の専門家（腫瘍内科医）の育成を目標とし、関連科のローテーション研修を含め、消化管がんやゲノム医療に関する臨床及び基礎の幅広い知識・技術の習得をはかる。
	研修内容	・がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨。 ・原則として、3年コースの3年目には外来診療も可能。 ・2年コースは臨床ローテート主体。 ・いずれのコースを選択しても、腫瘍内科医として必要な基礎知識を習得することができ、ローテートを行うことで、「日本臨床腫瘍学会専門医資格認定試験」を受験するために必要な症例数を経験することは可能。 ・連携大学院制度を用いた学位取得も可能。
	3年コース	・がん診療で必要とされる、薬物療法や緩和ケアなど幅広い経験が可能。さらに、臨床試験や医師主導治験の提案・企画・実践が可能であり、トランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能。 ・原則として18カ月間は選択した特定科で研修し、18カ月は他の内科、外科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。 ・3年在籍者の経験症例数（例）：肺癌20例、血液15例、消化管150例、乳癌15例、肝胆膵20例、婦人科腫瘍15例、肉腫など希少がん5例
2年コース	・原則として12カ月間は選択した特定科で研修し、12カ月は他の内科、外科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。	
レジデント 短期コース	対象者	・原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師 ・卒後年限に上下限なし
	研修内容	・消化管がん薬物療法症例を幅広く経験することが可能。 ・最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ※原則として3か月単位とする
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・医学部卒業後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年未満在籍します 外科、放射線診断科・放射線治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

消化管内視鏡科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 当センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み 上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	消化管内視鏡診療や内視鏡機器開発、トランスレーショナルリサーチに関する高度な知識、技能を習得すること。
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 研修期間は2年間 原則として、12 か月は消化管内視鏡科で診療に従事し、外来診療も可能。 残りの12 か月は自由で、トランスレーショナルリサーチや医療機器開発に携わることも可能、研究内容によっては、センター外の研修も可能。 機会があれば臨床試験の研究事務局なども経験できる。 連携大学院制度を用いた学位取得も可能。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降。上限はない 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修内容 (3年コース、 2年コース 共通)	<ul style="list-style-type: none"> がん診療や研究、機器開発など幅広い経験が出来る3年コースを推奨 2年コースは臨床ローテート主体 レジデント期間中には、消化管内視鏡学会専門医、消化器病学会専門医取得に必要な消化管内視鏡に関する症例数は経験することが可能 連携大学院制度を用いた学位取得も可能
	3年コース 【目標】	消化管内視鏡検査や各種治療の技術、知識の習得を中心として、がん診療や研究で必要とされる幅広い経験をすること。
	3年コース 【研修内容】	<ul style="list-style-type: none"> 原則として、18 か月は消化管内視鏡科で研修を行い、それ以外の期間は自由にローテート可能。 診療科のローテートだけでなく、内視鏡機器開発やトランスレーショナルリサーチのなどにも携わることが可能。 経験症例数目安：上部内視鏡検査 1500 件、大腸内視鏡検査 350 件、ESD(上部下部併せて) 100 件
	2年コース 【目標】	消化管内視鏡検査や各種治療の技術、知識の習得に特化したローテートを組み、集中的に研修すること。
	2年コース 【研修内容】	<ul style="list-style-type: none"> 原則として、12 か月から18 か月は、消化管内視鏡科で研修を行い、それ以外の期間は自由にローテート可能だが、肝胆膵内科(胆膵内視鏡)や病理を中心としたローテートを推奨する。 経験症例数目安：上部内視鏡検査 1500 件、大腸内視鏡検査 350 件、ESD(上部下部併せて) 60 件
レジデント 短期コース	対象者	<ul style="list-style-type: none"> 原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする 卒後年限に上下限なし
	研修目標	当院で行っている消化管内視鏡検査や各種治療の知識を習得すること。
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 最短3か月から最長1年の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする 基本的に他科ローテートは行わないが、期間によっては相談に応じることは可能。 内視鏡検査を実施することが可能だが、治療の実施については研修期間と本人の技量によって判断する。
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります <ul style="list-style-type: none"> 医学部卒業後3年目以降 専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

頭頸部内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 当センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み 上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 頭頸部がん薬物療法のリーダー的立場になれるように、新たな治療の開発、臨床研究を立案、実践できるようになること
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 悪性腫瘍領域における治療開発やトランスレーショナルリサーチなど、高度な知識・技能を修得する 外来診療も可能 機会に応じて、臨床試験や医師主導治験の事務局を担当する 連携大学院制度を用いた学位取得も可能 原則として2年間の研修期間のうち12 か月間は選択した特定科で研修し、12 か月は自由選択
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 自分で研究テーマを選択することが可能であり、先端医療開発センター(基礎研究)などで研究を実施することも可能 その他は、正規レジデントコースと同様
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降。上限はない 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 頭頸部がん患者に最適な治療方針・薬物療法の提供ができるようになること 臨床研究を立案できるようになること
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨 原則として、3年コースの3年目には外来診療も可能 2年コースは臨床ローテート主体 ローテーションはいずれの科を選択しても、腫瘍内科医として必要な基礎知識を習得することができ、「日本臨床腫瘍学会専門医資格認定試験」を受験するために必要な症例数を経験することは可能。 連携大学院制度を用いた学位取得も可能
	3年コース	<ul style="list-style-type: none"> がん診療で必要とされる、薬物療法や緩和ケアなど幅広い経験が可能。さらに、臨床試験の企画やトランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能。 原則として24 か月間は選択した特定科で研修し、12 か月には他の内科、頭頸部外科、放射線診断科・放射線治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療開発センター(基礎研究)などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。
	2年コース	<ul style="list-style-type: none"> 原則として12 か月間は選択した特定科で研修し、12 か月には他の内科、頭頸部外科、放射線診断科・放射線治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 頭頸部癌の薬物療法、さらに毒性の強い化学放射線療法の支持療法に精通することができる。特に化学放射線療法の完遂には、疼痛管理、感染管理、栄養管理など支持療法の実践が必須であるが、研修を通じて当院を離れても実践できるようになる。 頭頸部には発声・嚥下・咀嚼など生命活動にとって重要な機能があり、機能温存や容貌の変化など治療方針決定までのプロセスが非常に複雑ですが、他科との合同カンファレンスを通じて治療方針が理解できるようになる。 JCOG 頭頸部がんグループでは新たな標準治療を目指して臨床試験を立案し、中心的役割を果たしている。またわが国では頭頸部がんの新薬開発の拠点になっており、甲状腺がんも含めて数多くの治験(国際共同試験)も実施している。最新の治療開発、今後承認される薬剤を一定早く経験することができるのも大きな魅力である。 自分が興味を持ったテーマの臨床研究のプロトコル作成を通じて、自分で臨床研究を立案・実践できるようになる。 ※別冊資料(診療科紹介)もご参照下さい
レジデント 短期コース	対象者	<ul style="list-style-type: none"> 原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師 卒後年限に上下限なし
	研修目標	頭頸部がん患者に最適な治療方針・薬物療法の提供ができるようになること
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 診療科所属で、基本的に他科ローテートは行わない。ローテート希望者は事前に要相談。 最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 頭頸部癌の薬物療法、さらに毒性の強い化学放射線療法の支持療法に精通することができる。特に化学放射線療法の完遂には、疼痛管理、感染管理、栄養管理など支持療法の実践が必須であるが、研修を通じて当院を離れても実践できるようになる。 頭頸部には発声・嚥下・咀嚼など生命活動にとって重要な機能があり、機能温存や容貌の変化など治療方針決定までのプロセスが非常に複雑ですが、他科との合同カンファレンスを通じて治療方針が理解できるようになる。
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります <ul style="list-style-type: none"> 医学部卒業後3年目以降 専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

先端医療科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・総合内科専門医及びがん薬物療法専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・がん治療開発における高度な知識、技能を習得する ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者 ・機会に応じて、臨床研究や医師主導治験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年間は先端医療科、1年間は自由選択 ※ 最長1年まで先端医療開発センター、研究所での研修が認められる ※ 先端医療科3年レジデントコース修了者、もしくは、それと同等の知識と経験があるものは日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行うことが可能
	研修の特色	がん治療開発において一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上先端医療科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大24か月） ※ 消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、呼吸器内科、病理科、緩和医療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月以上を原則とする） ※ 最長1年まで先端医療開発センター、研究所、臨床研究コーディネーター室、その他連携する研究施設での研修が認められる ※ 原則として3年目以降に日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行うことが可能 ※ 当センターの社会人大学院制度（順天堂、慶応、慈恵医大等）を活用し、レジデントコース終了後がん専門修練医コースもしくは短期コースを選択肢し、研究の実績を基に学位取得も可能です。
	研修の特色	先端医療科研修で最も推奨されるコースです 幅広い分野・部署での診療及び研究経験をつむことが可能です がん薬物療法専門医の取得を目指すと同時に、開発治験の実際を知る事が可能です。 自分のアイデアを生かした臨床研究・治験を将来できるようになる人材を育てる事を目標としています。 国際学会、論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上先端医療科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大12か月） ※ 消化管内科、肝胆膵内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、呼吸器内科、病理科、緩和医療科等の希望診療科も研修可能（1診療科3か月を原則とする） ※ 最長1年まで先端医療開発センター、研究所での研修が認められる ※ 当センターの社会人大学院制度を活用し、学位取得を目指す方は3年コースをできるだけ選択して下さい。 ※ 日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を希望される方は3年コースをできるだけ選択して下さい。
	研修の特色	幅広い分野・部署での診療及び研究経験をつむことが可能です がん薬物療法専門医の取得を目指すと同時に、開発治験の実際を知る事が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として総合内科専門医及びがん薬物療法専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、がん治療開発（第1相試験）を経験することを目標としています
	研修内容	先端医療科に、最短3か月から最長1年の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

肝胆膵内科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・将来、本邦の肝胆膵がん診療をリードできるような人材の育成 ・本邦の肝胆膵内視鏡領域をリードできるような人材の育成
	研修内容	・研修期間のうち1年以上肝胆膵内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大12か月） ※ 消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、消化管内視鏡、放射線診断科等の希望診療科も研修可能（1診療科1-3か月を原則とする） ※ 3か月まで中央病院交流研修、肝胆膵良性疾病の院外研修等、東病院以外での研修が認められる。 ・化学療法、胆膵内視鏡（EUS, ERCP など）、超音波下処置（RFA、肝生検、PTBD、PTGBD など）など肝胆膵内科を幅広く、診療経験をつむことが可能。 ・原則として2年目に外来診療を行う（日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う）。 ・連携大学院制度を通じて学位取得も可能。 ・新規治療薬の開発への参加（臨床試験の計画、実施）、トランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能
	研修の特色	
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・総合内科専門医（基本領域専門医）または認定医取得済みもしくは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・肝胆膵がん診療に関する高度な知識・技術の習得、肝胆膵がんの基礎医学的な背景の理解をはかる。 ・専門医取得：がん薬物療法専門医、消化器病専門医、内視鏡専門医、肝臓専門医 ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	・肝胆膵がん診療を幅広く経験できる3年コースを推奨。 ・3年コースでは、3年目以降外来診療も可能。日本臨床腫瘍学会教育研修プログラムに則った外来研修を行う ・3年コースでは、臨床試験の計画、実施、トランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能 ・2年コースは臨床科ローテーションを主体とする。 ・研修期間のうち1年以上肝胆膵内科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大21か月） ※ 消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、先端医療科、病理科、消化管内視鏡、放射線診断科等の希望診療科も研修可能（1診療科1-3か月を原則とする） ※ 6か月まで先端医療開発センター、中央病院交流研修、肝胆膵良性疾病の院外研修等、東病院以外での研修が認められる ・化学療法、胆膵内視鏡（EUS, ERCP など）、超音波下処置（RFA、肝生検、PTBD、PTGBD など）など肝胆膵内科を幅広く、診療経験をつむことが可能。 ・連携大学院制度を通じて学位取得も可能。 （3年コース） ※ 3年在籍者の経験症例数（例1）：肝胆膵癌150例、胆膵内視鏡100例、消化器癌60例、呼吸器癌20例、乳癌20例、血液腫瘍10例など ※ 3年在籍者の経験症例数（例2）：肝胆膵癌150例、胆膵内視鏡100例、消化器癌50例、呼吸器癌15例、乳癌15例、血液腫瘍10例、消化管内視鏡50例など
	研修の特色	
連携大学院 コース (4~5年 コース)	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：がん薬物療法専門医、消化器病専門医、内視鏡専門医、肝臓専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶応、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭著者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年のレジデントコースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります。 ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます。 ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます。 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から基礎研究と臨床研究を繋ぐトランスレーショナル研究を開始します。
	研修の特色	がん薬物療法専門医、消化器病専門医、内視鏡専門医、肝臓専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修内容	・研修期間は、最短3か月から2年未満までの期間とする。原則として3か月単位とする ・化学療法、胆膵内視鏡（EUS, ERCP など）、超音波下処置（RFA、肝生検、PTBD、PTGBD など）など肝胆膵内科を幅広く、診療経験をつむことが可能。 ・※全体の在籍期間が2年以内であれば、他の診療科（消化管内科、呼吸器内科、乳腺・腫瘍内科、血液腫瘍科、造血幹細胞移植科、先端医療科、病理科、放射線診断科等）と組み合わせた研修も可能
専攻医 コース	対象者	日本内科専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・医学部卒業後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 外科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

緩和医療科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師 ※ 医師免許取得後経過年数の上限はない
	研修目標	・緩和医療を専門とする医師になるために必要ながん患者および家族の全人的苦痛の評価とその対応を修得する。 ・日本緩和医療学会の専門医を取得する。 ・緩和医療における研究を立案・遂行し、緩和医療分野においてリーダーシップを発揮できるようになる。
	研修内容	・原則として、2年間の研修期間のうち12カ月間以上は緩和医療科で研修し、残りの期間は精神腫瘍科、在宅療養支援診療所、内科、放射線診断科、放射線治療科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。 ・外来診療も可能である。 ・緩和医療分野における研究を立案・遂行する。連携大学院制度を用いた学位取得も可能である。
	研修の特色	緩和ケア病棟、緩和医療科外来、緩和ケアチーム、在宅緩和ケアにおいて専門的な研修を行い、緩和医療の専門家としての知識・技能を修得可能である。緩和医療分野の研究を十分なサポート体制のもとで立案・遂行することを経験し、緩和医療分野においてリーダーシップを発揮できる力を身につけることが可能である。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・緩和医療を専門とする医師になるために必要ながん患者および家族の全人的苦痛の評価とその対応を修得する。 ・日本緩和医療学会の専門医取得を目指す。
	研修内容	・がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨 ・原則として、3年コースの3年目には外来診療も可能 ・連携大学院制度を用いた学位取得も可能 ・原則として、18カ月間以上は緩和医療科で研修し、残りの期間は精神腫瘍科、在宅療養支援診療所、内科、放射線診断科、放射線治療科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。
	研修の特色	・2年コースは臨床ローテート主体 ・原則として、12カ月間以上は緩和医療科で研修し、残りの期間は精神腫瘍科、在宅療養支援診療所、内科、放射線診断科、放射線治療科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。 緩和ケア病棟、緩和医療科外来、緩和ケアチーム、在宅緩和ケアにおいて専門的な研修を行い、緩和医療の専門家として様々な場面に対応できる知識・技能が身につく。研修プログラムの構成は、個々の研修者に合わせて柔軟に対応可能である。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ※ 医師免許取得後経過年数の上限はない
	研修目標	・緩和医療に関する専門的な知識・技能を修得することを目標とする。
	研修内容	・おもに緩和ケア病棟、緩和ケアチームにおいて研修を行い、緩和医療に関する専門的な知識・技能を修得する。 ・研修期間は、最短3か月～最長1年とする。 ※ 原則として3か月単位とする。 ・原則として、他科のローテーションは行わない。
研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能である。	
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象とする 下記の全ての条件を満たした医師が対象となる ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標とする。
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍する。原則として、他科のローテーションは行わない。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能である。

精神腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本精神神経学会精神科専門医を取得済みもしくは取得見込みで、コンサルテーション・リエゾン精神医学に関する臨床経験を有する ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・精神腫瘍学領域における高度な知識と技能を習得し、治療開発を行う ・臨床試験の事務局を担当する
	研修内容	2年間の研修期間のうち1年以上精神腫瘍科に在籍する ※ 6ヶ月までは中央病院交換研修等、東病院以外での研修が認められる
	研修の特色	精神腫瘍学における高度な診療技術の他、治療開発に関する経験と知識を獲得する事を目指したコースです ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本精神神経学会専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得： 一般病院連携（リエゾン）精神医学専門医 ・臨床： 日本サイコロジコロジー学会認定登録精神腫瘍医 ・取得： がん領域におけるコンサルテーション・リエゾン精神医学領域における高度の知識・技能を習得する ・研究： コンサルテーション・リエゾン精神医学領域における臨床研究を経験し、国内外の関連学会等で発表する
	研修内容	研修期間のうち2年以上精神腫瘍科に在籍する。 ※ 緩和医療科等の希望診療科の研修可能 ※ 6ヶ月まで中央病院交流研修、精神科疾患の院外研修等東病院以外での研修が認められる
	研修の特色	精神腫瘍科研修で最も推奨されるコースです 精神腫瘍科の臨床・研究を幅広く経験し、今後の精神腫瘍学を牽引する人材を育成します ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本精神神経学会専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得： 一般病院連携（リエゾン）精神医学 ・専門医研究： コンサルテーション・リエゾン精神医学領域における臨床研究を経験し、国内外の関連学会等で発表する
	研修内容	研修期間のうち1年以上精神腫瘍科に在籍する。 ※ 緩和医療科等の希望診療科の研修可能 ※ 6ヶ月まで中央病院交流研修、精神科疾患の院外研修等東病院以外での研修が認められる
	研修の特色	精神腫瘍科の臨床・研究を幅広く経験し、今後の精神腫瘍学を牽引する人材を育成します ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 短期コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・現在がん診療に携わっている、又は今後がん診療に携わる予定の者 ・精神症状緩和に関する研修を希望する者
	研修目標	・がん患者・家族の精神症状緩和に関する基本的な診療経験を積むことを目標にしています
	研修内容	精神腫瘍科に、最短3か月から最長1年の期間に在籍します ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（緩和医療科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	今後がん診療に携わる医師を対象に、がん患者・家族の精神症状緩和に関する基本的な診療を経験することを目標にしています。研修期間は、研修者のニーズに応じて柔軟に調整ができます。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
専攻医 コース	対象者	日本精神神経学会専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・医師国家試験合格後3年目以降 ・日本精神神経学会専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	・短期間の研修で、精神科専門医に求められるコンサルテーション・リエゾン精神医学に関する診療経験を、がん領域を中心に積むことを目標としています
	研修内容	精神腫瘍科に、3ヶ月単位、最長2年間在籍します
	研修の特色	コンサルテーション・リエゾン精神医学に関する研修を積むコースです。がん専門施設である利点を活かして、がんに関連した精神医学的問題に関して集中的に研鑽を積むことができます。研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能である ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい

放射線診断科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・ 国立がん研究センターのレジデント修了者 ・ 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込みもしくは ・ 上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	がんに関する専門的な画像診断・IVRに特化した研修を行う。
	研修内容	2年間の研修期間。ルーチン業務としてCT読影に携わる他、希望する専門分野においてMRI、核医学、IVRの読影を行う。また、各種学会における発表や論文作成を目指した研究を平行して行う。
	研修の特色	原則として他科へのローテーションは行わない。 当院では臨床医との画像カンファランスが臓器別に多数行われており、画像カンファランスでの画像プレゼンテーションを積極的に行う。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降が対象で、上限はない ・ 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	CT・MRI・核医学・IVRの基本事項に関する研修と平行して、がんに関する専門的な画像診断について研修する。
	研修内容	3年コース、2年コースともにルーチン業務としてCT読影に携わる他、2～3ヶ月単位でMRI、核医学、IVRの研修を行う。希望に応じて研修内容の変更も可能。(例：IVRに特化した研修を行いたい、等) さらに3年コースでは半年を上限として内科、外科、病理科等、希望する診療科へのローテーションが可能。2年コースでは3ヶ月を上限として内科、外科、病理科等、希望する診療科へのローテーションが可能。
	研修の特色	当院では臨床医との画像カンファランスが臓器別に多数行われており、カンファランスでの画像プレゼンテーションを放射線診断科で担当している。画像診断のみならず画像プレゼンテーションの研修も行うことが可能である。
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする。
	研修目標	研修期間および研修医師の希望に応じて研修プログラムを編成する。
	研修内容	ルーチン業務としてCT読影に携わる他、ルーチン業務としてCT読影に携わる他、1～2ヶ月単位でMRI、核医学、IVRの研修を行う。希望に応じて研修内容の変更も可能。(例：IVRに特化した研修を行いたい、等) 他科へのローテーションは行わない。 最短3か月から最長2年未満の期間在籍する。 ※ 原則として3か月単位とする。
	研修の特色	
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降 ・ 専門医制度において東病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	研修期間および連携施設、研修医師の希望に応じて研修プログラムを編成する。
	研修内容	ルーチン業務としてCT読影に携わる他、ルーチン業務としてCT読影に携わる他、希望に応じてMRI、核医学、IVRの研修を行う。 他科へのローテーションは行わない。
	研修の特色	

放射線治療科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・ 当センターのレジデント修了者 ・ 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・ 上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・ 放射線腫瘍学の基礎となる腫瘍学および放射線腫瘍学の幅広い知識と治療技術の習得を目指す。 ・ 放射線治療の治療計画の基本からその応用である高精度放射線治療の知識および手技を習得する。
	研修内容	関連各科のローテーションは3年コースと同様に自由選択。2年の研修期間の1年以上の期間は放射線治療科にて研修することが望ましいが、研修目標などによって応相談。
	研修の特色	レジデント修了者に相当する経験と知識を有する5年以上の臨床経験を有する医師を対象とした研修年限2年のコースで、将来、放射線腫瘍学分野の指導的立場になり得る人材の育成を目的としています。指導医のもとで放射線腫瘍学の臨床ならびに高精度放射線治療の知識・技術の習得に努め、2年目には基礎および臨床研究または臨床試験を通じた治療開発の基礎を研修することが可能です。先端医療開発センターと連携して放射線生物および放射線腫瘍学に関連したトランスレーショナルリサーチも実施しているため、研究の基本的な手技習得から研究実施、成果の論文化などの指導も行っていきます。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降が対象（上限なし） ・ 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・ 放射線腫瘍学の基礎となる腫瘍学および放射線腫瘍学の幅広い知識と治療技術の習得を目指す。 ・ 放射線治療の治療計画の基本からその応用である高精度放射線治療の知識および手技を習得する。
	研修内容	関連各科のローテーションは自由選択。研修期間の50%以上の期間は放射線治療科にて研修することが望ましいが、研修目標などによって応相談。
	研修の特色	放射線治療科は、頭頸部癌、食道癌、肺癌、乳癌、前立腺癌などに対する根治的な放射線治療および骨転移を始めとする緩和的治療も数多く実施しており、加えて強度変調放射線治療や画像誘導放射線治療、定位放射線治療、呼吸同期照射などの高精度放射線治療技術も導入しています。局所進行癌では、術前・術後の放射線治療に加えて関連他科と連携して化学療法との併用も積極的に進めており、集学的治療の重要な一翼を担っています。そのため、腫瘍全般の治療適応の理解はもちろん集学的治療における放射線治療の役割および高精度放射線治療技術を研修するには最適な環境です。さらに日本で最初の病院設置型の陽子線治療があり、頭頸部癌、肺癌、前立腺癌などを中心に陽子線治療を行っているため、X線による放射線治療と陽子線治療の両者の適応や併用などによる治療選択の研修が同時にできる全国でも数少ない施設です。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降が対象（上限なし） ・ 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・ 放射線腫瘍学の基礎となる腫瘍学および放射線腫瘍学の幅広い知識と治療技術の習得を目指す。 ・ 放射線治療の治療計画の基本からその応用である高精度放射線治療の知識および手技を習得する。
	研修内容	関連各科のローテーションは3年コースと同様に自由選択。2年の研修期間の1年以上の期間は放射線治療科にて研修することが望ましいが、研修目標などによって応相談。
	研修の特色	放射線治療科は、頭頸部癌、食道癌、肺癌、乳癌、前立腺癌などに対する根治的な放射線治療および骨転移を始めとする緩和的治療も数多く実施しており、加えて強度変調放射線治療や画像誘導放射線治療、定位放射線治療、呼吸同期照射などの高精度放射線治療技術も導入しています。局所進行癌では、術前・術後の放射線治療に加えて関連他科と連携して化学療法との併用も積極的に進めており、集学的治療の重要な一翼を担っています。そのため、腫瘍全般の治療適応の理解はもちろん集学的治療における放射線治療の役割および高精度放射線治療技術を研修するには最適な環境です。さらに日本で最初の病院設置型の陽子線治療があり、頭頸部癌、肺癌、前立腺癌などを中心に陽子線治療を行っているため、X線による放射線治療と陽子線治療の両者の適応や併用などによる治療選択の研修が同時にできる全国でも数少ない施設です。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
レジデント 短期コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています ・ 原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・ 卒後年限に上下限なし
	研修目標	・ 放射線腫瘍学の基礎となる腫瘍学および放射線腫瘍学の幅広い知識と治療技術の習得を目指す。 ・ 放射線治療の治療計画の基本からその応用である高精度放射線治療の知識および手技をその期間に応じて習得する。
	研修内容	1年未満の研修期間の場合には、放射線治療科にて研修する。2年以上の研修期間の場合には、希望に応じて関連各科のローテーションは自由選択可能。最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	放射線治療科は、頭頸部癌、食道癌、肺癌、乳癌、前立腺癌などに対する根治的な放射線治療および骨転移を始めとする緩和的治療も数多く実施しており、加えて強度変調放射線治療や画像誘導放射線治療、定位放射線治療、呼吸同期照射などの高精度放射線治療技術も導入しています。局所進行癌では、術前・術後の放射線治療に加えて関連他科と連携して化学療法との併用も積極的に進めており、集学的治療の重要な一翼を担っています。そのため、腫瘍全般の治療適応の理解はもちろん集学的治療における放射線治療の役割および高精度放射線治療技術を研修するには最適な環境です。さらに日本で最初の病院設置型の陽子線治療があり、頭頸部癌、肺癌、前立腺癌などを中心に陽子線治療を行っているため、X線による放射線治療と陽子線治療の両者の適応や併用などによる治療選択の研修が同時にできる全国でも数少ない施設です。 ※別冊資料（診療科紹介）もご参照下さい
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・ 医学部卒業後3年目以降 ・ 日本医学放射線学会専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	・ 短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

呼吸器外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 国立がん研究センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み もしくは上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸器外科手術に関して、集学的治療を含めた高度な知識・技能を修得する 国内外の学会発表や論文発表などの学術活動を行う 臨床、学術面でレジデントの指導を行う
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 2年間の研修期間 外来診療も可能 臨床試験の企画やトランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能 研修中は病理診断科、他の外科、内科、放射線診断科・治療科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートする
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 連携大学院制度を用いた学位取得も可能
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降が対象で、上限はない 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標 (3年コース、 2年コース 共通)	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸器外科の手術、術前、術後管理、臨床研究の基礎を習得する 国内外の学会発表や論文発表などの学術活動を行う
	研修内容 (3年コース、 2年コース 共通)	<ul style="list-style-type: none"> がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨 いずれのコースを選択しても、「呼吸器外科専門医試験」を受験するために必要な症例数を経験することが可能。
	3年コース	<ul style="list-style-type: none"> 原則として6カ月間は病理診断科で研修し、30カ月は他の外科、内科、放射線診断科・治療科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。 臨床試験の企画やトランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能 3年間で200例以上執刀が可能（ローテーション期間によって差あり）
2年コース	<ul style="list-style-type: none"> 研修中は病理診断科、他の外科、内科、放射線診断科・治療科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートする 	
研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 連携大学院制度を用いた学位取得も可能 	
レジデント 短期コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています <ul style="list-style-type: none"> 原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする 卒後年限に上下限なし
	研修目標	呼吸器外科の手術、術前、術後管理、臨床研究の基礎を習得する
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 診療科所属で、基本的に他科ローテートは行わない。ローテート希望者は所属診療科内で要相談
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 研修期間は最短3カ月～最長1年間で任意に設定可能 ※原則として3か月単位とする
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降 専門医制度において東病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 呼吸器外科の手術、術前、術後管理、臨床研究の基礎を習得する 国内外の学会発表や論文発表などの学術活動を行う
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 診療科所属で、基本的に他科ローテートは行わない。ローテート希望者は所属診療科内で要相談
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 研修期間は最短3カ月～最長3年間で任意に設定可能

食道外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 当センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み 上記と同等の能力を有すると認められる医師
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 臨床：食道癌における当科の標準的術式の習得とこれ以外の術式の経験 専門医取得：食道外科専門医、内視鏡外科技術認定医の取得 研究：Peer review journalでの筆頭著者、全国学会での主題発表での演者
	研修内容	2年間の研修期間のうち、原則として2年間を通じて食道外科に在籍して、チーフレジデントとして他の食道外科レジデントの指導も含めて診療していただきます。 <ul style="list-style-type: none"> ※ 中央病院・食道外科での研修も可能。
	研修の特色	食道外科医としての自立を目指した研修であり、原則として当科での正規レジデント3年コースの履修が必須となります。標準術式である胸腔鏡下食道亜全摘術、腹腔鏡補助下胃管再建術、三領域郭清に加えて、これだけでは対応できないさまざまな症例に対する手術の修練を目標とします。またレジデントへの指導も含めて日々の診療活動を行っていただき、食道外科チームの病棟診療の中心として修練していただきます。 <ul style="list-style-type: none"> ※ 修練期間中の目安となる術者の経験症例数：腹部操作30例、胸部操作10例
レジデント 3年コース	対象者	原則として下記の全ての条件を満たした医師を対象としています <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降 日本外科学会 外科専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 臨床：食道癌における当科の標準的術式を習得 専門医取得：食道科認定医、消化器外科専門医の取得 研究：全国学会での主題発表での演者、Peer review journalでの筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち2年以上食道外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） <ul style="list-style-type: none"> ※ 頭頸部外科、胃外科、呼吸器外科、消化管内視鏡科、病理科などでの研修が可能です。 ※ 中央病院・食道外科での研修も可能。
	研修の特色	食道外科研修で最も推奨されるコースです その後に続くがん専門修練医としての研修につながるよう、当科における標準術式である胸腔鏡下食道亜全摘術、腹腔鏡補助下胃管再建術、三領域郭清術における頸部・腹部・胸部の術者としての技術を習得することを目標とします。 <ul style="list-style-type: none"> ※ 修練期間中の目安となる術者の経験症例数：頸部操作30例、腹部操作20例、胸部操作5例
レジデント 2年コース	対象者	原則として下記の全ての条件を満たした医師を対象としています <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降 日本外科学会 外科専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 臨床：食道癌における当科の標準的術式を経験 専門医取得：食道科認定医、消化器外科専門医の取得 全国学会での主題発表での演者
	研修内容	研修期間のうち1年以上食道外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択（最大9か月） <ul style="list-style-type: none"> ※ 頭頸部外科、胃外科、呼吸器外科、消化管内視鏡科、病理科などでの研修が可能です。 ※ 中央病院・食道外科での研修も可能。
	研修の特色	食道外科を中心に診療経験をつむことが可能です。それぞれの習得状況に応じて、食道癌手術における頸部・腹部・胸部操作の術者を経験することができます。 <ul style="list-style-type: none"> ※ 修練期間中の目安となる術者の経験症例数：頸部操作20例、腹部操作10例、胸部操作数例
レジデント 短期コース	対象者	日本外科学会 外科専門医資格を取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、食道癌手術および周術期管理の基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	食道外科に、最短3か月から最長1年のいずれかの期間在籍します <ul style="list-style-type: none"> ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	3ヶ月あたりでおおよそ40症例前後の食道切除再建術の診療経験が可能です。それぞれの習得状況に応じて、食道癌手術における頸部・腹部・胸部操作の術者を数例経験することができます。
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります <ul style="list-style-type: none"> 医学部卒業後3年目以降 専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

胃外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 当センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み 上記と同等の能力を有する医師
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 臨床的・学問的活動のみならず、チームを統率するリーダーシップも学びます。 内視鏡外科学会技術認定取得を目指した修練も可能です。
がん専門修練医 コース	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 臨床的・学問的活動のみならず、チームを統率するリーダーシップも学びます。 内視鏡外科学会技術認定取得を目指した修練も可能です。
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 研修期間は2年間です。 1年目は胃外科で研修します。 2年目は基礎または臨床研究に従事することが基本となっています。 東病院胃外科では年間約300例の胃がん外科手術を行っています。High-Volume Centerで研修することで、胃がん外科治療の考え方や技術を効率的に習得することが出来ます。 腹腔鏡下手術・ロボット手術を約85%以上の症例に対して行っており、質の高い手術手技は世界トップレベルの高い評価を得ています。これらの手技は既に定型化されており、レジデント・がん専門修練医への教育も行っています。努力次第では日本内視鏡外科学会技術認定取得にチャレンジすることも可能で、これまで数多くの先輩医師が技術認定を取得しています。(これまでに10名) 高度進行がんに対しては、消化管内科と連携し化学療法を併用して、治療成績の向上を目指しています。術前化学療法施行例、食道など他臓器浸潤例などの難度の高い手術(開腹・腹腔鏡)も多く経験できます。臨床試験・治験へ登録する症例も多く、一般病院では得られない腫瘍外科医としての真髄を学ぶことができます。 学会発表・論文作成などのチャンスも積極的に若手医師に与えています。学問的考察力・発信力を身につけることで、ワンランク上の外科医を目指すことが出来ます。また英語を用いた国際的な学術活動を重視しているのも特徴です。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降が対象で、上限はありません 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み 胃がん治療に興味を持っている外科志望の医師が対象です
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 腫瘍外科医としての基礎技術、腹腔鏡胃がん手術に必要な手術手技、高度進行胃がんに対する手技を習得するとともに、胃がん治療の知識の向上を目指します。 内視鏡外科学会技術認定取得を目指した修練も可能です
レジデント 3年コース・ 2年コース	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 腫瘍外科医としての基礎技術、腹腔鏡胃がん手術に必要な手術手技、高度進行胃がんに対する手技を習得するとともに、胃がん治療の知識の向上を目指します。 内視鏡外科学会技術認定取得を目指した修練も可能です
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 原則として18～24か月は胃外科で研修し、12～18か月は他の外科(食道外科・肝胆膵外科・大腸外科)、消化管内科、消化管内視鏡科などを各自の希望に応じて選択してローテートします。 原則として12～16か月は胃外科で研修し、8～12か月は他の外科(食道外科・肝胆膵外科・大腸外科)、消化管内科、消化管内視鏡科などを各自の希望に応じて選択してローテートします。 東病院胃外科では年間約300例の胃がん外科手術を行っています。High-Volume Centerで研修することで、胃がん外科治療の考え方や技術を効率的に習得することが出来ます。 腹腔鏡下手術・ロボット手術を約85%以上の症例に対して行っており、質の高い手術手技は世界トップレベルの高い評価を得ています。これらの手技は既に定型化されており、レジデント・がん専門修練医への教育も行っています。努力次第では日本内視鏡外科学会技術認定取得にチャレンジすることも可能で、これまで数多くの先輩医師が技術認定を取得しています。(これまでに10名) 高度進行がんに対しては、消化管内科と連携し化学療法を併用して、治療成績の向上を目指しています。術前化学療法施行例、食道など他臓器浸潤例などの難度の高い手術(開腹・腹腔鏡)も多く経験できます。臨床試験・治験へ登録する症例も多く、一般病院では得られない腫瘍外科医としての真髄を学ぶことができます。 学会発表・論文作成などのチャンスも積極的に若手医師に与えています。学問的考察力・発信力を身につけることで、ワンランク上の外科医を目指すことが出来ます。また英語を用いた国際的な学術活動を重視しているのも特徴です。
レジデント 短期コース	対象者	<ul style="list-style-type: none"> 原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする 卒後年限に上下限なし
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 胃外科所属で基本的に他科ローテートは行いませんが、ローテート希望者は相談に応じます。 研修期間は原則最短3カ月以上最長1年以内とします。 ※原則として3カ月単位とする 病院全体で設定される必須ローテーション(病理・臨床検査科、麻酔科)等については別途定めます。 内視鏡外科学会技術認定取得を目指した修練も可能です。
レジデント 短期コース	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 腫瘍外科医としての基礎技術、腹腔鏡胃がん手術に必要な手術手技、高度進行胃がんに対する手技を習得するとともに、胃がん治療の知識の向上を目指します。 内視鏡外科学会技術認定取得を目指した修練も可能です
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 東病院胃外科では年間約300例の胃がん外科手術を行っています。High-Volume Centerで研修することで、胃がん外科治療の考え方や技術を効率的に習得することが出来ます。 腹腔鏡下手術・ロボット手術を約85%以上の症例に対して行っており、質の高い手術手技は世界トップレベルの高い評価を得ています。これらの手技は既に定型化されており、レジデント・がん専門修練医への教育も行っています。努力次第では日本内視鏡外科学会技術認定取得にチャレンジすることも可能で、これまで数多くの先輩医師が技術認定を取得しています。(これまでに10名) 高度進行がんに対しては、消化管内科と連携し化学療法を併用して、治療成績の向上を目指しています。術前化学療法施行例、食道など他臓器浸潤例などの難度の高い手術(開腹・腹腔鏡)も多く経験できます。臨床試験・治験へ登録する症例も多く、一般病院では得られない腫瘍外科医としての真髄を学ぶことができます。 学会発表・論文作成などのチャンスも積極的に若手医師に与えています。学問的考察力・発信力を身につけることで、ワンランク上の外科医を目指すことが出来ます。また英語を用いた国際的な学術活動を重視しているのも特徴です。

肝胆膵外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする <ul style="list-style-type: none"> 国立がん研究センターのレジデント修了者 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み もしくは上記と同等の能力*を有する医師 ※消化器外科専門医取得かつ高難度肝胆膵外科手術を15例程度執刀経験
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 肝胆膵領域がんに対する外科治療における周術期管理、高度な手術手技の修得 また肝胆膵領域における腹腔鏡下手術のうち、特に腹腔鏡下肝切除や膵切除はその手技を学ぶ機会が少ないですが、当科は年間に行われる腹腔鏡下肝切除数国内トップで腹腔鏡手術の手技の習得、経験することもできます。腹腔鏡手術トレーニングもしっかり行っています。 レジデント研修以上に難易度の高い手術を実際に経験することができ、日本肝胆膵外科学会高度技能専門医、「日本内視鏡外科学会技術認定医」取得を目指します また肝胆膵外科レジデントをまとめるチーフ的役割も務めます。 学会発表では多数の臨床症例をまとめて解析・検討を行うことで一般の病院ではなかなか経験できない上級演題(シンポジウムやワークショップ、パネルディスカッションなど)で発表する機会も得られます。 ※別冊資料(診療科紹介)もご参照下さい
がん専門修練医 コース	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 肝胆膵領域がんに対する外科治療における周術期管理、高度な手術手技の修得 また肝胆膵領域における腹腔鏡下手術のうち、特に腹腔鏡下肝切除や膵切除はその手技を学ぶ機会が少ないですが、当科は年間に行われる腹腔鏡下肝切除数国内トップで腹腔鏡手術の手技の習得、経験することもできます。腹腔鏡手術トレーニングもしっかり行っています。 レジデント研修以上に難易度の高い手術を実際に経験することができ、日本肝胆膵外科学会高度技能専門医、「日本内視鏡外科学会技術認定医」取得を目指します また肝胆膵外科レジデントをまとめるチーフ的役割も務めます。 学会発表では多数の臨床症例をまとめて解析・検討を行うことで一般の病院ではなかなか経験できない上級演題(シンポジウムやワークショップ、パネルディスカッションなど)で発表する機会も得られます。 ※別冊資料(診療科紹介)もご参照下さい
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 原則として、2年間の研修期間のうち12ヶ月間は肝胆膵外科で研修し、12ヶ月間は自由選択で研究に従事して腫瘍外科学の学識を高める研修も可能。連携大学院制度を用いて大学院に入学し学位取得に向けた研究を行うこともできる。学位取得もしくはそれに準ずる研究、論文成果が既にあれば、がん専門修練医2年目も臨床に従事することが可能 消化器外科外科手術の中でも一般的に難易度が高いとされる肝胆膵領域の外科的治療を研修することができます。また肝胆膵領域における腹腔鏡下手術のうち、特に腹腔鏡下肝切除や膵切除はその手技を学ぶ機会が少ないですが、当科は年間に行われる腹腔鏡下肝切除数国内トップで腹腔鏡手術の手技の習得、経験することもできます。腹腔鏡手術トレーニングもしっかり行っています。 レジデント研修以上に難易度の高い手術を実際に経験することができ、日本肝胆膵外科学会高度技能専門医、「日本内視鏡外科学会技術認定医」取得を目指します また肝胆膵外科レジデントをまとめるチーフ的役割も務めます。 学会発表では多数の臨床症例をまとめて解析・検討を行うことで一般の病院ではなかなか経験できない上級演題(シンポジウムやワークショップ、パネルディスカッションなど)で発表する機会も得られます。 ※別冊資料(診療科紹介)もご参照下さい
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています <ul style="list-style-type: none"> 採用時に医師免許取得後3年目以降臨床研修制度を修了し、さらに外科研修を2-3年以上行っている者(外科専門医取得に必要な経験のうち腫瘍外科以外は経験していることが望ましい) 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修内容	<ul style="list-style-type: none"> 消化器がん、特に肝胆膵領域がんに対する診断から治療の知識や処置、手術手技の体系的修得 通常は研修中に外科専門医の取得可能。また卒後年数、症例経験数や業績によっては消化器外科専門医の取得も可能
レジデント 3年コース	研修目標	<ul style="list-style-type: none"> 消化器がん、特に肝胆膵領域がんに対する診断から治療の知識や処置、手術手技の体系的修得 通常は研修中に外科専門医の取得可能。また卒後年数、症例経験数や業績によっては消化器外科専門医の取得も可能
	研修の特色	<ul style="list-style-type: none"> 原則として、18ヶ月間(それ以上も可)は肝胆膵外科で研修し、その他の期間は肝胆膵内科、放射線診断科(画像診断、IVR)、病理・臨床検査科を2-3ヶ月の期間ずつローテーションする。さらに希望に応じて消化器がん関連の食道外科、胃外科、大腸外科、消化管内視鏡科なども選択し研修可能。 連携大学院制度を用いて大学院に入学し学位取得に向けた研究を行うこともできる。 肝胆膵領域の悪性腫瘍に対する外科的治療を行っています。治療成績向上のため化学療法や放射線治療を組み合わせた最新の難易度の高い手術も学ぶことができます。 また肝胆膵領域における腹腔鏡下手術のうち、特に腹腔鏡下肝切除や膵切除はその手技を学ぶ機会が少ないですが、当科は年間に行われる腹腔鏡下肝切除数国内トップで腹腔鏡手術の手技の習得、経験することもできます。腹腔鏡手術トレーニングもしっかり行っています。 当科では感染・栄養・リハビリなどの知識も常にupdateし難易度の高い手術を支える周術期管理を進歩させることを心がけています。こうした分野ではレジデント医師が各々テーマを以て改善に取り組み、その成果を患者に還元しています。 肝胆膵外科手術症例を豊富に経験しながら、様々な研究や国際学会も含めた学会発表も行うことができます。 ※別冊資料(診療科紹介)もご参照下さい

乳腺外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・ 国立がん研究センターのレジデント修了者 ・ 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み ・ もしくは上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・ 高度な乳がん診療及びがん診療に必要な知識と技術の習得
	研修内容	・ 乳がん領域における治療開発やトランスレーショナルリサーチ など、高度な知識・技能を修得する ・ 外来診療も可能 ・ 機会に応じて、臨床試験や医師主導治験の事務局を担当する ・ 連携大学院制度を用いた学位取得も可能 ・ 原則として2年間の研修期間のうち12カ月間は選択した特定科で研修し、12カ月は自由選択 ・ カウンターパートを外科、内科共に1人以上担当し学会発表、日本語や英語の論文を執筆して頂く。また、海外学会への演題を目標とするが、発表がなくても海外学会に参加する機会を保障する。 ・ 乳癌学会認定医、専門医の資格に必要な経験を積むことができる。 ・ HBOC 診療を通して人類遺伝学会、家族性腫瘍学会の専門医取得が可能。 ・ ロータートを行うことで、腫瘍内科として必要な基礎知識を習得することができ、「日本臨床腫瘍学会専門医資格認定試験」を受験するために必要な症例数を経験することは可能。

レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降（上限なし） ・ 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	乳がん診療及びがん診療に必要な知識と技術の習得
	研修内容 (3年コース、 2年コース 共通)	・ 乳がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨 ・ 3年コースの3年目には、外科系・内科系選択の上で外来診療も可能 ・ 2年コースは臨床ローテート主体 ・ 乳癌学会認定医、専門医の資格に必要な経験を積むことができる。 ・ 遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）の診療を通して人類遺伝学会、家族性腫瘍学会の専門医取得が可能。 ・ ロータートを行うことで、腫瘍内科として必要な基礎知識を習得することもできる。希望に応じて、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医の取得に必要な症例経験を積むことができる。 ・ 乳癌外科手術として ・ 乳がん専門医申請に必要な症例の経験が可能。さらに術者約100症例/年、約助手100症例/年の経験が可能で、安定した手術手技を取得できる。 ・ 生検技術の取得：エコー下・ステレオガイド下生検をカウンターパートと行い生検手技を取得 ・ カウンターパートとして外科・内科共に1人以上が担当し、研究の実施と学会発表や日本語英語の論文執筆の指導にあたる。 ・ 研修の最終年度には、San Antonio Breast Cancer SymposiumやAmerican Society of Clinical Oncology (ASCO) 年次集会へ派遣する。 ・ 連携大学院制度を用いた学位取得も可能
	3年コース	・ 乳がん薬物療法が必要とされる、抗がん剤治療や緩和ケアなど幅広い経験が可能。さらに、臨床試験の企画やトランスレーショナルリサーチなどにも携わることが可能。 ・ 原則として18カ月間は選択した特定科で研修し、18カ月は他の 乳腺外科、乳腺・腫瘍内科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、麻酔科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。
2年コース	・ 原則として12カ月間は選択した特定科で研修し、12カ月は他の乳腺外科、乳腺・腫瘍内科、放射線診断科・治療科、病理・臨床検査科、麻酔科、緩和医療科・精神腫瘍科、先端医療科、先端医療開発センター（基礎研究）などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。	

レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする 卒業年限に上下限なし 別途、乳腺専門医取得を目指すエキスパートを希望する方のための研修あり。
	研修目標	乳がん診療及びがん診療に必要な知識と技術の習得 乳腺専門医取得エキスパート： 乳がん診療に必要な知識と技術の習得や乳がん医療に関連した研究を行い新しいエビデンスを構築する。
	研修内容	・ 診療科所属で、基本的に他科ローテートは行わない。ローテート希望者は所属診療科内で要相談。 ・ 原則最短3カ月以上最長2年未満の間在籍する ・ ※原則として3カ月単位とする ・ 乳腺外科、乳腺・腫瘍内科では3カ月コースを設定する ・ 術者・助手合わせて30症例/月を経験可能 乳腺専門医取得エキスパート： ・ 乳癌学会認定医、専門医の資格に必要な経験を積むことができる。 ・ 遺伝性乳癌卵巣癌症候群（HBOC）の診療を通して人類遺伝学会、家族性腫瘍学会の専門医取得が可能。 ・ ロータートを行うことで、腫瘍内科として必要な基礎知識を習得することもできる。希望に応じて、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医の取得に必要な症例経験を積むことができる。 ・ 乳癌外科手術として ・ 乳がん専門医申請に必要な症例の経験が可能。さらに術者約100症例/年、約助手100症例/年の経験が可能で、安定した手術手技を取得できる。 ・ 生検技術の取得：エコー下・ステレオガイド下生検をカウンターパートと行い生検手技を取得 ・ カウンターパートとして外科・内科共に1人以上が担当し、研究の実施と学会発表や日本語英語の論文執筆の指導にあたる。 ・ 研修の最終年度には、San Antonio Breast Cancer SymposiumやAmerican Society of Clinical Oncology (ASCO) 年次集会へ派遣する。 ・ 連携大学院制度を用いた学位取得も可能 ・ 取得希望のものに関しては循環器手術等が可能な施設と連携して外科専門医を取得することも可能。 ・ 術者・助手合わせて30症例/月を経験可能

専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降 ・ 専門医制度において東病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修内容	・ 診療科所属で、基本的に他科ローテートは行わない。ローテート希望者は所属診療科内で要相談。 ・ 原則最短3カ月以上最長2年の間在籍する ・ ※原則として3カ月単位とする ・ 乳腺外科、乳腺・腫瘍内科では3カ月コースを設定する ・ 術者・助手合わせて30症例/月を経験可能

形成外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする 国立がん研究センターのレジデント修了者。 関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込み。 もしくは上記と同等の能力を有する医師。
	研修目標	・ 皮弁挙上からマイクロサージャリー、皮弁縫着、閉創まで安定した高度な手術手技を習得する。 ・ ささまざまな悪性腫瘍切除後の再建について、再建治療の手術計画を適切に立てられる。
	研修内容	研修期間は2年。 各種皮弁の挙上について、高度な質の高い手術手技を習得する。 マイクロサージャリーについて、高度な質の高い手術手技を習得する。 皮弁の縫着法について、高度な質の高い手術手技を習得する。 外来診療が可能。 原則として18カ月間は形成外科で研修し、6カ月は自由選択。 テーマを決めて研究をおこない、論文発表を行う。
	研修の特色	能力に応じて、さらに複雑で高度な再建手術について、術前計画から執刀、術後管理、術後評価に従事することで、より高いスキルの習得を目指す。 専門的知識や手術手技について、さらに高いレベルでの研修を行う。

レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする 採用時に医師免許取得後3年目以降が対象で、上限はない ・ 基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・ 再建を含む悪性腫瘍の治療に関する幅広い知識を習得する。 ・ 頭頸部がんについて専門的知識を習得する。 ・ 悪性腫瘍切除後の再建手術について、術前評価、術後管理を適切に行える。 ・ マイクロサージャリーによる遊離組織移植の手術手技を習得する。 ・ 機能的頭頸部再建術について理解し、その手術手技を習得する。 ・ 悪性腫瘍切除後の再建について、基本的な再建治療の手術計画を立てられる。
	研修内容	研修期間は3年または2年。 がん診療や研究を幅広く経験できる3年コースを推奨。 原則として3年コースの3年目には外来診療が可能。 2年コースは臨床ローテート主体。
	3年コース	原則として24カ月間は形成外科で研修し、6～12カ月は頭頸部外科、乳腺外科、その他の外科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。 頭頸部再建を含む各種のがんの再建症例について、主科とともに診療に当たり、がんの手術、化学療法、放射線治療、術前評価、術後管理を含むがん治療全体についての専門的知識を習得する。 各種皮弁の挙上について、段階的に研修し、基本に沿った質の高い手術手技を習得する。 マイクロサージャリーについて、段階的に研修し、基本に沿った質の高い手術手技を習得する。 基本的な皮弁の縫着法について、段階的に研修し、質の高い手術手技を習得する。 テーマを決めて研究をおこない、論文発表を行う。
2年コース	原則として18カ月間は選択した特定科で研修し、6カ月は頭頸部外科、乳腺外科、その他の外科などを、各自の希望に応じて選択してローテートする。 テーマを決めて研究をおこない、論文発表を行う。	
	研修の特色	おもに頭頸部再建、乳房再建について、段階的に研修を積み重ねることができ、皮弁挙上からマイクロサージャリー、基本的な皮弁の縫着まで幅広く習得できる。再建手術に関係するがん治療全体の専門的知識を習得できる。

レジデント 短期コース	対象者	・ 原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・ 卒業年限に上下限なし
	研修内容	研修期間は原則最短3カ月以上最長1年まで。延長は相談の上決定。 ※ 原則として3カ月単位とする 研修期間が短い研修内容は個別に相談して決定する。 基本的に他科ローテートは行わない。ローテート希望者は要相談。
	研修の特色	所属先の都合などで2年や3年の研修が不可能だが国立がん研究センター東病院で短期間でも研修したい医師のニーズに合わせた研修コース。

専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・ 採用時に医師免許取得後3年目以降 ・ 専門医制度において東病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医
	研修内容	研修期間は最短3カ月から最長3年まで。 研修内容および研修目標については基幹施設と相談の上決定する。

頭頸部外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下の全てに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本耳鼻咽喉科学会専門医を取得済みもしくは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・頭頸部がん手術の技術習得 ・頭頸部がん専門医取得 ・国内外の学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修年限は2年で、基本的に頭頸部外科を専攻。 ※ 頭頸部内科等で数ヶ月研修を受ける事も可能です。
	研修の特色	一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです 耳鼻咽喉科専門医研修施設および頭頸部がん専門医指定研修施設です。
レジデント 3年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・頭頸部がんに関する臨床および基礎の知識の習得 ・頭頸部がん手術の技術習得 ・国内外の学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上頭頸部外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択 ※ 頭頸部内科、放射線治療科、病理、食道外科等で研修可能 ※ 耳鼻咽喉科専門医・頭頸部がん専門医取得に向けた研修
	研修の特色	頭頸部外科研修だけでなくがん診療に関する幅広い診療経験をつむことができます。 国際学会、Peer review journal 論文執筆等の研究活動の機会も十分確保されています 耳鼻咽喉科専門医研修施設および頭頸部がん専門医指定研修施設です。
レジデント 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・頭頸部がんに関する臨床および基礎の知識の習得 ・頭頸部がん手術の技術習得 ・国内外の学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	研修期間のうち1年以上頭頸部外科に在籍し、それ以外の期間は自由選択 ※ 頭頸部内科、放射線治療科、病理、食道外科等で研修可能 ※ 耳鼻咽喉科専門医・頭頸部がん専門医取得に向けた研修
	研修の特色	頭頸部外科を中心に診療経験をつむことができます。 耳鼻咽喉科専門医研修施設および頭頸部がん専門医指定研修施設です。
連携大学院 コース (4～5年 コース)	対象者	・レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：頭頸部がん専門医 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大） ・研究：国際学会での筆頭演者、Peer review journal での筆頭著者
	研修内容	3年もしくは2年の正規コースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります ※ 前半の3年もしくは2年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から研究の指導を受けられます
	研修の特色	頭頸部がん専門医取得と同時に、学位取得を目指すコースです 国立がん研究センターの診療、研究に基づく、専門医取得、学位取得が可能です 耳鼻咽喉科専門医研修施設および頭頸部がん専門医指定研修施設です。
レジデント 短期コース	対象者	原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする
	研修目標	短期間の研修で、頭頸部がんの基本的な診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	頭頸部外科に、最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする ※ 全体の在籍期間が1年以内であれば、他の診療科（頭頸部内科、放射線治療科、病理、食道外科等）と組み合わせた研修も可能
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。 耳鼻咽喉科専門医研修施設および頭頸部がん専門医指定研修施設です。
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・医学部卒業後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

大腸外科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・外科専門医（関連するサブスペシャリティ領域専門医）を取得もしくはその能力を有する者 ・一般的な消化器外科医としての能力を有し、さらに大腸肛門外科医としての技能習得を目指す者 ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	・専門医取得：日本内視鏡外科学会技術認定医 取得、大腸肛門病学会専門医 取得 ・研究：臨床研究の立案やプロトコール作成に携わり、その研究結果を国内・国際学会で発表することや、Peer review journal での論文作成が可能。
	研修内容	大腸外科で2年間研修を行う。
	研修の特色	消化器外科医として一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです。 手術技術に関しては、研修2年間で日本内視鏡外科学会技術認定医取得に必要な技術の修得が可能。さらには難易度の高い直腸癌手術の技術修得を目指します。 外来診療にも従事し、大腸外科専門医として大腸癌の診断・治療の決定ができ、さらに他人への技術指導が可能な人材育成を目指す。 臨床研究では、国際学会・Peer review journal 論文執筆等の機会も十分確保されています
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象としています。 ・採用時に医師免許取得後3年目以降の者 ・外科専門医（基本領域専門医）または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・専門医取得：日本内視鏡外科学会技術認定医 取得を目指す ・研究：臨床研究の立案やプロトコール作成に携わり、その研究結果を国内・国際学会で発表することや、Peer review journal での論文作成が可能。
	研修内容	大腸外科を1年～約2年半まで在籍し、それ以外の期間は自由選択 必須ローテーションとして麻酔科、病理診断科の研修を行います。
	研修の特色	大腸肛門外科医として必要な手術技術や解剖知識の取得のみならず、臨床研究や医療機器開発など幅広い診療経験をつむことが可能です。 手術技術に関しては、研修期間で日本内視鏡外科学会技術認定医の取得に必要な技術を修得することが可能であり、さらに難易度の高い直腸癌手術の技術修得も目指します。 臨床研究では、国際学会・Peer review journal 論文執筆等の機会も十分確保されています。
レジデント 短期コース	対象者	以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としています ・原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・一般的な消化器外科医としての能力を有し、さらに大腸肛門外科医としての技能習得を目指す者
	研修目標	・大腸肛門外科医として大腸癌の診断・治療の決定ができ、大腸癌手術の技術獲得を目指す。 ・研究：期間や希望に応じて臨床研究に携わることが可能です。
	研修内容	大腸外科で最短3ヶ月以上、最長2年未満の研修が可能です。 ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	消化器外科医として一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象としたコースです。 手術技術に関しては、研修期間で日本内視鏡外科学会技術認定医取得に必要な技術や、より難易度の高い直腸癌手術の技術取得を目指す。
連携大学院 コース (4～5年 コース)	対象者	レジデント3年コースまたは2年コースに準ずる
	研修目標	・専門医取得：日本内視鏡外科学会技術認定医 取得、大腸肛門病学会専門医 取得を目指す。 ・学位取得：社会人大学院制度（順天堂、慶應、慈恵医大、長崎大）にて学位を取得する。 ・研究：臨床研究の立案やプロトコール作成に携わり、その研究結果を国内・国際学会で発表することや、Peer review journal での論文作成が可能。
	研修内容	3年のレジデントコースに、2年のがん専門修練医コースをあわせたプログラムです ※ がん専門修練医への採用には、再度選考試験があります ※ 前半の3年の研修期間は、当該コースの内容に準じます ※ 後半2年のがん専門修練医コースは、当該コースの内容に準じます 連携大学院制度を用いた学位取得を念頭に、1年目から臨床研究の指導を受けられます。 必須ローテーションとして麻酔科、病理診断科の研修を行います。
	研修の特色	大腸肛門外科医として必要な手術技術や解剖知識の取得のみならず、臨床研究や医療機器開発など幅広い診療経験をつむことが可能です。 手術技術に関しては、研修3年間で日本内視鏡外科学会技術認定医取得に必要な技術修得が可能であり、さらに難易度の高い直腸癌手術の技術修得も目指します。 臨床研究では、研究に基づく国際学会・Peer review journal 論文執筆等の機会もあり、学位取得が可能です。
専攻医 コース	対象者	外科学会外科専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです。 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります。 ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・日本外科学会専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療を経験し、手術手技の基本操作を修練することを目標としています。
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します。 大腸外科、食道外科、胃外科、肝胆膵外科、呼吸器外科、麻酔科など各科最短3か月単位でローテーション可能です。
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です。

泌尿器・後腹膜腫瘍科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済み、または取得見込み ・泌尿器外科治療に対して強い興味と情熱を持った外科医が対象上記同等の能力を有する医師
	研修目標	・泌尿器外科手術に関して、集学的治療を含めた高度な知識・技能を修得する ・国内外の学会発表や論文発表などの学術活動を行う
	研修内容	研修期間は2年間。外科手術の向上並びに、腫瘍内科、放射線科の知識をみにつけ、集学的泌尿器治療をみにつける。
	研修の特色	・ロボット手術・腹腔鏡下手術・ミニマム創内視鏡下手術を症例に応じて、施行しています。どの手術も定型化されており、ステップ毎にレジデント・がん専門修練医への教育を行いますので、効率よく習得することができます。泌尿器科腹腔鏡技術認定、ロボット手術プロクター認定、ミニマム創手術施設基準医の取得が一つの目安です。 ・骨盤外科として、大腸外科との合同手術が多く、高度な解剖学的理解と技術・経験を積み重ねることができます。当院の際立った特徴です。 ・前立腺癌術後尿失禁の外科治療など、QOL改善及び温存のための外科手術の開発・実践を行っています。 ・腫瘍内科（当院では、乳腺腫瘍科）、放射線科、病理と定期的なカンファレンスだけでなく、日常的な交流が多いので、泌尿器科腫瘍を多方面から学ぶことができます。 ・臨床試験へ登録する症例も多く、前向き臨床研究について学ぶことができます。 ・学会発表・論文作成能力を身に付け、学問的考察力・発信力を養い、アカデミックサーजनを目指す。
レジデント 3年コース・ 2年コース	対象者	原則として以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・基本領域専門医または認定医取得済みもしくは取得見込み
	研修目標	・泌尿器外科の手術、術前、術後管理、臨床研究の基礎を習得する ・国内外の学会発表や論文発表などの学術活動を行う
	研修内容 (3年コース)	・原則として24か月は泌尿器科で研修し、12か月は他の外科（主に大腸外科・肝胆膵外科）、乳腺腫瘍科、病理などを各自の希望に応じて選択してローテーションします。
	研修内容 (2年コース)	・原則として16か月は泌尿器科で研修し、8か月は他の外科（主に大腸外科・肝胆膵外科）、乳腺腫瘍科、病理などを各自の希望に応じて選択してローテーションします。
研修の特色	・ロボット手術・腹腔鏡下手術・ミニマム創内視鏡下手術を症例に応じて、施行しています。どの手術も定型化されており、ステップ毎にレジデント・がん専門修練医への教育を行いますので、効率よく習得することができます。泌尿器科腹腔鏡技術認定、ロボット手術プロクター認定、ミニマム創手術施設基準医の取得が一つの目安です。 ・骨盤外科として、大腸外科との合同手術が多く、高度な解剖学的理解と技術・経験を積み重ねることができます。当院の際立った特徴です。 ・前立腺癌術後尿失禁の外科治療など、QOL改善及び温存のための外科手術の開発・実践を行っています。 ・腫瘍内科（当院では、乳腺腫瘍科）、放射線科、病理と定期的なカンファレンスだけでなく、日常的な交流が多いので、泌尿器科腫瘍を多方面から学ぶことができます。 ・臨床試験へ登録する症例も多く、前向き臨床研究について学ぶことができます。 ・学会発表・論文作成能力を身に付け、学問的考察力・発信力を養い、アカデミックサーजनを目指す。	
レジデント 短期コース	対象者	・原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・卒後年数に上下限はありません
	研修目標	・泌尿器外科の手術、術前、術後管理、臨床研究の基礎を習得する。
	研修内容	・泌尿器科所属で基本的に他科ローテーションは行いませんが、ローテーション希望者は相談に応じます。 ・研修期間は原則3カ月単位とする ・最短3カ月から最長2年未満の期間在籍。 ・病院全体で設定される必須ローテーション（麻酔科）等については別途定めます。
	研修の特色	・ロボット手術・腹腔鏡下手術・ミニマム創内視鏡下手術を症例に応じて、施行しています。どの手術も定型化されており、ステップ毎にレジデント・がん専門修練医への教育を行いますので、効率よく習得することができます。泌尿器科腹腔鏡技術認定、ロボット手術プロクター認定、ミニマム創手術施設基準医の取得が一つの目安です。 ・骨盤外科として、大腸外科との合同手術が多く、高度な解剖学的理解と技術・経験を積み重ねることができます。当院の際立った特徴です。 ・前立腺癌術後尿失禁の外科治療など、QOL改善及び温存のための外科手術の開発・実践を行っています。 ・腫瘍内科（当院では、乳腺腫瘍科）、放射線科、病理と定期的なカンファレンスだけでなく、日常的な交流が多いので、泌尿器科腫瘍を多方面から学ぶことができます。 ・臨床試験へ登録する症例も多く、前向き臨床研究について学ぶことができます。 ・学会発表・論文作成能力を身に付け、学問的考察力・発信力を養い、アカデミックサーजनを目指す。
専攻医 コース	対象者	基本領域専門医取得のため研修中の専攻医を対象としたコースです 下記の全ての条件を満たした医師が対象となります ・医学部卒業後3年目以降 ・専門医制度の連携施設として国立がん研究センター東病院を選択した専攻医
	研修目標	短期間の研修で、基本的ながんの診療経験を積むことを目標としています
	研修内容	国立がん研究センター東病院に、3か月単位、最長2年間在籍します 希望に応じて関連各科等の診療科を、各科最短3か月単位でローテーションします
	研修の特色	研修者のニーズにあわせて柔軟な研修期間設定が可能です

病理・臨床検査科

がん専門修練医 コース	対象者	原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師を対象とする ・当センターのレジデント修了者 ・日本病理学会病理専門医取得者（関連するサブスペシャリティ領域専門医）等取得済みまたは取得見込み ・上記と同等の能力を有する医師
	研修目標	がんに対する適切な病理診断のみならず、臨床・基礎の橋渡しとなる次世代の病理医に必要な知識・技術を習得する。
	研修内容	・研修期間は2年間 ・当院病理科で実施する病理診断（生検・手術検体に対する病理組織診断、細胞診、剖検）を行いながら、病理診断医としてのスキルアップを行う。 ・原則として他科ローテーションは実施せず、病理科での研修のみを行う（希望により他科ローテーションを行うことも可能） ・専門臓器を中心とした研修プログラムの策定も可能。
	研修の特色	・病理組織標本を用いた研究、併設する先端医療開発センターでの基礎もしくはトランスレーショナル研究の実施も可能（内容については要事前相談） ・連携大学院制度を用いた学位取得も可能
レジデント 3年コース・ 2年コース		本邦における病理診断医のほとんどが専門医資格保有者であること、当院は新専門医制度における研修基幹病院ではないことを考慮し、採用時に医師免許取得後3年目時点で病理診断医を目指した研修希望者には以下の「専攻医コース」での応募を推奨する。
レジデント 短期コース	対象者	・病理を専門としない臨床科所属医師も可（病理診断に関する基礎的知識は有していることが望ましい） ・原則として基本領域専門医取得済みもしくは取得見込みの医師を対象とする ・卒後年数に上下限なし
	研修内容	・病理科所属で、基本的に他科ローテーションは行わない。 ・病理診断に求められる知識・技術を習得する。
	研修の特色	・研修者の希望に応じた柔軟な研修内容の設定が可能（たとえば特定臓器に限定した研修など） ・最短3か月から最長2年未満の期間在籍します ※ 原則として3か月単位とする
	研修の特色	※基本領域専門医取得のための研修を目的としたコース 以下の全ての条件を満たした医師を対象とする ・採用時に医師免許取得後3年目以降 ・新専門医制度において連携する基幹施設（H30.4 現在で国立がん研究センター中央病院および筑波大学）での病理専門医研修プログラム登録者
専攻医 コース		各基幹病院における研修プログラムの規定による

がん専門修練医からのメッセージ



国立がん研究センター東病院
第24期がん専門修練医
(外科系)

多賀麻里絵

がん診療、そして学びに集中できる環境

私は大学卒業後、都内の病院で初期研修を行い、都内の大学病院の形成外科に入局しました。形成外科の分野で私は特に頭頸部再建に関心があったので、多くの症例数を誇り数々の再建外科の先生方が学んでこられた当院での研修を望みました。医局の力添えもいただき、医師5年目で当院に短期レジデントとして入職し、今年度からがん専門修練医となりました。

当院の形成外科では再建手術を主に診療を行っています。特に頭頸部再建が多く、頭頸部外科と連携を取りながら術前計画から術後管理まで一貫して経験することができます。他にも乳腺外科や呼吸器外科、大腸外科との合同手術もあります。レジデントはほとんどの手術に参加します。

また、希望があれば他科をローテートすることができ、私は頭頸部外科を3か月間ローテートしました。再確認することや新たな視点から考えることがたくさんあり、癌手術の再建に対する理解は間違いなく深まりました。再建に必要な解剖は複雑で、手術手技も決して容易ではないですが、診療および自己研鑽に集中できる恵まれた環境であるため、一つ一つ確実に、知識や技術の習得が可能で、熱心な指導医、専門リハビリスタッフ、そして志の高いレジデント仲間と囲まれ、とても濃密な時間を過ごすことができます。興味のある方は是非当院での研修をご検討ください。お待ちしております。



国立がん研究センター東病院
第24期がん専門修練医
(内科系)

中村 能章

やりがいを見つけられる病院

私は大阪大学を卒業し、天理よろづ相談所病院で初期研修を終え、亀田総合病院の腫瘍内科で後期研修を行いました。腫瘍内科医として様々ながん種の患者さんを診療していく中で、自らががん診療の発展に少しでも貢献したいと考え、卒後6年目で国立がん研究センター東病院消化器内科にレジデントとして入職しました。

東病院は臨床・研究ともに凄まじい activity があり、医師だけでなく院内の全てのスタッフが、患者さんに最善の治療を届けること、そしてがん治療を少しでも発展させることに熱いパッションを持っています。非常に多くの患者さんが東病院で治療を受けておられ、レジデントも入院・外来を通じて豊富な臨床経験を積むことが可能です。また、多くの臨床試験や治験が行われており、様々な新しい薬剤や治療に触れることができます。さらに、レジデント自ら後ろ向き臨床研究から治験まで幅広い研究に主体的に関わることができ、学会報告や論文執筆の機会もたくさんあります。

東病院のレジデントには約1年間のローテーション期間があり、他の科をローテーションして、専門外の臓器のがん種や支持療法についても最新の知識を得ることができますし、薬物療法専門医の取得のために十分な症例を経験することができます。なお、私のローテーションは少し変わっており、1年間、丸々基礎研究をさせていただきました。おかげで、分子生物学の基本について学ぶことができましたが、このような自由なローテーションで研修させてもらえる点も東病院のいいところです。

当院はどんな方でもウェルカムです。実際に私のように内視鏡ができない腫瘍内科でも消化器内科に暖かく迎え入れてもらってますし、基礎研究など自由な研修もさせてもらっています。そしてスタッフ・レジデント同士、切磋琢磨しつつ協力し合える環境も整っています。誰でも必ず、やりがいのあることを見つけられる、そういう病院です。

レジデントからのメッセージ



国立がん研究センター東病院
第25期レジデント正規コース
(外科系)

勝又 信哉

限りのない研修を

私は群馬大学を卒業し、都内の三井記念病院で外科レジデントとして5年間の初期・後期研修を行った後、6年目より東病院呼吸器外科で研鑽を積んでいます。

当科は国内最高峰の手術件数も然ることながら、リサーチマインドを重視し、病理科や基礎系研究棟との共同研究も多く実施しており、臨床・研究のバランスのとれた環境であることから応募しました。

実際に多くの手術執刀機会を得るほか、国内外での学会発表や基礎研究、論文執筆、臨床試験の立案過程のプロセスに至るまで、科全体でレジデントの教育・指導に非常に力を注いでおり、我々レジデントの学びは日々尽きることがありません。また科内での休日や家庭の時間に対する理解も深く、私も週末の時間を友人や家族とともに有意義に過ごすことができている。

私は大学医局に属していませんが、連携大学院を通して学位を取得できることも当院の魅力の一つです。多くのレジデントが当院での研究を基に連携大学院制度を使用して学位取得を行っています。

しかし、一番の魅力は同年代のレジデントが一堂に会し、切磋琢磨しながらこの研修を通して互いに成長できることだと思います。

自身の探求心・向上心を持って臨めば、当院での研修に限りはありません。是非一度見学にいらしてその雰囲気を感じ取ってください。お待ちしております。



国立がん研究センター東病院
第25期レジデント正規コース
(内科系)

三島 沙織

貴重な経験ができる研修プログラム

私は東京慈恵会医科大学を卒業後、神奈川県・東京都内の市中病院で初期研修・後期研修を行いました。後期研修は一般消化器内科医として研修いたしました。その中でがん診療に興味を持ち、卒後7年目に国立がん研究センター東病院消化器内科に来ました。

スタッフによるレジデントの教育はとても充実しており、診療科の垣根を超えて様々な専門分野の先生方から指導を受ける機会があります。さらに、国内・国際学会での発表や、研究についても熱意ある指導の下取り組んでおり、ステップアップできるチャンスが多い環境です。

また、レジデントプログラムでは一定の期間、希望の科をローテートすることができ、病理診断や消化器内科、緩和医療科など、がんに関連する科をローテートすることで知識が深まり、新たな視点で診断や治療に携わることができます。

そして、志の高い同年代の医師が集まり、科の枠を超えて仲良く、互いに成長できる雰囲気よさが、東病院の魅力です。忙しい日々のなか、支えあえる仲間と巡り会えることは、かけがえのない経験です。

是非一度見学に来て頂き、東病院の雰囲気を感じて下さい。ここでのレジデント生活は貴重な経験になること間違いありません。皆さんを心よりお待ちしております。

がん専門修練医募集要項

1. 応募資格

原則として以下のいずれかに該当する一定レベル以上の経験と実績を有する医師

- (1) 国立がん研究センターレジデント研修を修了した者、または修了見込みの者
- (2) 各コースに関連するサブスペシャリティ領域専門医等取得済みまたは取得見込みの者
- (3) 上記と同等の能力を有する者

注：詳細は各研修課程のページを参照すること

注：厚生労働省の開催指針に従った「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」を修了している者が望ましい。未受講者については採用後、当センター等で実施する緩和ケア研修会を受講することとする。

2. 募集人数（予定）

中央病院 20 名程度 東病院 15 名程度

3. 出願手続

(1) 出願書類を研修希望施設（中央病院または東病院）までご郵送ください

（中央病院）〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター教育連携室 教育連携係

（東病院）〒277-8577 千葉県柏市柏の葉 6-5-1

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター教育連携室 教育連携係

(2) 締切日 平成 30 年 9 月 20 日（木）必着

(3) 必要書類

ア．願書（所定様式・A3 判）

イ．健康診断書（所定様式）（1 年未満の診断結果）

抗体検査確認表（所定様式）（数値不明は「不明」と記載）

抗体検査結果写し

ウ．上司または指導者の推薦状（所定様式）

エ．医師免許証の写し（A4 判に縮小）

オ．大学（医学課程）卒業証書の写し（A4 判に縮小）または卒業証明書

カ．在職証明書（臨床医学系大学院の在籍証明書も可。病理部門の志望者は不要）

キ．手術経験記載表（所定様式）

（外科・外科系部門の志望者のみ提出。一般外科術式の経験がない場合は空欄に専門分野の経験術式名・経験数を記入すること）

ク．「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」修了証書の写し（修了者のみ）

4. 選考方法

書類審査および面接試験

※応募者多数の場合には書類にて一次選考を行います

※一次選考の結果および面接試験の案内は Email 等により通知いたします

5. 選考日時

（中央病院）平成 30 年 10 月 10 日（水）

（東病院）平成 30 年 10 月 9 日（火）

6. 選考会場

（中央病院）国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院 管理棟 会議室
東京都中央区築地 5-1-1

（東病院）国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院 会議室
千葉県柏市柏の葉 6-5-1

7. 合格発表

平成 30 年 11 月初旬（予定）

※結果は郵送にて通知いたします。電話でのお問い合わせには対応いたしませんのでご了承ください。

8. 研修期間

2 年間（平成 31 年 4 月 1 日～平成 33 年 3 月 31 日）

9. 勤務

研修課程に基づき、指導医のもとで高度な知識と技術の習得、開発に努め、患者の診察に従事する（1 年目には宿日直勤務、2 年目には研究を含む）。

10. 処遇等

(1) 身分 非常勤職員（医師）

(2) 手当 国立研究開発法人国立がん研究センター非常勤職員就業規則、国立研究開発法人国立がん研究センター非常勤医師及び研究員給与規程に基づき支給する。
（平成 30 年度給与支給見込み額 384,000 円/月額 *各種手当は除く）

(3) 保険 社会保険（厚生年金・健康保険・雇用保険）に加入します。

(4) 宿舍 （中央病院）単身者用の宿舍（有料）空室時利用できます。
（東病院）単身者用・世帯用の宿舍（有料）利用できます。

(5) 修了 所定の研修修了時に修了証書を交付します。

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター 教育連携室 教育連携係

（共通）E-mail : kyoiku-resi@ncc.go.jp

（中央病院）
〒104-0045 東京都中央区築地 5-1-1
TEL:03-3542-2511（内線 2203）

（東病院）
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉 6-5-1
TEL:04-7133-1111（内線 5551）

研修内容等の最新情報はホームページをご確認ください <https://www.ncc.go.jp/>
国立がん研究センターホームページ>（中央病院・東病院）>人材募集>レジデント募集情報

レジデント(3年コース・2年コース・連携大学院コース)・専攻医(基幹施設型) 募集要項

1. 応募資格

レジデント(3年コース・2年コース・連携大学院コース)

原則として以下の全ての条件を満たした医師

- (1) 採用時に医師免許取得後3年目以降の者
 - (2) 基本領域専門医または認定医等取得済みもしくは取得見込みの者
- 歯科部門については採用時に歯科医師免許取得後3年目以降の者

専攻医(基幹施設型)

以下の全ての条件を満たした医師

- (1) 採用時に医師免許取得後3年目以降の者
- (2) 専門医制度において中央病院を基幹施設として選択した専攻医

注: 詳細は各研修課程のページを参照すること

注: 厚生労働省の開催指針に従った「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」を修了している者が望ましい。未受講者については採用後、当センター等で実施する緩和ケア研修会を受講することとする。

2. 募集人数(予定)

中央病院 30名程度 東病院 20名程度

3. 出願手続

(1) 出願書類を研修希望施設(中央病院または東病院)までご郵送ください

- (中央病院) 〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1
国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター教育連携室 教育連携係
- (東病院) 〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター教育連携室 教育連携係

(2) 締切日 平成30年9月20日(木) 必着

(3) 必要書類

- 願書(所定様式・A3判)
- 健康診断書(所定様式)(1年未満の診断結果)
抗体検査確認表(所定様式)(数値不明は「不明」と記載)
抗体検査結果写し
- 上司または指導者の推薦状(所定様式)
- 医師免許証の写し(A4判に縮小)(歯科部門については歯科医師免許証の写し)
- 大学(医学課程、歯科部門は歯学課程)卒業証書の写し(A4判に縮小)または卒業証明書
- 在職証明書(臨床医学系大学院の在籍証明書も可。病理部門の志望者は不要)
- 手術経験記載表(所定様式)
(外科・外科系部門の志望者のみ提出。一般外科術式の経験がない場合は空欄に専門分野の経験術式名・経験数を記入すること)
- 「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」修了証書の写し(修了者のみ)

4. 選考方法

書類審査、筆記試験および面接試験(応募状況により一部省略有)

※応募者多数の場合には書類にて一次選考を行います

※一次選考の結果および試験の案内はEmail等により通知いたします

5. 選考日時

(中央病院) 平成30年10月9日(火)

(東病院) 平成30年10月10日(水) 注: 2年コース応募者について、4月以外の研修開始を希望する場合には調整を行う

6. 選考会場

(中央病院) 国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院 管理棟 会議室
東京都中央区築地5-1-1

(東病院) 国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院 会議室
千葉県柏市柏の葉6-5-1

7. 合格発表

平成30年11月初旬(予定)

※結果は郵送にて通知いたします。電話でのお問い合わせには対応いたしませんのでご了承ください。

8. 研修期間

3年間(平成31年4月1日~平成34年3月31日)または2年間(基本として平成31年4月1日~平成33年3月31日)

注: 連携大学院コースについては上記期間修了後に続けて2年程度の研修を行う

9. 勤務

研修課程に基づき、指導医のもとで幅広い知識と技術の習得、開発に努め、患者の診察に従事する(宿日直勤務を含む)。

10. 処遇等

- (1) 身分 非常勤職員(医師・歯科医師)
- (2) 手当 国立研究開発法人国立がん研究センター非常勤職員就業規則、国立研究開発法人国立がん研究センター非常勤医師及び研究員給与規程に基づき支給する。
(平成30年度給与支給見込み額 336,000円/月額 *各種手当は除く)
- (3) 保険 社会保険(厚生年金・健康保険・雇用保険)に加入します。
- (4) 宿舍 (中央病院) 単身者用の宿舍(有料)空室時利用できます。
(東病院) 単身者用・世帯用の宿舍(有料)利用できます。
- (5) 修了 所定の研修修了時に修了証書を交付します。

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター 教育連携室 教育連携係

(共通) E-mail: kyoiku-resi@ncc.go.jp

(中央病院)
〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1
TEL:03-3542-2511(内線2203)

(東病院)
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
TEL:04-7133-1111(内線5551)

研修内容等の最新情報はホームページをご確認ください <https://www.ncc.go.jp/>
国立がん研究センターホームページ>(中央病院・東病院)>人材募集>レジデント募集情報

レジデント（短期コース）・専攻医（連携施設型）募集要項

注：専攻医コース（基幹施設型）志望者は86・87頁の募集要項を参照すること

1. 応募資格

レジデント（短期コース）

原則として基本領域専門医または認定医等取得済みもしくは取得見込みの医師
歯科部門については採用時に歯科医師免許取得後2年目以降の者

専攻医（連携施設型）

以下の全ての条件を満たした医師

- (1) 採用時に医師免許免許取得後3年目以降の者
- (2) 専門医制度において中央病院・東病院が連携施設として登録されている基幹施設で研修中の専攻医

注：詳細は各研修課程のページを参照すること

注：厚生労働省の開催指針に従った「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」を修了している者が望ましい。未受講者については採用後、当センター等で実施する緩和ケア研修会を受講することとする。

2. 募集人数

中央病院・東病院 若干名 *前年度レジデント短期コース採用実績 中央病院 24名 東病院 11名

3. 出願手続

出願書類郵送前に、氏名、出身大学名、卒業年、卒後年数、現所属機関名、研修希望先（中央もしくは東病院）、希望コース・希望研修開始月、希望研修期間を教育連携係までメールにてご連絡ください。（メール受付締切日については当センターHPをご参照ください）

研修者数に余裕がある場合の採用が原則となるため、状況により受け付けできないこともございます。あらかじめご了承ください。

- (1) 出願書類を研修希望施設（中央病院または東病院）までご郵送ください

（中央病院）〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター教育連携室 教育連携係

（東病院）〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター教育連携室 教育連携係

- (2) 締切日 4月・7月開始コース：平成30年10月16日（火）

10月・1月開始コース：決定次第当センターHPに掲載します。

- (3) 必要書類

ア．願書（所定様式・A3判）

イ．健康診断書（所定様式）（1年未満の診断結果）

抗体検査確認表（所定様式）（数値不明は「不明」と記載）

抗体検査結果写し

ウ．上司または指導者の推薦状（所定様式）（専攻医コース（連携施設型）の志望者は不要）

エ．医師免許証の写し（A4判に縮小）（歯科部門は歯科医師免許証の写し）

オ．大学（医学課程、歯科部門は歯学課程）卒業証書の写し（A4判に縮小）または卒業証明書

カ．在職証明書（臨床医学系大学院の在籍証明書も可。病理部門の志望者は不要）

キ．手術経験記載表（所定様式）

（外科・外科系部門の志望者のみ提出。一般外科術式の経験がない場合は空欄に専門分野の経験術式名・経験数を記入すること）

ク．「がん診療に携わる医師に対する緩和ケア研修会」修了証書の写し（修了者のみ）

4. 選考方法

レジデント（短期コース） 書類審査および面接試験

注：応募者多数の場合には書類にて一次選考を行います

注：一次選考の結果および面接試験の案内はEmail等により通知いたします

専攻医（連携施設型） 面接

注：面接の日程は調整後、Email等により通知いたします

5. 選考日時

4月・7月開始コース：（中央病院）平成30年10月29日（月）

（東病院）平成30年10月30日（火）

10月・1月開始コース：平成31年7月下旬予定

6. 選考会場

（中央病院）国立研究開発法人 国立がん研究センター中央病院 管理棟 会議室

東京都中央区築地5-1-1

（東病院） 国立研究開発法人 国立がん研究センター東病院 会議室

千葉県柏市柏の葉6-5-1

7. 合格発表

4月・7月開始コース：平成30年11月下旬（予定）

10月・1月開始コース：平成31年8月下旬（予定）

※結果は郵送にて通知いたします。電話でのお問い合わせには対応いたしませんのでご了承ください。

8. 研修期間

研修コースにより異なる。（最短3ヶ月、最長2年未満）

注：記載の研修期間以上の研修延長は不可とする

注：専攻医については各学会の定める規定も考慮し調整を行う

9. 勤務

研修課程に基づき、指導医のもとで幅広い知識と技術の習得、開発に努め、患者の診療に従事する（宿日直勤務を含む）。

10. 処遇等

- (1) 身分 非常勤職員（医師・歯科医師）

- (2) 手当 国立研究開発法人国立がん研究センター非常勤職員就業規則、国立研究開発法人国立がん研究センター非常勤医師及び研究員給与規程に基づき支給する。

（平成30年度給与支給見込み額 336,000円/月額 *各種手当は除く）

- (3) 保険 社会保険（厚生年金・健康保険・雇用保険）に加入します。

- (4) 宿舍 （中央病院）単身者用の宿舍（有料）空室時利用できます。
（東病院） 単身者用・世帯用の宿舍（有料）利用できます。

- (5) 修了 所定の研修修了時に修了証書を交付します。

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター 教育連携室 教育連携係

（共通）E-mail：kyoiku-resi@ncc.go.jp

（中央病院）

（東病院）

〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1

〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1

TEL:03-3542-2511（内線2203）

TEL:04-7133-1111（内線5551）

研修内容等の最新情報はホームページをご確認ください <https://www.ncc.go.jp/>

国立がん研究センターホームページ>（中央病院・東病院）>人材募集>レジデント募集情報

採用試験日程





平成31年度 がん専門修練医・レジデント・専攻医 採用試験日程

試験の種類	出願書類締切日	選考日
がん専門修練医	平成30年9月20日(木)	【中央病院】平成30年10月10日(水) 【東病院】平成30年10月9日(火)
レジデント (3年コース・2年コース・連携大学院コース) 専攻医(基幹施設型)	平成30年9月20日(木)	【中央病院】平成30年10月9日(火) 【東病院】平成30年10月10日(水)
レジデント(短期コース) <4月・7月開始>	平成30年10月16日(火)	【中央病院】平成30年10月29日(月) 【東病院】平成30年10月30日(火)
レジデント(短期コース) <10月・1月開始>	平成31年7月中旬予定	平成31年7月下旬予定

* 詳しくは募集要項をご覧ください。

交通案内

築地キャンパス

-  中央病院
-  研究所
-  社会と健康研究センター
-  がん対策情報センター



〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1
TEL 03-3542-2511

- ・都営地下鉄 大江戸線 築地市場駅 A3 番出口から徒歩1分
- ・東京メトロ 日比谷線 築地駅 2 番出口から徒歩5分
- ・都営地下鉄 浅草線 東銀座駅 6 番出口から徒歩5分
- ・東京メトロ 有楽町線 新富町駅 4 番出口から徒歩10分

柏キャンパス

-  東病院
-  先端医療開発センター



〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
TEL 04-7133-1111

- ・つくばエクスプレス 柏の葉キャンパス駅西口から、東武バス(国立がん研究センター経由) 江戸川台駅東口行きまたは柏の葉公園循環行き6分 国立がん研究センター下車またはタクシー4分
- ・JR 常磐線・東京メトロ千代田線・東武野田線 柏駅西口から、東武バス国立がん研究センター行き30分またはタクシー20分
- ・東武アーバンパークライン 江戸川台駅東口から、東武バス(国立がん研究センター経由) 柏の葉キャンパス駅西口行き10分 国立がん研究センター下車またはタクシー7分
- ・羽田空港から、東武・京浜急行高速バス柏駅西口行き1時間15分
- ・常磐自動車道 柏IC. 千葉方面出口から 国道16号線へ500m先を右折5分

国立研究開発法人 国立がん研究センター 人材育成センター 教育連携室 教育連携係

(共通) E-mail : kyoiku-resi@ncc.go.jp

(中央病院)
〒104-0045 東京都中央区築地5-1-1
TEL:03-3542-2511 (内線 2203)

(東病院)
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉6-5-1
TEL:04-7133-1111 (内線 5551)

研修内容等の最新情報はホームページをご確認ください <https://www.ncc.go.jp/>

国立がん研究センターホームページ>(中央病院・東病院)>人材募集>レジデント募集情報



国立研究開発法人

国立がん研究センター
National Cancer Center Japan

<https://www.ncc.go.jp/>